

久泉遺跡発掘調査報告 I

EXCAVATION REPORT OF THE HISAIZUMI SITE I



平成15年度 一般国道359号砺波東バイパス建設工事に先立つ
埋蔵文化財調査報告書

2004年 3月

富山県 砧波市教育委員会



巻頭カラー図版1 縄文人“なりわい”の道具 打製石斧



卷頭カラー図版2 久泉遺跡出土遺物集合写真



巻頭カラー図版3 散村に広がる久泉遺跡

序

砺波市は、富山県西部の砺波平野のほぼ中央部、大部分が庄川により形成された扇状地上に位置しています。砺波市は、将来の都市像を「散居に広がる 快適都市 となみ」とし、まちづくりの基本理念を「人すこやか 心なごやか 緑さわやか」と定め、文化遺産である散村の保護・活用を図るとともに自然との調和をもとめ、住民が安心して暮らせる住みよい都市をめざしています。

このたび市内を東西に横断する一般国道359号砺波東バイパスを建設することとなりました。この道は、富山と金沢を結ぶ主要な道路として市民生活に欠くことのできないものとなっており、バイパス建設が急務となっていました。

それに先立ち平成12年度に分布調査、平成14年度に試掘調査を行ったところ、縄文時代をはじめとして、古代、中世の遺構・遺物が確認されました。国土交通省ならびに富山県教育委員会と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を進めていく上でできる限りその保護に努めてまいりましたが、平成15年度より3ヵ年計画で本発掘調査を実施する運びとなりました。

調査では、縄文時代と中世の大きく2つの時期が確認されました。縄文時代では、農耕や食料採集と深く関わりのある打製石斧が多く出土しました。中世では、県内最古の可能性がある石組建物跡や他地域との交流を示す遺物が検出されるとともに、徳大寺家領般若野莊が存続していた時代の遺跡であることが判明しました。

それら成果をまとめた本書が地域の歴史や文化の研究にご活用いただくとともに、縄文の太古から我々の祖先が庄川扇状地を切り開き、逞しく生き抜いてきた姿に思いを馳せていただければ幸いです。

おわりに、調査の実施および報告書刊行にあたり、地元祖泉・久泉地区自治振興会、富山県埋蔵文化財センターをはじめ関係各位に多大なるご援助・ご協力をいただきました。衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月

砺波市教育委員会

教育長 堀田 良男

例　　言

- 本書は平成15年度に実施した富山県砺波市祖泉・久泉地内に所在する久泉遺跡の発掘調査報告である。
- 調査は、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所の委託を受けて、砺波市教育委員会が実施した。発掘調査は、砺波市矢木から久泉にかけての一般国道359号砺波東バイパス建設工事に先立ち、砺波市教育委員会が主体となり、株式会社中部日本鉱業研究所（高岡市西藤平藏581）に業務委託し実施した。
- 調査事務局は砺波市教育委員会内に置き、事務は学芸員野原大輔が担当し、教育次長喜田豊明が総括した。
- 調査に関するすべての資料は砺波市教育委員会で保管している。なお、遺跡の略記号は市名と遺跡名の頭文字（Tonamisi Hisa Izumi）と、平成15年度の調査となることから「THI-15」とした。
- 調査事務局および調査担当者は以下のとおりである。

調査事務局	砺波市教育委員会	教育次長	喜田 豊明
	生涯学習課	課長	老松 邦雄
	同	係長	喜田 真二
試掘調査担当者	同	学芸員	野原 大輔
本調査担当者	同	学芸員	野原 大輔
	同	執筆学芸員	佐藤 隆
株中部日本鉱業研究所	調査員	中村 恭子	
	同	調査員	阿部 将樹

- 調査期間および面積は以下のとおりである。

試掘調査	平成14年7月30日～8月9日、10月8日～10月9日	調査対象面積	23090.85m ²
本発掘調査	平成15年4月21日～平成15年9月30日	調査面積	4100m ²
- 本書の編集は野原・中村が行い、執筆および図版作成は野原・中村が担当し執筆分担は各文末に記した。遺構写真は野原・阿部、遺物写真は野原が撮影した。
- 今回の調査では、皇學館大學の外山秀一氏にプラント・オパール分析をおこなって頂き、玉稿を賜った。記して謝意を申し上げる。また、自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 本書で使用している遺構の略記号は以下のとおりである。ただし、現地調査の遺構検出時点での略記号を付したため、本文中では略記号と遺構の性格が異なる場合があることを断っておく。
掘立柱建物-SB、柵列-SA、井戸-SE、土坑-SK、溝-SD、ピット-SP、集石-SS、風倒木痕-FB
また、本書で使用している方位は真北で、標高は海拔高である。
- 十城色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」（2001年前期版）に準拠している。
- 調査期間や整理作業期間を通じて、下記の方々から多大なるご教示・ご協力を得た。記して衷心より謝意を表す。

池野 正男（富山県埋蔵文化財センター）	牛嶋 茂（奈良文化財研究所）	越前 信子（富山県文化振興財団）
酒井 重洋（富山県埋蔵文化財センター）	杉本 和樹（西大寺フォト）	久々 忠義（小矢都市教育委員会）
栗山 雅夫（福岡町教育委員会）	神保 孝造（富山県埋蔵文化財センター）	高梨 清志（富山県教育委員会）
外山 秀一（皇學館大學）	西井 龍儀（富山考古学会）	麻柄 一志（魚津市教育委員会）
宮田 達一（富山県文化振興財団）	山本 正敏（富山県埋蔵文化財センター）	以上、五十音順・敬称略

目 次

序 文

例 言

目 次

序 章

第1節 調査に至る経緯	(野原)	1
第2節 過去に行われた調査	(々)	2

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	(々)	11
第2節 歴史的環境	(々)	14

第3章 調査の成果

第1節 調査方法と調査経過	(野原・中村)	19
第2節 基本層序	(々)	21
第3節 遺構	(々)	22
(1) 上層遺構	22
(2) 下層遺構	29
第4節 遺物	(々)	41
第5節 プラント・オパール分析	(外山秀一)	58
第6節 自然科学分析	(バリノ・サーヴェイ株式会社)	67

第4章 考 察

第1節 扇状地扇央部における打製石斧出土の意味	(野原)	71
第2節 徳大寺家領般若野荘荘域における久泉遺跡の位置 (々)	81	

第5章 ま と め

【参考文献】

図 版 日 次

- Fig. 1 …久泉遺跡出土遺物
Fig. 2 …光圓寺調査（1）
Fig. 3 …光圓寺調査（2）
Fig. 4 …試掘トレンチ配置図
Fig. 5 …周辺地形（埋没地形）復元図
Fig. 6 …久泉遺跡の位置
Fig. 7 …浜波平野の地形分類図
Fig. 8 …庄川扇状地を中心とした地形分類図
Fig. 9 …中尾遺跡の御物石器
Fig.10 …福山窯跡出土の瓦塔水煙部
Fig.11 …般若野莊の莊域図
Fig.12 …久泉遺跡とその周辺遺跡
Fig.13 …調査区位置図
Fig.14 …基本層序模式図
Fig.15 …上層造構全体図
Fig.16 …上層造構図（1）
Fig.17 …上層造構図（2）
Fig.18 …上層造構図（3）
Fig.19 …下層造構全体図
Fig.20 …下層造構図（1）
Fig.21 …レーザー計測図
Fig.22 …下層造構図（2）
Fig.23 …下層造構図（3）
Fig.24 …下層造構図（4）
Fig.25 …下層造構図（5）
Fig.26 …各類型計測部位とその名称
Fig.27 …上層造構出土遺物実測図
Fig.28 …下層造構出土遺物実測図
Fig.29 …遺物包含層出土遺物実測図（1）
Fig.30 …遺物包含層出土遺物実測図（2）
Fig.31 …遺物包含層出土遺物実測図（3）
Fig.32 …遺物包含層出土遺物実測図（4）
Fig.33 …遺物包含層出土遺物実測図（5）
Fig.34 …遺物包含層出土遺物実測図（6）
Fig.35 …プラント・オバール試料採取位置
Fig.36 …打製石斧出土分布図
Fig.37 …徳大寺家領般若野莊莊域図

写 真 図 版 目 次

- PL. 1 …A-1調査区（下層）空中写真
PL. 2 …A-2・A-3調査区（下層）空中写真
PL. 3 …調査写真
PL. 4 …調査区土層断面
PL. 5 …上層造構（1）
PL. 6 …上層造構（2）
PL. 7 …上層造構（3）
PL. 8 …下層造構（1）
PL. 9 …下層造構（2）
PL.10 …下層造構（3）
PL.11 …下層造構（4）
PL.12 …下層造構（5）
PL.13 …造構・遺物包含層出土遺物
PL.14 …上層造構出土遺物
PL.15 …下層造構出土遺物
PL.16 …遺物包含層出土遺物（1）
PL.17 …遺物包含層出土遺物（2）
PL.18 …遺物包含層出土遺物（3）
PL.19 …遺物包含層出土遺物（4）
PL.20 …遺物包含層出土遺物（5）
PL.21 …遺物包含層出土遺物（6）
PL.22 …遺物包含層出土遺物（7）

表 目 次

- Tab. 1 …基本層序一覧
Tab. 2 …試掘調査層序模式図
Tab. 3 …試掘トレンチ内容一覧
Tab. 4 …造構密度・遺物量相關図
Tab. 5 …久泉遺跡と周辺遺跡一覧表
Tab. 6 …遺物觀察表（土器・陶磁器類）
Tab. 7 …遺物觀察表（打製石斧）
Tab. 8 …県内の打製石斧出土遺跡
Tab. 9 …市域の縄文遺跡消長表
Tab.10 …徳大寺家領般若野莊周辺の中世遺跡
消長表

序 章

第1節 調査に至る経緯

(1) 事前協議

平成11年11月、砺波市管内における国道359号の埋蔵文化財対応について、砺波市土木課、砺波市教育委員会生涯学習課、建設省富山工事事務所調査第二課、富山県埋蔵文化財センターの四者で協議し、砺波市庄下・太田・柳瀬地内の分布調査を実施することで合意した。それを受けて同月、分布調査実施内容の詳細について確認している。

(2) 分布調査（平成11年度）

調査期間：平成12年3月21日

調査体制：砺波市教育委員会	生涯学習課	学芸員	利波 匡裕
富山県埋蔵文化財センター	企画調整課	係長	久々 忠義
		主任	岡本 淳一郎
		文化財保護主事	高梨 清志
		文化財保護主事	境 洋子

事業予定地内における分布調査は、砺波市教育委員会が主体となり、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。調査対象面積は42,500m²である。調査の結果、久泉遺跡周辺において土師質土器、須恵器、青磁、近世陶磁器あわせて15点が採集された。遺物採集地点は2箇所において集中的に分布している状況であった。また周辺に「カンジャダ」（鍛冶屋山か）という旧地名も残っていることなどから、遺物集中域を含めるようにして遺跡範囲を拡大することとなった。

(3) 試掘調査（平成14年度）

平成14年6月、国土交通省北陸地方整備局富山工事事務所、富山県教育委員会文化財課、市上木課、市教委生涯学習課で四者協議を行い、分布調査で確認された遺跡範囲内における埋蔵文化財の対応について協議した。調査は試掘調査で対応することとし、砺波市教育委員会が主体となって調査することで合意した。平成14年7月、国土交通省と砺波市教育委員会は砺波東バイパス久泉遺跡発掘調査に係る委託契約を締結、同月30日より試掘調査を開始した。

試掘調査の結果、構築・遺物が良好に検出され、遺跡の広がりを確認した。よって試掘対象面積18,630m²のうち約13,000m²について、記録保存等の保護措置が必要であるという結論に至った。

試掘調査結果を受けて再度四者協議をし、保護措置等が必要な範囲について次年度以降に本発掘調査にて対応することで合意した。7月の試掘調査の結果、周辺には舌状の微高地がいくつか存在することがわかり、西端の微高地は調査対象地の西に続く状況が明らかとなった。そこで市教育委員会が主体となり、祖泉神社西側の施工予定地約4,500m²を対象として追加の試掘調査を実施することとなった。調査の結果、埋蔵文化財が希薄な地帯であることが判明、保護措置の必要がないと判断した。

(4) 本発掘調査

平成15年4月、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道工事事務所（旧称：富山工事事務所）と砺波市は委託契約を締結し、本発掘調査を実施することとなった。（野原）

第2節 過去に行われた調査

久泉遺跡は久泉に所在する光圓寺を中心とする遺跡として知られてきた。光圓寺はかつて砺波市別所地内にあり山号を別所山と称し、明応4年（1495）に明賢が開基したとされる。別所から久泉に移転したのは、記録が定かではないが室町時代末頃（16世紀後半）、光圓寺3代明祐の時代であるといわれる。



Fig. 1 久泉遺跡出土遺物

（1）久泉遺跡の発見

遺跡発見の契機は、昭和63年光圓寺の門徒会館および庫裡の建設工事にはじまる。そのとき、旧庫裡の解体工事中に遺物（須恵器・珠洲・越中瀬戸など）が発見された。これを機に「久泉遺跡」として周知の埋蔵文化財包蔵地に登録される。

（2）光圓寺調査〔西井：1992〕

平成元年5月、光圓寺門徒の金平正二氏が本堂背後（西側）の境内で大壺が露出しているのを発見した。そこで市教育委員会と砺波郷土資料館が中心となり調査を行うこととなった。

現地では「大壺が地表面からわずかばかりのところに埋設されており、口縁部のうち地表に出ていたとみられる本堂側にあたる約半分が破損、崩落して」いる状況であった。

地表面直下には大壺を中心南北約145m、東西約135mの方形に玉石を組み、漏斗状に掘り込んで大壺が据えられていた。出土遺物は大壺、骨蔵器（骨壺、皿、小壺、小円板）、火葬骨、素焼きの皿がある。

二月	寛 保 三 年	釋 尼 妙 善	口 口 口 口
二日	(二)		

壺1の墨書

自	皆	聞	口	夷	法	延	法	念	十	光
口	悉	名	口	則	名	(一	取	佛	方	明
不	到	欲	本	二	七	二	不	衆	世	通
口	往	往	願	日	六	參	捨	生	界	照
口	國	生	力	祐	四	年	貞			

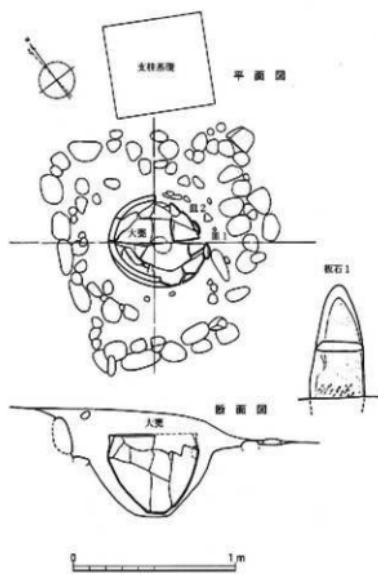
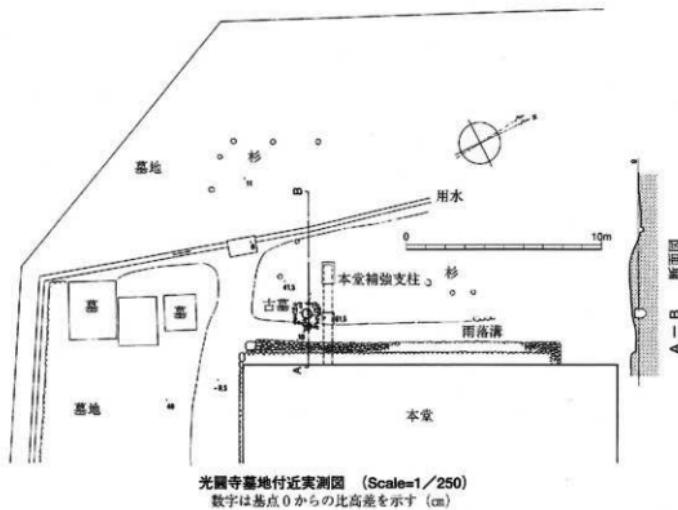
壺2の墨書

大壺内に埋納されていた5個体分の壺のうち、体部に上記のような墨書があった（壺1・壺2）。いずれもロクロ成形による素焼きの土師質土器である。光圓寺記録によると壺1の妙善の入寂は天正10年（1582）であり墨書との年号とは161年の隔たりがある。壺2の祐貞は記録によると享保7年（1722）となり、24年の誤差がある。これは歷代住職の記録が混乱していることに起因する。

報告では、これら出土遺物と、埋土に骨片が含まれていたこと、そして大壺の埋設状況から「18世紀前半の真宗寺院墓」であると断定している。

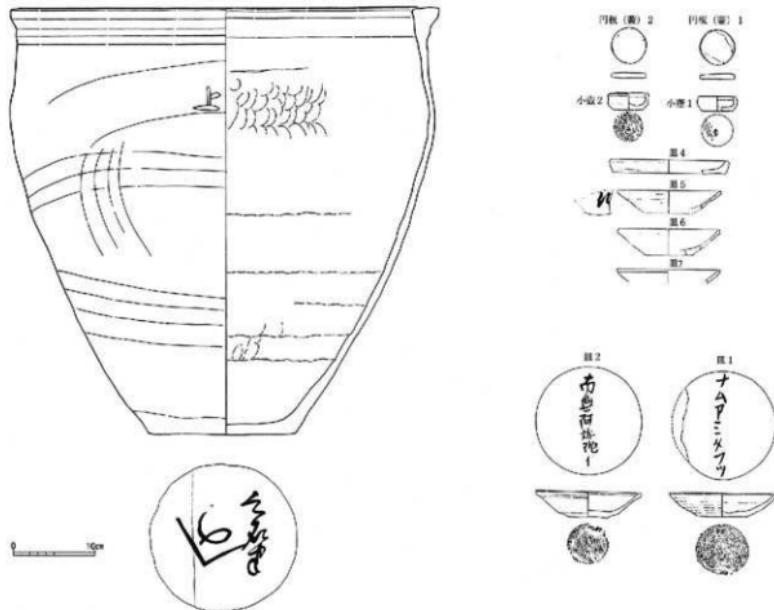
この古墓は、明治に作成された見取図にある「墓五歩」と重なる位置にある。石組みと本堂の配置はほぼ平行していることから、少なくとも相互に意識して構築されたものであると考えられる。石組みは方形を呈し、その内側を玉石あるいは礫によって石敷とする構造は中世の墳墓に共通るものである。また、骨蔵器の形態や構成、体部に法名や経文を墨書するという表現方法をとるという往時の埋葬形態が明らかとなった。

（野原）

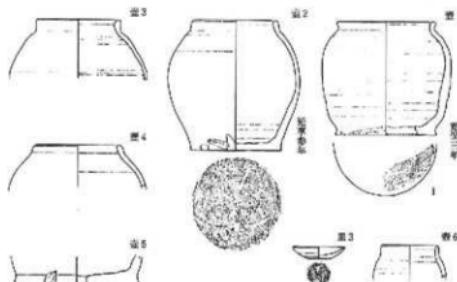


光圓寺古墓実測図 (Scale=1/30)

Fig. 2 光圓寺調査(1) [西井:1992] より転載



光西寺古墓の大甕と外底面の墨書



光西寺古墓の藏骨器



Fig. 3 光西寺調査(2)出土遺物 (Scale=1/6) [西井:1992]より転載

(3) 試掘調査(平成14年度)の結果

①調査概要および調査方法

国道359号砺波東バイパス建設工事に係る久泉遺跡の保護措置を講じる資料とするため、平成14年度に砺波市教育委員会が調査主体となり、2次にわたり試掘調査を実施した。調査期間と調査対象面積については、下記のとおりである。

調査期間		トレンチ	調査対象面積	発掘面積	発掘率
1次	H14（2002）7.30~8.9	1~36T	18630.00m ²	955.5m ²	5.1%
2次	H14（2002）10.8~10.9	37~42T	4460.85m ²	113m ²	2.5%

調査は、分布調査によって遺物が散布していた範囲を中心にバックホウおよび人力で地表面から地山である褐色シルトまたはオリーブ褐色砂礫層まで掘り下げる、遺構・遺物の遺存状況を確認した。トレンチ掘削後、壁面を精査したのち記録作業（図化・写真撮影）を行った。また、部分的に遺構掘削を試み、性格・規模の把握に努めた。遺物は出来る限り層位ごとに取り上げ、番号を付した。

② 基本層序

調査区全体にわたり、以下の層序によって構成される。

②層は、いわゆる「黒ボク土」もしくは「黒土層」といわれる黒色有機質層であり、調査区内においては旧河道内を除いては全域で確認できた。層厚は、15~90cmを測り、広範に存在するが微地形の違いにより堆積状況は大きくことなることが確認された。地山である③-1層・③-2層の直上に位置し、層界には漸移層が発達、扁状地が安定したのちに時間的に長い経過ののち植物等が堆積したものと考えられる。外山秀一氏によるプランツ・オパール分析によれば、久泉の微高地地点では②層と同一と考えられる黒色土からウシクサ族などが検出されたことから、高燥な土地条件が長期にわたり継続したことを探測している〔外山：1997〕。②層は、全体的に遺物包含層化しており

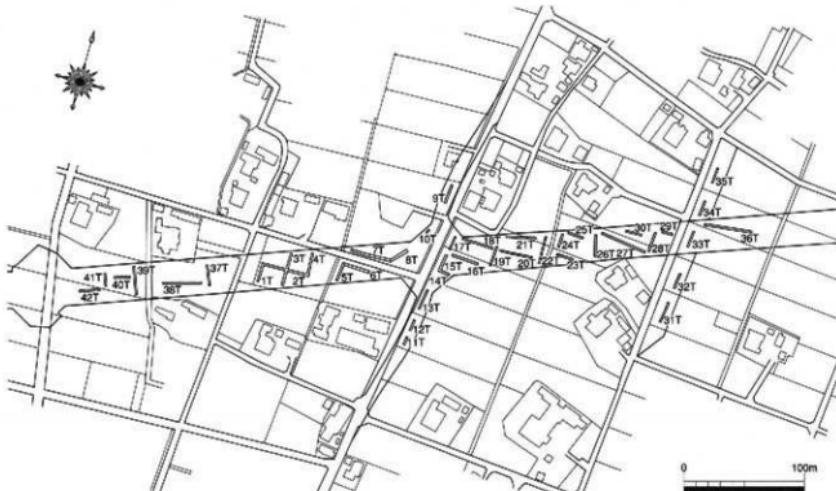


Fig. 4 試掘トレンチ配置図 (Scale=1/4,000)

り、縄文時代・古代の遺物が検出された。②層の上位は⑪・⑬層などの洪水堆積層により断絶される。

また、②層上面と下面において造構面を確認した。上面の造構では、造構覆土に⑬層が入ることがあり、②層より上層からの掘り込みにより形成される。下層造構では、造構覆土に②層が入り、③-1・③-2 上面で造構検出できた。

③-1層・③-2層は、地山に相当するときられる層位である。

③-1層は、褐色シルトであり、調査区内においては、旧河道砂礫層の範囲外にはほぼ全域で確認できた。シルトは、極細砂ともいべきもので非常にきめ細かく、洪水堆積層と思われる。27Tでは、③-1層の層厚は、約1mを測る。また、先述したように上面で遺構を確認し、②層（黒色土層）から掘り込まれた遺構が③-1層もしくは③-2層まで到達している状況が確認された。

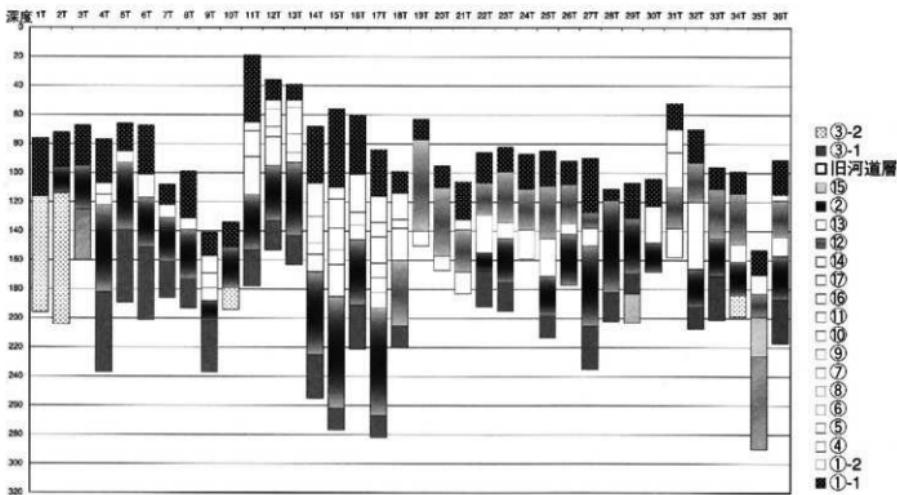
③—2層は、オリーブ褐色の破砕層で

あり、扇状地形成時に堆積したものと思われる。調査対象地西側では、③-2層を掘り込んで柱穴や土坑などの遺構が形成されていた。

今回の調査区内における層序の特徴としては、洪水堆積層とみられる褐色～オリーブ褐色シルト層と黒色～黒褐色シルト層（黒色有機質層）が交互に連続していることである。最下の黒色層であ

層位	土相	色相	性格
①-1層	黃灰色土	2.5Y4/1	黃土
①-2層	暗オリーブ灰色土	5GY3/1	圃場整備の盛土 遺物包含層
②層	黒色シルト	10YR2/1～5Y2/1	黒色有機質層
③-1層	褐色シルト	10YR4/4	地山シルト
③-2層	オリーブ褐色砂+難	2.5Y4/3	地山砂礫
④層	黒褐色土	10YR3/2	自然堆積
⑤層	褐色砂土	10YR4/6	自然堆積
⑥層	暗オリーブ褐色シルト	2.5Y3/3	自然堆積
⑦層	灰色シルト	5Y4/1	自然堆積
⑧層	黄灰色シルト	2.5Y4/1	自然堆積
⑨層	オリーブ褐色土	2.5Y4/4	洪水堆積層
⑩層	黑褐色シルト	10YR3/1	自然堆積
⑪層	黑褐色シルト	2.5Y3/1	黒色有機質層
⑫層	黑褐色シルト	2.5Y3/2	洪水堆積層?
⑬層	に黒褐色シルト	10YR4/3	黒色有機質層
⑭層	黑褐色シルト	2.5Y3/2	洪水堆積層
⑮層	黑褐色シルト	2.5Y3/2	自然堆積

Tab.1 基本圖序一覽



Tab.2 試掘調査層序模式図

る②層は層厚も大きく、かなり長期間にわたり土地条件が安定していたことを示す。⑫・⑬層などの黒色層と②層の間には⑧・⑪・⑯層などの洪水堆積層が存在している場合が多く、部分的には洪水を受けた痕跡が構造に水平堆積している状況が看取された。これらは、洪水を受け土砂が堆積したあとに一時に安定期があるものの、また洪水を受けるという繰り返しを経てきた庄川扇状地の特性を如実に語るものであると考えられる。

③遺構と遺物

遺構は、ピット・柱穴・土坑・溝・井戸・堅穴住居・畝状遺構などが検出された。遺構が密集する範囲は、次の3つに集約される。西は祖泉地内から県道高岡庄川線までの範囲、県道から市道久泉線西側の旧河道までの範囲、そして市道から東の旧河道までの範囲であり、それぞれは旧河道に挟まれている。

祖泉地内から県道高岡庄川線までの範囲は1Tから8T、11Tから13Tまでの範囲である。遺物の出土こそ少量であるものの、遺構密度は高く6T・7Tに集中する。特に6Tでは、遺構密度は25.9%にのぼる。柱穴と考えられるピットや溝、井戸のような平面プランをした土坑などが検出された。柱穴と考えられるピットが多いことから、掘立柱建物を構成するものも含まれる可能性が高い。また、8Tの土坑からは縄文土器が出土している。県道から市道久泉線西側の旧河道までの範囲は、18Tから30Tまでの範囲である。中央付近の22Tから24Tでは畝状遺構が検出された。遺構自体からの出土遺物はないが、覆土である⑫層からは古代の遺物が出土、畝状遺構の帰属年代を判定する手がかりとなる。26T

では堅穴住居跡が集中的に検出され、遺構密度は90%を超える。切り合っているが、複数棟存在している可能性がある。遺物が一面に密集・多量に検出され、帰属年代は8世紀後半から9世紀にかけてのものと考えられる。全体を検出していないので平面規模は不明であるが、時代的なものを考慮し方形であると想定している。また、住居跡の床面からは焼土の広がりが確認された。範囲Cは、31Tから36Tまでの範囲である。古代の遺構は検出されなかったものの、33Tでは唯一縄文時代の堅穴住居跡が検出された。

古代に帰属する遺物が大半を占めるが、次に縄文時代、

ト ロ ン チ	レンチ規格	遺構			遺物		
		深度(m)	UC(標準化)	測量面積(m ²)	検出 遺構	測量面積(%)	遺物数(個)
	1T	14.3	22.0	4.21	柱穴	0.9	0
	2T	39.7	61.7	5.53	柱穴+ビット	8.9	0
	3T	25.5	38.2	1.97	柱穴+ビット	5.1	0
	4T	17.7	26.1	2.29	柱穴	8.1	0
	5T	13.9	21.9	0.31	柱穴	1.4	0
	6T	22.5	32.1	8.35	柱穴+土坑	25.9	1
	7T	33.1	63.7	4.22	土坑+柱穴+ビット	6.6	0
	8T	15	31.6	2.23	柱穴+ビット	7	3
	9T	16.1	23.5	1.21	柱穴	5.1	0
	10T	3.6	5	0		0	0
	11T	6.7	9.4	0		0	0
	12T	9.1	13.1	4.89	柱穴+土坑	37.2	1
	13T	16.8	24.3	1.13	土坑	4.6	0
	14T	7.5	13.3	0		0	0
	15T	14.5	23.6	0		0	1
	16T	22.5	32.0	0		0	11
	17T	11.5	16.4	0		0	0
	18T	26.6	38	0.06	ビット	0.1	8
	19T	16.7	22.5	3		13.3	0
	20T	27.2	38.2	5.86	柱穴+土坑+ビット	15.3	36
	21T	24.3	32.9	4.78		14.4	7
	22T	22.6	31.5	4.2	柱穴+土坑	13.3	11
	23T	13.8	17.6	1.46	柱穴+土坑+土器	7.9	17
	24T	10.7	14.2	0.59	柱穴	82.6	6
	25T	13.2	17.9	0.85	柱穴+土坑	4.7	2
	26T	18.1	25	23.94	柱穴+土坑	95.7	337
	27T	38.3	55	0.26	ビット	0.5	31
	28T	16.5	22.9	1.2		5.2	1
	29T	9	13.4	0		0	0
	30T	13.2	16.7	4.5	柱穴+土坑+土器	26.9	329
	31T	17.4	25	0	柱穴	0	0
	32T	13	16.9	0.54	ビット	3.1	0
	33T	13.7	18.2	0.14	柱穴+土坑	50.2	35
	34T	12.8	17.1	0.26	ビット	1.5	1
	35T	13.2	17.7	0	柱穴	0	1
	36T	39.4	53.1	2.14	柱穴+ビット	4.5	0
		平均(m)	最高(m)	面積(m ²)	Vf(%)	全面積(%)	平均(Bm ²)
		649.7	955.5	103.6	11.94	828	1.089

(註)最高面積とは、トレック面積に対する最高面積の占める割合のことである。

Tab.3 試掘トレンチ内容一覧

中世・近世のものにいたっては、わずかばかりである。縄文時代の遺物は、散発的だが帰属時期は、中期から後期にかけてのものとみられる。古代は土師器が中心であり、須恵器が数点出土している。分布の中心は、26T周辺である。概して8世紀後半から9世紀の範囲に含まれる。

21Tからは鉄滓が出土している。周辺に「カンジャダ」（鍛冶屋田か？）という地名が残っていることから、製鉄との関連も想定できよう。

④旧地形（埋没地形）の復元

今回の試掘調査対象地は、昭和40年代に大規模な圃場整備が行われているために旧地形が大きく改変されている。そこで、試掘トレンチ内で確認した地山（③-1層・③-2層）上面のレベルをつなぎあわせた等高線（0.2mセンター）を示した図を作成し、埋没している旧地形を復元、遺跡の有無の決定とその広がりを推定する手がかりとした。先述したように試掘調査対象地内において、大きく3つの微高地が存在することが明らかとなった。それぞれの微高地は旧河道によって隔てられており、南北に長い形状をしている。復元した埋没地形とはばは整合するかたちで西から鳥木、中島、瀬堀島という小字が残っている。なかでも中島は、中州状微高地であり遺構が濃密に分布しており、古代を中心とした集落の可能性が高い。東側の微高地では、調査対象地内で唯一縄文時代の住居址が検出されている。

【保護措置が必要な範囲とその決定要素】

保護措置が必要な範囲は、2区域ある。

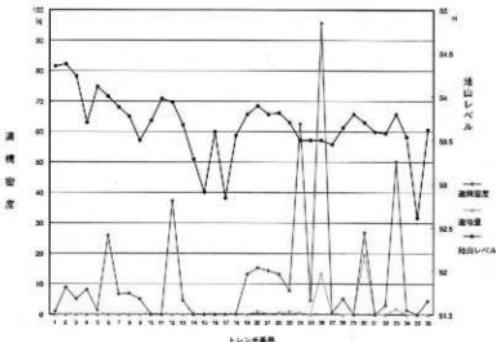
ひとつは、調査対象地西端から県道部分まで、面積が4,130m²である。西端は、本来はさらに西にむかって地山のレベルが高くなってしまっており、遺構はさらに西側に広がるものと考えられる。この範囲は、本来は調査対象地内で最もレベルの高い微高地であった可能性があるが、圃場整備で削平されているために遺構の残存率が低いものとみられる。県道まで区切ったのは、15T・17Tを中心とする埋没谷・旧河道が存在するためである。

もうひとつの範囲は、最も広範で県道東から市道久泉線の東側まで、面積は7,900m²を測る。古代を中心とした微高地と東側の微高地を取り込むような形で設定している。西側は埋没谷・旧河道で区切った。東側も旧河道で分断し、具体的には地山レベル53.4mの等高線付近を境として傾斜が変化するため、ここまでを範囲とした。

⑤まとめ

【庄川扇状地扇尖部における縄文時代遺跡の初見】

砺波平野周辺における縄文遺跡の分布は、隆起扇状地といわれる洪積世の河岸段丘面に位置することが多い〔西井1985〕。庄川扇状地の遺跡は、大門町小泉遺跡（前期）のほか高岡市高田新・駒方遺跡や中川遺跡（後期）が扇端部の湧水帯と重なる部分に分布する傾向にある。扇頂部には庄川



Tab.4 遺構密度・遺物量相関図

町松原遺跡（中期）が存在する。砺波市内においては、庄川右岸、芹谷野段丘の各地に遺跡が広がり、なかでも戸照寺遺跡では発掘調査により10棟の竪穴住居址や多量の土器・石器が検出されている著名な遺跡である。

これまで庄川扇状地の扇尖部においては、縄文遺跡は未発見であり、今回の久泉遺跡の資料は、扇尖部に位置する遺跡としては初めて発見されたものである。市域では芹谷野段丘以東の比較的高い位置に分布域が限定されていることからも、予想外の発見であったといえる。一般的な見方として縄文時代は、後期に入り低地に進出するとされる。低地とはいえ中川遺跡のように扇端部の湧水帯への進出が多い。

今回の調査では、遺物を作う住居跡も発見されていることから、縄文集落が存在する可能性も充分に考えられる。久泉遺跡は、これまでの縄文時代の遺跡分布を大きく塗り替えるものとして、そして扇尖部における縄文時代遺跡の在り方に一石を投じるものとして高く評価できる。

【越中国砺波郡東大寺領莊園との関連】

8世紀後半、砺波郡には東大寺領莊園として、伊加流伎（留岐）・石栗・井山・杵名蛭、の四莊が存在していたとされる。これらの莊園は、芹谷野段丘に沿って庄川扇状地の東側に展開していたということが大勢の見解であり、それぞれの比定地についても近年研究が進展している。このなかで伊加流伎莊の比定地とされる地域は、まさに久泉遺跡の北に展開していたと考えられる（金田・田島1996）。伊加流伎莊は、天平勝宝元年（749）に、占地開墾されたものと考えられており、天平宝字三年十一月十四日付「伊加流伎開田地図」にその状況を看取ることができる。神護景雲三年（769）十一月十六日付「越中国諸郡莊園惣券第三」によれば、「見開」はわずかに八段三四〇歩であることから開発が然程進んでいなかったとされる。

庄川扇状地扇尖部地域における遺跡分布は、太田遺跡・高道遺跡・千代遺跡・宮村遺跡・小杉遺跡が旧河道沿いのマッドと呼ばれる微高地上に立地し、いずれも8世紀後半頃に出現する。このことは、庄川扇状地の東側の耕田開発と時を同じくし、扇尖部への開発も進んでいたことが考えられる〔西井1990〕。あわせて栴檀野窯跡群が操業を開始するのもこの時期であり、東大寺領莊園の開発や経営に深く関連するという見方も可能である。

今回の調査における出土遺物は、大半が古代に帰属するものであり、なかでも26丁出土遺物は質・量ともに豊富で、8世紀後半から9世紀に位置付けられる。遺物でも触れたように、出土遺物の大半、9割近くは土師器で構成されている。該期には栴檀野窯跡群が操業を開始するが、それ以前においては福野町安房窯で須恵器が焼かれておりすでに砺波郡内には流通していたと考えられる。芹谷野段丘上の高沢島II遺跡などでも久泉遺跡同様、土師器の出土比率が非常に高いが、該期は生活用具のほとんどが須恵器で占められるのが一般的である。これは、土師器の使用を避け、須恵器を流通させるための政策によるものであり、換言すれば土師器は格の高い高級品であったのである。今回の出土遺物が年代的には東大寺領莊園の占地開墾時期とも符合することを踏まえると、久泉遺跡の特性が頗る推測できる。先述した扇尖部に分布する遺跡とともに8世紀後半から展開する東大寺領莊園に関連する遺跡群の一枝群を構成するものと考えられる。

（野原）

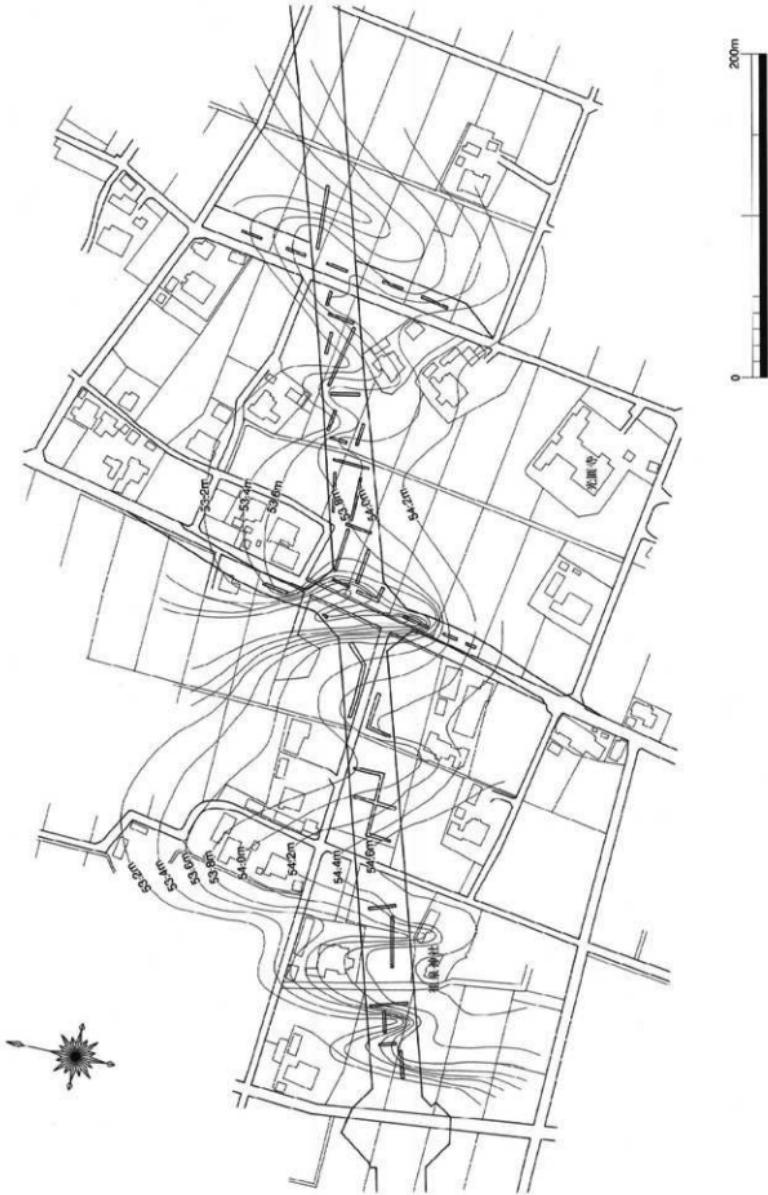


Fig. 5 周辺地形(埋没地形)復元図 (Scale=1/3,000)

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

(1) 研波市の概要

久泉遺跡の所在する砺波市は、富山県の西部中央にある。面積は96.31km²、人口41,835人（平成16年3月現在）であり、東経136度54分～137度04分、北緯36度33分～36度41分に位置している。

(2) 庄川扇状地

砺波市は、主に市名の由来ともなっている砺波平野に広がっている〔佐伯：1979〕。砺波平野は、その大部分が現在では東部を北流する庄川により形成された扇状地である。庄川扇状地は県内の三大扇状地（庄川・神通川・常願寺川）に数えられ、そのなかでも最大の規模を誇る。扇頂部である庄川町青島から扇端部である高岡市南部の湧水帶までの距離は13～15km、面積は146km²に及ぶ。

庄川は、その源を岐阜県荘川村に発し、高岡市を経由して日本海に注ぐ。流路延長115km、流域面積1180km²、平均河床勾配1/120～1/800の規模をはかる〔富山県：1992〕。また、庄川扇状地の勢いに押されるようにして小矢部川は、庄川の排水河川の役目を果たし砺波平野の西端部を流れている。庄川扇状地には、地理学上著名な散村（Dispersed Settlement）が広がっており、長閑な田園空間を形成している。

市域は大部分が扇状地によって占められているが、庄川以東には低位段丘、そして高位段丘である芹谷野段丘が存在する。段丘以東には、射水丘陵から連なる東別所新山山地などの丘陵帯が広がっている。

(3) 庄川右岸の段丘

庄川の右岸には台地がひろがり、河川作用によって形成された河成（河岸）段丘が存在している。それらは低位段丘、中位段丘、高位段丘として分類することができる。庄川町庄から官森までの主要地方道新湊庄川線以東には、低位段丘が存在しており、隆起扇状地堆積物が形成されて

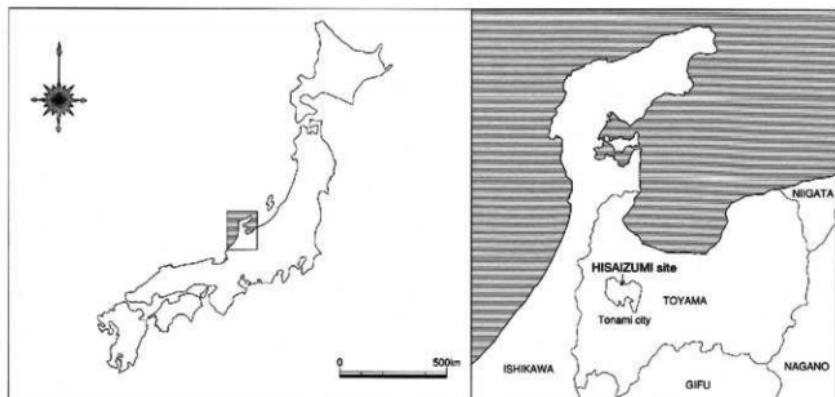


Fig. 6 久泉遺跡の位置

いる。頼成・權正寺・東保では、庄川右岸に沿う帶状の自然堤防の微高地に集落が発達している。

(4) 芹谷野段丘

高位段丘にあたる芹谷野段丘（福岡段丘）は、旧扇状地の右肩の一部が残存し段丘となったものである。南は安川付近から北は大門町串田付近まで約10kmに広がり、福岡の嚴照寺周辺では海拔80mを測る。芹谷野段丘上は、近世に庄川から芹谷野用水が引かれ、集落が展開した。

芹谷野段丘の東、蛇行する和田川の両岸には中位段丘が形成されており、和田川流域段丘帯をなしている。和田川は、牛岳の北西側山中に源を発し、庄東山地と芹谷野段丘の間を大きく蛇行し、池原付近で坪野川が合流する。流路延長23.5km、庄川の支流である。昭和43年、和田川総合開発事業により和田川ダムが竣工、和田川は堰き止められて増山湖ができる。

和田川の右岸に位置する増山城跡は、一般に庄東山地・音川山地と呼称される範囲に含むことができ、富山県を東西に分断する射水丘陵帶の一枝群を成している。この山地は起伏量が少ない丘陵性小起伏山地であり、地質的には青井谷シルト質泥岩層の範囲に含まれる。

(5) 東別所新山山地

また、南に位置する東別所新山山地は標高200m余りを最高点として100m余りの小起伏山地で構成されている。この山地の西北に位置する天狗山（標高192m）の北斜面、県民公園頼成の森の緩斜面丘陵は、南側山地からのかつての扇状地性堆積層で構成されている。表層地質としては、砂岩を主体とする下部と無層理青灰色泥岩を主体とする上部から成っている。

(6) 久泉周辺の微地形 一庄川扇状地上に広がるマッドー

庄川扇状地上には自然堤防状や中州状の微高地が島状に点在しており、その間を繋うように旧河道が蛇行している。このような微高地やその縁辺部では、マッドとよばれる植土や壤土が分布しており、そこには黒土層の堆積がみられる。黒土層は、①いわゆる黒ボク層とよばれるもので、自然堤防上や中州状の微高地から縁辺部に分布するもの、②湿地帯で生成される有機質層、③埋没微高地からその縁辺部で生成された黒土層で、畠地土壤化したものと水田土壤化したもの、の3種に分類される[外山：1997]。

祖泉から久泉、そして柳瀬周辺は、このマッドが分布する範囲に立地している〔藤井：1967〕。太田から秋元に続く南北に長い微高地状の地形が密集する地帯に本遺跡は位置している。



Fig. 7 砺波平野の地形分類図
〔神島：1990より転載〕

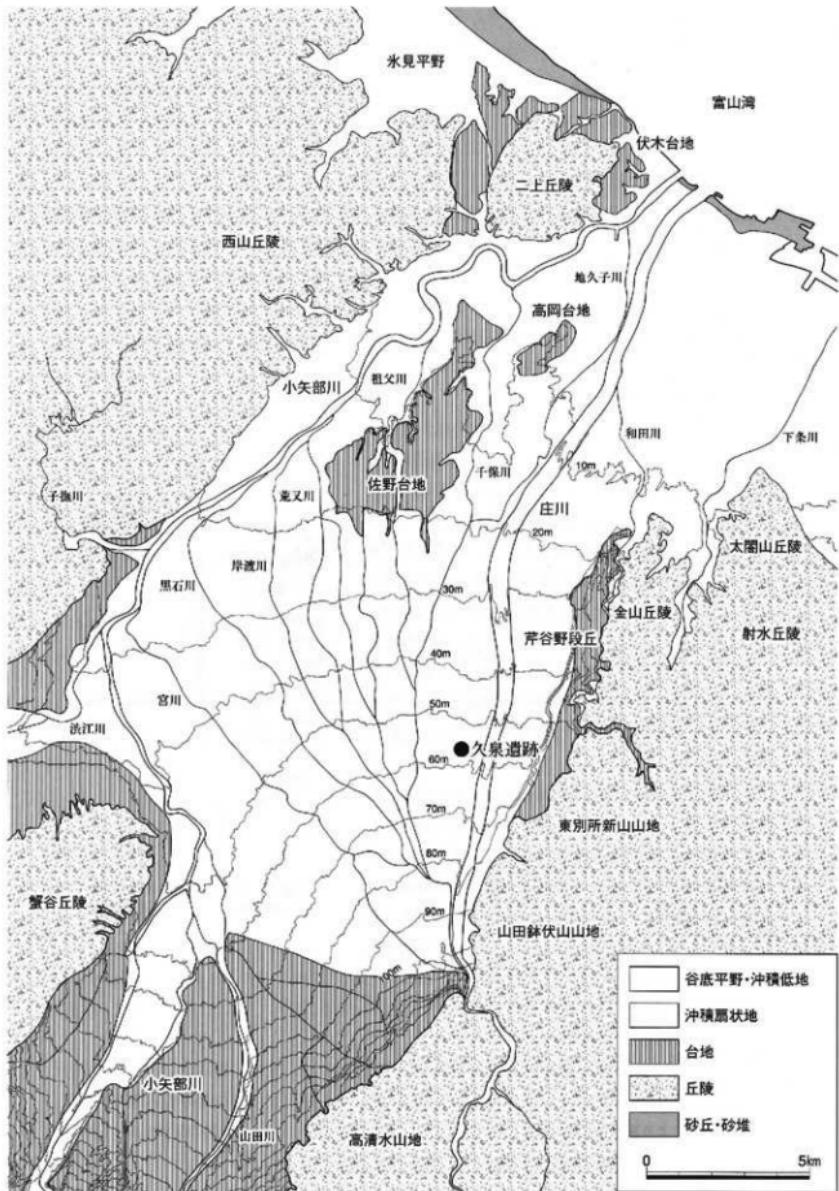


Fig. 8 庄川扇状地を中心とした地形分類図 (Scale=1/150,000) [高岡市教委:2001] p5を改変して作成

第2節 歴史的環境

砺波市には129箇所の埋蔵文化財包蔵地が存在する（2004年3月現在）。ここでは久泉遺跡-1を中心として市内の遺跡について概観する。文中の遺跡名には「〇〇遺跡-1」というようにFig.12の遺跡番号を付してある。

（1）砺波のあけぼの

旧石器時代の遺跡は、庄川右岸の音川山地や芹谷野段丘に分布する。音川山地には芹谷遺跡-2・池原遺跡-3・増山外貝喰山遺跡-4・頼成D遺跡-5、芹谷野段丘には高沢島I・II遺跡-6などがある。市内において旧石器が注意されたのは、昭和48年頃の芹谷遺跡がはじめてであり、往藏久雄氏の業績による。氏の発見以来、これまで100点以上の石器が表面採集された。それらは「立野ヶ原型ナイフ形石器」と呼ばれる鉄石英・玉髓でできた小形剥片と、濃飛流紋岩類・容結凝灰岩によるナイフ形石器や彫器で構成される〔西井：1990〕。

（2）縄文文化の盛行

芹谷野段丘以東を中心として縄文文化の花がひらいた。高位段丘である芹谷野段丘では、上和田遺跡-7、嚴照寺遺跡-8、宮森新天池遺跡-9、宮森新北島I遺跡-10、頼成新遺跡-11、三合遺跡-12がある。また、中位段丘である和田川流域段丘帯には、高沢島I・II遺跡-6、増山遺跡-13などがある。市内における縄文時代の遺物は古くからその存在が知られ、大正13年頃、孫子の上原地内において県内でも稀少なバナナ形石器が出土している。中尾遺跡-14から出土した御物石器は、前田円蔵氏が所蔵しており〔梅檀山村史刊行会：1976〕、現在福岡の嚴照寺にて保管され市指定文化財となっている。

芹谷野段丘辺の福岡・宮森新にまたがり存在する嚴照寺遺跡-8は、市内の縄文遺跡として最も著名である。名越仁風氏ら地元研究家や富山考古学会の働きかけで周知されるようになった嚴照寺遺跡は、梅檀野地区圃場整備事業に先立ち昭和50・51年に試掘調査、昭和51年に富山県埋蔵文化財センターによって本調査が実施された。本遺跡から出土した上器群は、「嚴照寺I式・II式・III式」として、中期前葉の地域的な指標となっている。遺構では、竪穴住居跡11棟・埋甕1箇所・穴などが検出され、典型的な弧状聚落であることが判明した。

低地では庄川以東の低位段丘上に宮森遺跡-15、徳万遺跡-16、東保石坂遺跡-17など、芹谷野段丘を抉る谷口に存在する。また、庄川扇状地扇頂部には庄川町に中期前葉の松原遺跡がある。今回の調査により扇尖部において初めて縄文遺跡が発見され、また、今年度の東保遺跡（東保高池遺跡）-18の試掘調査では縄文土器を検出している。

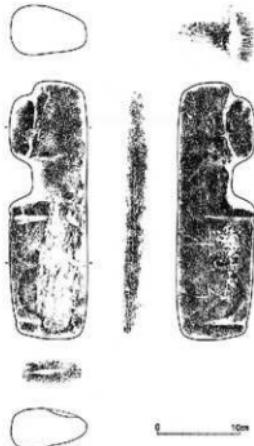


Fig. 9 中尾遺跡の御物石器
〔砺波市史：1990より転載〕

(3) 空白の時代

弥生から古墳時代にかけて現在のところ市域においては空白の時代と言わざるをえない。社会基盤が稲作経営に移行したことにより、人々が扇状地でも湧水帯の多い扇端部に移り住んだことに起因するものと思われる。わずかな資料として、福山大堤遺跡-19や安川野武士A遺跡-20B地点出土の弥生土器があるが、増山城跡-21発掘調査では弥生時代末の土器片が出土している〔砺波市教委：2003〕ことから、皆無というわけではない。越後郡や射水郡に連なる丘陵地帯や、扇状地に点在するマッド上など安定的な土地で未発見の遺跡が眠っている可能性がある。古墳時代資料としては、高沢鳥塚遺跡-22がある。古墳時代後半の土師器の壺や高杯の一部が出土している。また、増山城跡-21内の又兵衛清水付近から内面に刷毛目調整を施した土師器片が出土している〔安念：1991〕。池原には“丸山古墳”や県指定史跡であった“狐塚古墳”があり、前方後円墳とされていたが現在指定は解除され、古墳を見る研究者は少ない。

(4) 古代の開発 一東大寺領荘園の展開

考古学的な空白期間のうち、市域では扇状地から段丘上にかけて古代の遺跡が出現しはじめる。奈良時代、庄川扇状地東部に成立した四荘の東大寺領荘園（石栗荘・伊加流伎荘・井山荘・杵名蛭荘）に連動したものであろう。芹谷野段丘上では梅檀野窯跡群が操業をはじめ、大規模に須恵器生産を行っている。芹谷野段丘上の西側斜面一帯には、夥しい数の窯跡が現在も残っており表面観察や遺物の採集ができる。須恵器生産の開始年代は、増山支群の宮森窯跡-23と福山支群の安川天皇窯跡-24が8世紀半ばに位置付けられる〔西井：1994〕。8世紀後半になると、増山支群では増山龟田窯-25、増山团子地窯-26、増山妙覚寺坂窯-27、福山支群では福山窯-28、福山小堤窯-29、福山大堤窯-30が操業している。その後、梅檀野窯跡群では、10世紀ごろまで須恵器生産が続けられる。

昭和37年7月に砺波市史編纂委員会が中心となり〔砺波市史編纂委員会ほか：1962〕、福山窯跡-28の発掘調査を実施した。出土品には水煙・屋蓋・輪・基盤など瓦塔の一部や円面鏡、土馬など特記すべき遺物があり、市指定文化財となっている。

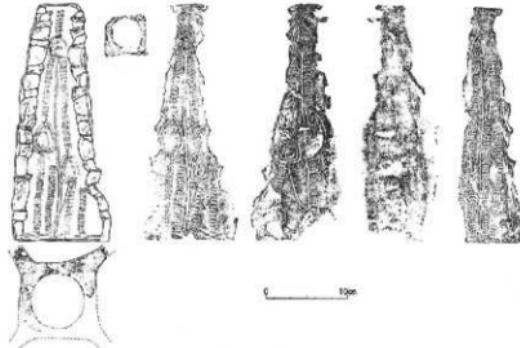


Fig.10 福山窯跡出土の瓦塔水煙部 [砺波市史: 1990より転載]

さて、扇状地上では河道に挟まれたマッドとよばれる微高地に遺跡が展開する。小杉周辺（小杉遺跡-31）、高道～宮村～千代周辺（高道向島遺跡-32、宮村遺跡-33、千代遺跡-34など）、太田～久泉～秋元周辺（太田遺跡-35、久泉遺跡-1、秋元崖田島遺跡-36）など分布が集中する傾向にある。徳万から頼成にかけては低位段丘上に徳万傾成遺跡-37がある。庄川扇状地東側の耕田開発と同時期における扇尖部の開発が遺跡の分布に反映しているものと思われる。

(5) 徳大寺家領般若野荘の盛衰

砺波市の中世を語るには徳大寺家領般若野荘と油田条（村）をさけることができない。ここでは久泉遺跡が所在する徳大寺家領般若野荘について取り上げたい。

徳大寺家領般若野荘は、市域東部に広く展開し、現庄川两岸に沿って南は三谷地区から北は中田地区に及ぶ広大な荘域であった。荘域のなかには奈良時代に成立した東大寺領莊園伊加流伎・石粟の2荘があり、井山荘は般若野荘の南に位置していたと考えられる。

徳大寺家は藤原北家の流れを継ぐ閑院流の出であるが、般若野荘がどのような機縁で家領となったのか、またいつごろ成立したか確証となる史料はない。知行国制が一般化し、縁故関係や成功によって國守が選任され、私的人脈によって國政が普遍化していった院政期にあって、徳大寺実能・公能父子が越中国の政務に深く関わっていることを考慮すれば、公能が越中国守となつた大治元年（1126）頃に般若野荘の成立をみるのが妥当であろう（河合：1990）。

中世において般若野荘では幾度かの合戦が

繰り広げられた。治承・寿永の源平争乱¹では、寿永2年（1183）、般若野荘に布陣していた平盛俊は源軍の今井兼平を迎え戦ったが敗れ、退き小矢部川原で戦ったが劣勢となり俱梨伽羅峰を越えて加賀に引き上げている。後鳥羽上皇が執権北条義時と敵対したことに端を発した承久の乱²では、承久3年（1221）鎌倉方である名越（北条）朝時らの北陸道軍が般若野荘まで侵攻し、京方（後鳥羽上皇方）との合戦となつた。京方はこの合戦で敗れ、軍陣に降っている。

嘉吉元年（1441）の「薩戒記」³によると徳大寺公有が越中の莊園經營の不振に陥っている。庚永元年（1342）に般若野荘の南にある三谷寺が鎌倉莊園寺塔頭蓮華院領となつていてことや、武家方の地頭方により押領が起りやむなく領地を折半する（下地中分）という事態に起因する。明応3年（1494）にあっては越中国の徳大寺家領莊園が不知行となつていて⁴。天文14年（1545）、越中に下向した徳大寺実通は、知行分にて殺害される⁵。雄神荘の庄城（壇ノ城）に挺る石黒氏や神保氏、在地荘民のいづれの手によるものか不明であるが、家領莊園での混乱状況をうかがうことができる。安川の般若山薬勝寺の南にある公家塚（九人塚）と呼ばれる五輪塔の墓地は、実通に關係があるのかもしれない。

莊城にあるこの時期の遺跡としては、東保遺跡（東保高池遺跡）⁶⁻¹⁸、久泉遺跡-1、秋元遺

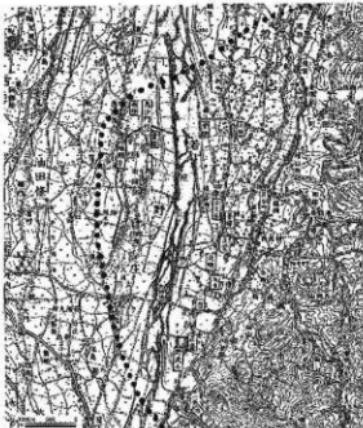


Fig.11 般若野荘の荘域図
〔砺波市史：1965より転載〕

1 「源平盛衰記」二九 寿永2年5月

2 「平家物語」長門本十三 寿永2年5月条

3 徳大寺貞中山定親の日記

4 「後法興院記」明応3年2月2日条

5 「言繼御記」天文14年3月～4月 「越中国於知行分」とあり、般若野荘か宮河荘かは不明。

6 かつての東保高池遺跡を含む遺跡。平成15年度試掘調査により範囲拡大、名称変更。

田島遺跡-36、正権寺遺跡-38、狐塚遺跡-39などが存在する。12世紀後半から13世紀前半に比定される東保寺遺跡（東保高池遺跡）-18では土師器が多量に出土し、墓地もしくは祭祀跡と考えられる集石状遺構が検出されている。やや時代が新しいものでは秋元窪田島遺跡-36、正権寺遺跡-38があり、ともに15世紀に位置付けられる。

（6）中世末期の動乱 一増山城をめぐる攻防—

南北朝時代には、二宮円阿軍忠状に「和田城」という城名がみえる。和田城は、増山城-21に先立ち構築された亀山城-40であるという説が有力である。現在の亀山城は、戦国時代前期に修築された可能性が高いが、郭が同心円状に配置していることや全体的な規模などから増山城より古い段階の構造をもつ。

室町時代に神保氏が婦負・射水郡の守護代となり、はじめ亀山城を使用していたが、本城である放生津城の支城として亀山城を修築したとされる。永正3年（1506）、一向一揆を攻めるために進軍した越後守護代長尾景が増山城に近い芹谷の合戦で討死していることから、軍事的緊張が高まっていたことが考えられ、亀山城の整備が行われ、現在の姿に近い形になったようである。さらに天文年間頃、神保長職が富山城の支城として増山城が構築されたと考えられる。こののち増山城は、長職を追撃した上杉謙信の手に落ち、永禄年間後期に長職と上杉が結んで一向宗徒を攻撃したときには、長職の本拠となっている。また、長職没後、一時的に反上杉方が居を構えるが、天正4年（1576）に謙信に攻められ落城し、天正9年（1581）に織田方に焼き払われている。天正11年（1583）以降、越中統一を果たした佐々成政によって修築された増山城は、この時もつとも城域が広く構造的に完成したのではないか。成政ののち、増山城は前田方の手に渡り、城の守将となった中川光重が退老もしくは没した慶長年間まで存続したと考えられる。（野原）

No	遺跡名	時代	種別	No	遺跡名	時代	種別
1	久泉遺跡	純・奈・平・近	集落	21	増山城跡	鎌倉・室町	山城
2	芦谷遺跡	旧石器・繩文・古代	散布地	22	高沢島III遺跡	奈良・平安	散布地・集落
3	池原遺跡	旧石器・繩文・古代	散布地・製鉄	23	宮森塚跡	奈良	墓
4	増山外貝塚山遺跡	旧石器	散布地	24	安川天皇御跡	古代	墓
5	鞠成D遺跡	旧石器?	散布地	25	増山龜田窯跡	奈良	窯
6	高沢島I・II遺跡	旧石器・繩・古・近	散布地・集落	26	増山団子地窯跡	奈良	窯
7	上和田遺跡	純文（中期・晚期）	散布地	27	増山妙見寺坂窯跡	奈良	窯
8	嚴照寺遺跡	純文	集落	28	福山窯跡	奈良	窯
9	宮森新天池遺跡	純文	散布地	29	福山小堤窯跡	奈良	窯
10	宮森新北島I遺跡	純文（前・中・晚）	集落	30	福山大堤窯跡	奈良	窯
11	鞠成新遺跡	純文?	散布地	31	小杉遺跡	奈良・平安	散布地
12	三合遺跡	純文	散布地	32	高道向島遺跡	奈良・鎌倉	集落
13	増山遺跡	純・奈・平・中・近	散布地・集落	33	富村遺跡	奈良	散布地
14	中尾遺跡	純文	散布地	34	千代遺跡	奈良・平安	散布地
15	宮森遺跡	純文	散布地	35	太田遺跡	奈良	散布地
16	徳万遺跡	純文（中・後）・古墳・中世	散布地	36	秋元窪田島遺跡	古代・中世	集落
17	東保石塚遺跡	純文（中）・奈・縁	散布地	37	徳万頼成遺跡	古代・中世	集落
18	東保遺跡	純文・古代・中世	集落	38	正権寺遺跡	平安	散布地
19	福山大堤遺跡	純文	散布地	39	狐塚遺跡	鎌倉	散布地
20	安川野武士A遺跡	奈良・平安・中世	散布地	40	亀山城跡（増山城跡群）	鎌倉・室町	山城

Tab.5 久泉遺跡と周辺遺跡一覧表



Fig.12 久須遺跡とその周辺遺跡 Scale=1/50,000

この図は国土地理院長の承認を得て同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである。(承認番号)平15北緯第290号

第3章 調査の成果

第1節 調査方法と調査経過

(1) 調査方法

今回の調査対象面積は、4,100m²である。調査区には生活道路である市道久泉根泉線が横断しており、市道部分の調査を行わなければならないため仮設道を付設する必要性が生じた。よって、市道を挟んで北側（A-1区）・南側（A-2・A-3）に分けて調査区を設定し、仮設道付設・市道撤去工事を調整しながら調査を行うという変則的な方法をとった。

遺構向は、試掘調査では一回しか確認できなかったが、調査を実施した結果二面存在することが判明した。A-1区→A-2区→A-3区の順で上下層遺構面を調査完了しながら進めた。また、A-2区と並行してA-4区の調査を行った。

現地調査は一般的な発掘の手順（表土・盛土除去→包含層掘削→遺構確認面の精査・遺構検出→遺構撤削→写真撮影→記録作業→測量→補足作業）を行った。試掘調査結果に基づき調査員立ち会いのもとバックホウによる表土除去を実施した。排出した表土・遺構掘削時の堆土は調査区外に山積みにした。表土掘削後すでに遺構を確認したので、この面を上層遺構面として調査を行うこととした。小規模な土坑やピットについては、遺構検出したのちに5cm程度掘り下げた状態で記録し、測量後に遺構断ち割りを行い断面の記録作業をするという手順をとった。グリッドの設置には、國家座標（日本測地系）を基準に10×10mの基準杭を設定し、出土遺物は5m毎に適宜取り上げた。遺構掘削後、測量・写真撮影などの記録作業を随時実施した。

上層面の調査が終わり次第、人力による包含層掘削を行ったが、圃場整備によりこの包含層もかなり削平をうけており、表土掘削の段階で既に地山まで検出できた箇所もあった。下層面の調査は上層面と同様に行い、下層面のみ航空測量による測量、撮影を実施した。

現地調査は、4月21日に開始し9月30日に終了した。現地調査終了後、整理作業、報告書作成業務に入る。出土遺物の洗浄は現地調査中の雨天時に実施しており、室内整理はジェットマーカーによる注記作業より始めた。注記作業後、分類、接合、実測、復元、トレース、写真撮影、報告書作成を順次すすめた。

発掘作業ならびに整理作業に下記の方々の参加を得た。炎天下の中、ひたすらに作業に従事してくださった作業員さんならびに、素晴らしい技術をもって整理に携わってくださった方々に衷心より謝意を表したい。

（野原・中村）

発掘作業 天野秋一、安念一正、荒木久平、大橋正弘、折橋 清、永森 是、根田信一、島田一郎、

横徳みゆき、仙道孝俊、田嶋 博、高田豈一、鶴巻ヨシエ、長森 魁、西村昌蔵、信田豈次、

信田正明、橋本節子、林 清夫、東島耕三、平木宗吉、村上良雄、室崎光子、餅田外之、

安ヶ川礼子、山本 修、山本政信、横井一郎、（以上、（社）砺波市シルバー人材センター）、

越前時男、船木藤夫（以上、（社）高岡市シルバー人材センター）、黒田忠明、新保勝正、宝田郁夫、

宝田紀代春、野田幸二、堀田 肇、渡辺賀世子（以上、（株）中部日本鉱業研究所）

安念眞吾、石倉慎也、今井大樹、武部大樹、竹田有貴也（以上、庄南小学校5年生）

整理作業 加藤由美子、北川泰子、真田恭子、新保利恵、高橋英史子、橋 真理子、細 シノブ、

福田 滉、渡辺賀世子（以上、（株）中部日本鉱業研究所）



Fig.13 調査区位置図 (Scale=1/1,500)

(2) 現地調査日誌抄

- | | | | |
|------|--|------|-----------------------------------|
| 4／21 | 事前準備 | 7／17 | 約500基の遺構を確認、掘削・記録作業 |
| 5／12 | A-1区、表土掘削開始。 | 7／25 | 庄川町ヤング創造7ドンチャ事前研修11名 |
| 5／16 | 上層の調査開始。約30基の遺構を確認。
並行してA-2区の表土掘削を行う。
マスコミ各社取材。 | 7／31 | A-4区(84m ²)調査開始 |
| 5／22 | 外山氏、来訪。プラント・ホール試料採取。 | 8／8 | 仮設道の設置終了、市道等を撤去。
撤去後、A-3区表土掘削。 |
| 5／23 | 上層調査終了、人力による包含層掘削を
開始。 | 8／20 | 上層調査に入る。約100基の遺構を確認。 |
| 5／27 | 下層調査に入り、隨時各作業を行う。 | 8／22 | 砺波市コミュニティー放送取材 |
| 6／11 | A-1区下層、航空測量 | 8／27 | 包含層掘削を行い、下層遺構検出後、掘
削・記録作業に入る。 |
| 6／12 | A-2区の調査開始。上層遺構検出。約
10基の遺構を確認し、同時に掘削・記録作
業を行う。砺波市文化財保護審議会視察 | 8／28 | 庄南小学校体験発掘(5名) |
| 6／16 | 仮設道設置工事開始。上層調査を終え、
包含層掘削・遺構検出。 | 9／2 | 庄南小学校体験発掘(5名) |
| 7／1 | SK166石組建物の掘削に入る。 | 9／8 | 記者発表 |
| 7／16 | 包含層掘削・遺構検出作業終了。SK
166掘削終了、タワー設置し遺構撮影。 | 9／13 | 久泉遺跡現地説明会 |
| | | 9／17 | 下層面調査終了、航空測量 |
| | | 9／20 | 補足作業、撤去作業 |
| | | 9／29 | 太田地区歩こう会見学 |
| | | 9／30 | 現地事務所等撤去、現地調査終了。 |

第2節 基本層序 (Fig.14)

今回の調査区は東西延長150mであり、調査区の西側に南北に走る埋没谷（A-2区）を隔てて相違が若干異なり、また県道高岡・庄川線を越えたA-4区も層相・層厚などに差がでてきている。久泉遺跡の所在地は、かつて旧中田川と旧千保川に挟まれた微高地だったところであり、圃場整備以前までは河岸段丘が良好に確認できる状態であったことから、今回の調査区でも微高地形が入り組んだ箇所であると推測される。

基本層序は、調査主体となったA-1～3区の層序を基準とした。1層は現表土の暗灰黄色土で2層との層界は平坦判然である。2層は黄灰シルトで、3層との層界は東側では平坦判然であり酸化鉄、マンガンが集積しているが、西方向に向かって徐々に波状漸変となっている。3層は黄灰シルトで、A-2区の西端では確認できなかった。4層は黄灰シルトに黒色土粒が混入し、A-2区の中央では4層の堆積が確認できなかった。3層と4層との層界は平坦漸変であり、4層と5層の層界は波状漸変である。5層は黒色シルト（黒ボク土）で、調査区全体にわたって遺物包含層化しており、上面で遺構を確認できたことから上層遺構面とした。A-4区で厚く堆積している5層は、上部層の影響をあまり受けおらず純粹に近い黒ボク土であったが、調査区全体では一定した堆積状況ではなく微地形により堆積厚が大きく変化していた。とくにA-2区周辺では、5層がかなり後世の擾乱を受けているものと思われ、調査区全体で5層の性格（堆積年代・包含遺物年代）が若干異なる状況であった。つまり、5層下面で確認した下層遺構面は、場所により異なるということであり、A-1・3区とA-2区南西隅では同質の面として扱うことは適当でなかったが、本書では同列で扱っている。5層と6層の層界は波状漸変であり、5層が長い時間をかけて堆積したことを見物語る。6層は洪水起源と考えられる黄褐色シルト（地山）である。地山面で下層遺構の検出を行った段階で、調査面積の1/3で7層の砂礫層が確認された。下層遺構はこの層まで掘り込まれているものもあった。A-4区はA-1～3区とわずか20m離れているだけであるが、層相が異なっていた。調査面積も狭かったこともあり、今回は下層面のみで比較的浅いピットが8基と風倒木1箇所が確認されただけであった。

（野原・中村）

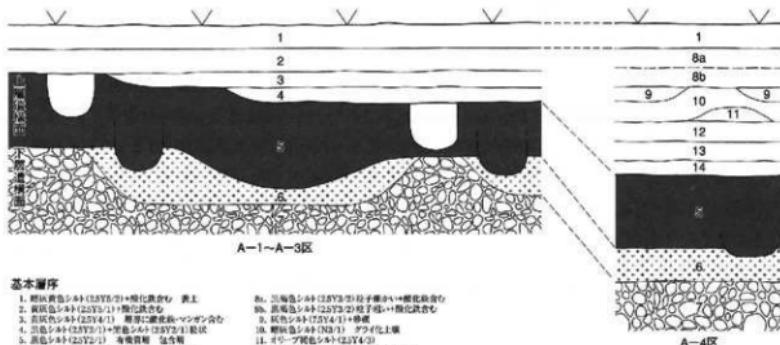


Fig.14 基本層序模式図

第3節 遺構

今回の調査において検出された遺構は、掘立柱建物・石組建物・竪穴状土坑・溝・土坑・井戸・ピットで構成される。調査区全体で遺物を伴う遺構は少量にすぎない。

(1) 上層遺構 (Fig.15)

試掘結果より、ほぼ全面に遺物包含層が所在することがわかつてていたため、重機による表土剥削は包含層上面まで行った。両場整備による削平を受けていたため、東側・西側調査区の西側は既に地山が検出された。表土を掘削した段階で遺構が確認されたので、上層面として遺構調査を行った。

上層面では、溝は6条、土坑64基、ピットが84基確認した。

この面で特徴的なのは、A-1、A-3区の西側より、方形の土坑が集中して確認できたことである。形状などにより土坑墓とも考えられ、後述する（第3章第6節、p.68）ように土壤サンプルを採取し、埋葬施設であるか脂肪酸分析を行った。しかしながら、土坑墓と考えられる結果が出なかつたが、可能性は捨てきれないものであった。ここではあえて、土坑墓という記述は避けた。

① 土坑

SK17 (Fig.18) A-1区の中央に位置し、138cm×52cm、深さ56cmを測る隅円方形土坑である。長軸は南北方向にあり、遺物は繩文土器 (Fig.27-1) が出土している。

SK20 (Fig.18) A-1区の西側に位置しており、138cm×54cm、深さ37cmの精円形の土坑である。長軸方向は南北にある。遺物は、珠洲・土師器が出土している。

SK21 (Fig.18) A-1区西側に位置し、168cm×85cm、深さ46cmの隅円方形土坑である。長軸は南北方向にとる。出土遺物は、中世土師器の小片がある。

SK28 (Fig.18) A-1・A-3区の境に位置する。直径70cm、深さ54cmの円形土坑である。遺物は出土していない。A-1区調査時に確認し、プランは違うが他の隅円方形土坑と同じ覆土で、堆積状況も似ていた。

SK520・SK589 (Fig.17) SK520はA-3区の西端に位置し、166cm×88cm、深さ74cmの土坑で、SK589を切る。SK589は深さ50cmを測り、検出時にはSK520との切り合いや平面プランははっきりしなかった。SK520とSK589の長軸は東西方向である。遺物は出土しなかった。

SK534 (Fig.17) A-3区の西側で最も土坑が集中しているところにあり、同じような隅円方形土坑に切られている。190cm×96cm、深さ50cmの隅円方形土坑である。長軸は東西方向である。この土坑は短軸である両端に10~30cmの縁が配石されており、20cmまでの深さに置かれていた。西側には床面から少し浮いた場所で貨銭が出土しており、一枚であるが六道銭と考えれば、この貨銭や配石より土坑墓の可能性がある。他に中世土師器の小片が出土している。

SK535・536 (Fig.17) A-3区の中央に位置するSK535は206cm×88cm、深さ50cmの隅円方形土坑で、中世土師器の小片が出土している。SK536は140cm×76cm、深さ50cmの底面は隅円方形であるが、平面プランは不整形で南北に深さ20cmの段を持つ。それぞれの土坑より、中世土師器片 (Fig.27-8) が出土している。

SK538 (Fig.18) A-2区の土坑集中部に位置し、119cm×84cm、深さ30cmの隅円方形土坑である。長軸は東西方向にある。遺物は、珠洲 (Fig.27-17) が出土している。

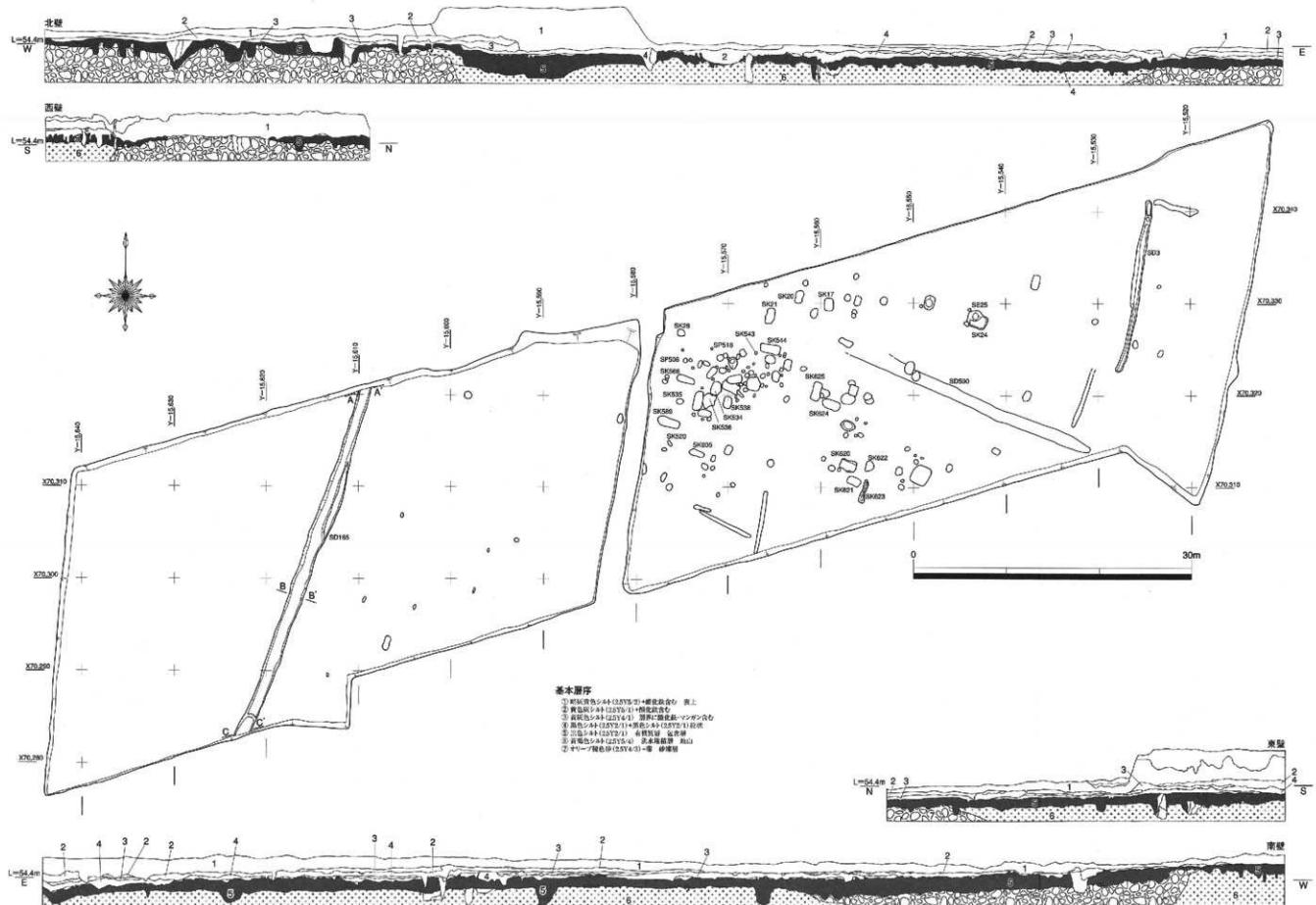


Fig. 15 上層造構全体図 造構平面図 (Scale=1/400) 土層断面図 (水平方向: Scale=1/400, 垂直方向: Scale=1/100)

SK543 (Fig.18) A-3区の土坑集中部に位置する、102cm×88cm、深さ63cmの円形土坑である。

出土遺物には、珠洲（Fig.27-15）がある。

SK544 (Fig.17) A-1、A-3区の境に位置しており、220cm×88cmの隅円方形土坑で、深さ66cmを測る。長軸は東西方向である。この土坑で、脂肪酸分析（第3章第6節、p68）を行った。遺物は出土していない。

SK566 (Fig.18) A-3西側の土坑集中部にあり、145cm×96cm、深さ52cmの隅円方形土坑である。長軸は南北方向にある。出土遺物は、中世土器（Fig.27-6）、縄文土器の小片があるが、上層にあったことからも流れ込みよるもので、この遺構の帰属年代をはかる遺物とは言い難い。

SK605 (Fig.18) A-3区の西側に位置し、154cm×64cm、深さ63cmの隅円方形土坑である。長軸は東西にある。出土遺物は小片ではあるが、土器器、珠洲、八尾がある。

SK625 (Fig.18) A-3区の中央に位置し、198cm×84cm、深さ52cmの隅円方形土坑で、長軸は南北方向にとる。覆土は黒褐色土の単層で、中世土器（Fig.27-10）、珠洲片と炭化物が出土している。炭化物は年代測定（第6節、p67）を行った。

SK620 (Fig.17) A-3区の中央に位置し、180cm×104cm、深さ72cmの方形土坑で、長軸は東西方向にとる。遺物は、珠洲が1点のみ出土している。

SK621 (Fig.18) A-3区中央に位置しており、142cm×80cm、深さ47cmの隅円方形土坑である。覆土は灰黄色土の単層であり、比較的小さいことから、他の隅円方形土坑と性質が違う可能性がある。長軸は東西にとる。遺物は出土していない。

SK624 (Fig.17) A-3区の中央に位置しており、206cm×88cmの隅円方形土坑で、深さ64cmで西側に深さ38cmの段を持つ。長軸は東西方向である。覆土の1層目からはわずかではあるが、炭化粒がみられた。遺物は、珠洲・土器器の小片がわずかに出土している。

②ピット

ピットは84基検出し、これら土坑の間に点在していた。掘立柱建物・樹列としての配列を認められず、比較的浅いものが多く、また土層断面より柱穴と考えられるものはなかった。

SP508 (Fig.18) A-3区の東側に位置し、直径25cm、深さ38cmのピットである。この遺構からは、上層より、瀬戸の折縁深皿1点（Fig.27-13）が出土している。

SP518 (Fig.18) A-3区に位置し、直径66cm、深さ43cmを測る。中世土器（Fig.27-4）が出土している。

③溝

上層面から溝は6条検出した。それぞれの溝は方向に統一性はみられず、SD165のみ途切れることなくしっかりと残っていた。

SD3 (Fig.16) A-1区の東部を南北方向に延びる溝である。南側は深度を浅くして途切れており、北側は掘り込みが深く、調査区外へと延びている。比較的細い溝であるが、最大幅は84cm、深さは20cmである。

SD165 (Fig.16) A-2区で検出した南北に延び直線的な溝である。SD165は最大幅146cm、深さは60cmである。北端は黒色包含層に掘り込まれており断面形は逆台形状であるが、南側へと黒色土が薄く疊層が広がり、疊層に掘り込まれる断面形が崩れしていく。この溝より西側の大部分は、黒色土が削平を受けており上層面での遺構は確認できず、周辺遺構からこの溝の性格を何うこと

はできない。遺物は、小片ではあるが中世土師器（Fig.27-2・3・5・7）、珠洲（Fig.16・18）、青磁（Fig.27-11）などが出土した。

SD590 (Fig.16) A-3区に位置し、東側調査区域の対角線上に延びる。東側調査区の西側は、削平を受けており、全体的に深さは10cmと浅く、消滅している。幅は110cmと平均幅を保っている。遺物は、わずかではあるが中世土師器、珠洲（Fig.27-19）、八尾、瀬戸（Fig.27-12）が出土した。

④井 戸

井戸と明確に判断できるものはなかったが、形状・規模等から井戸以外に可能性のないものを数基確認したため、井戸状遺構として扱うこととした。

SE25 (Fig.16) A-1区に位置しており、SK24が埋まつた後に掘り込まれている井戸状遺構である。直径120cmの円形で、深さは74cm、底は地山シルトを貫き疊層に達する。遺物の出土はみられなかった。

SK24 (Fig.16) SK24は、200cm×160cmの方形を呈しており、北西隅はSE25が切りあっている。深さは40cmあり、底面は平坦である。遺物は出土していない。
（野原・中村）

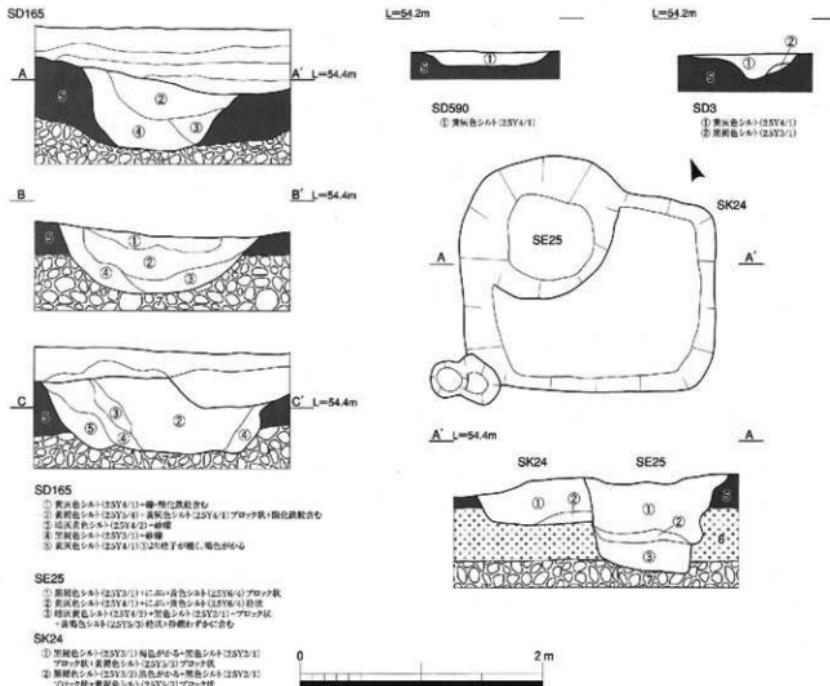
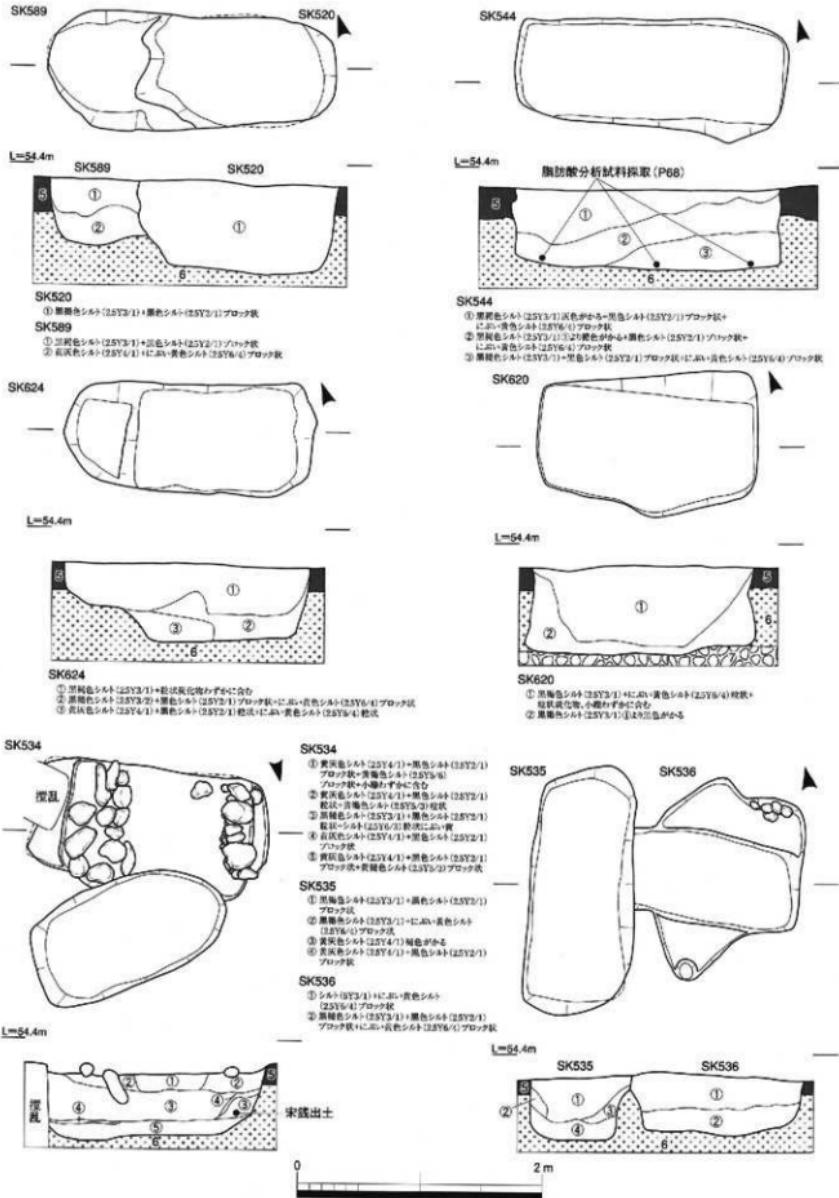


Fig.16 上層遺構図(1) 溝・井戸・土坑 (Scale=1/40)



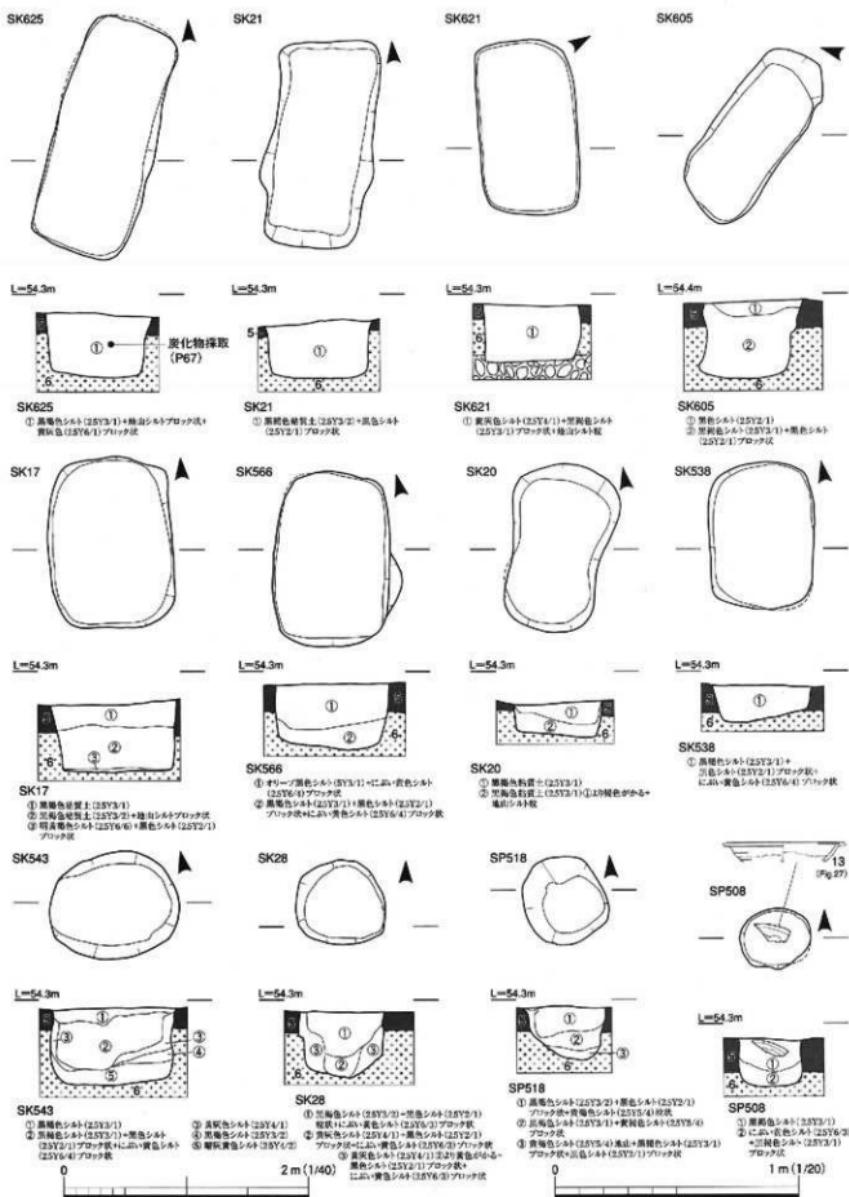


Fig.18 上層構造図(3) 土坑・ピット (Scale=1/20…SP508 1/40…その他)

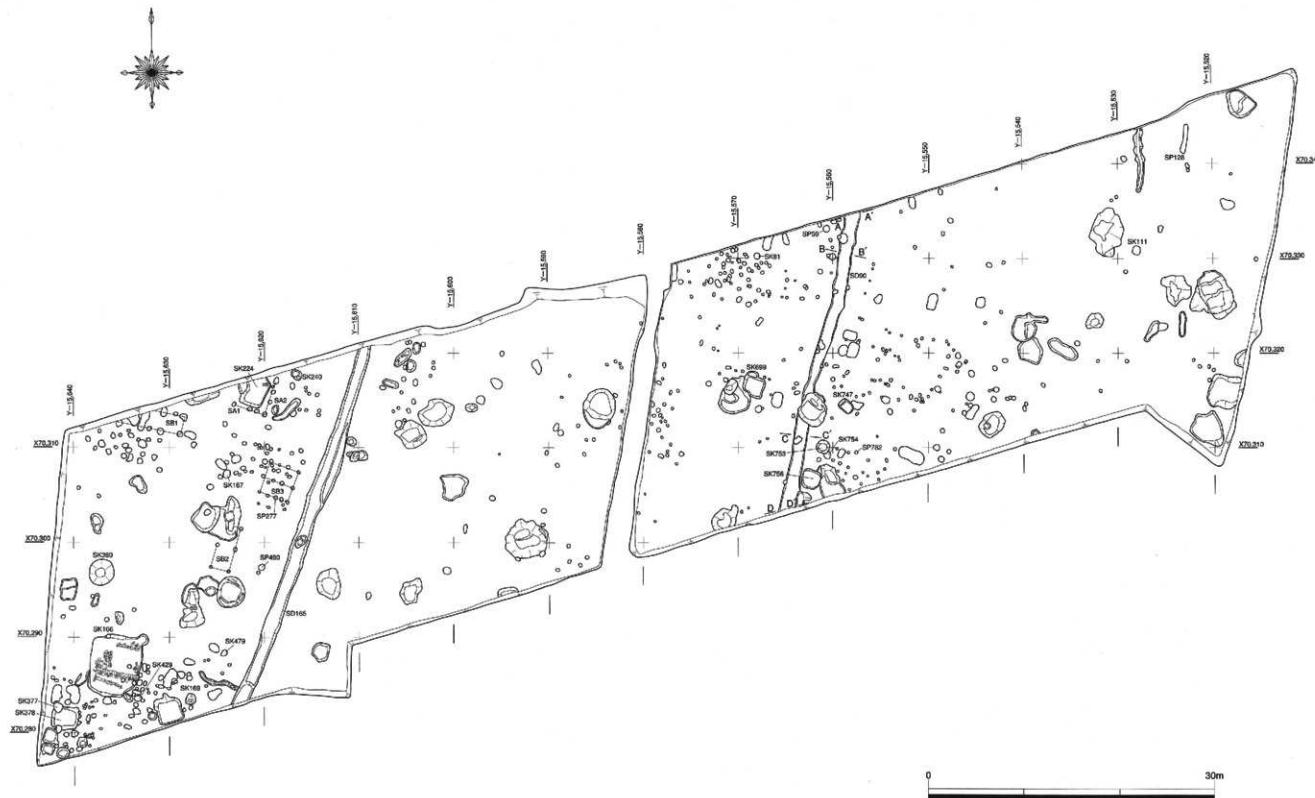


Fig. 19 下層造構全体図 (Scale=1/400)

(2) 下層遺構 (Fig.19)

下層では、掘立柱建物3棟、石組建物1基、竪穴状土坑1基、溝4条、土坑94基、ピット504基を確認した。ピットは多数確認しており、建物として確認できたのは3棟のみであったが、その他のピットは数箇所集中して検出した。上坑は、上層面で確認されたような隅円方形土坑は数基のみであった。その他に、風倒木痕を33箇所確認した。表土除去後、また黒色包含層掘削中に確認しており、黒色土掘削中においては様々な深さで風倒木を検出しているため、あえて全ての風倒木痕を下層扱いとした。風倒木の規模は大小あり、遺物が出土したものはなかった。特に倒木の配列に規則性はみられず、自然横生と思われる。

①石組建物

今年度の久泉遺跡の調査では、川原石などを配石・集石した遺構が数基確認できた。主だったものは、いわゆる土台建物と呼ばれるSK166や竪穴状土坑のSK224がある。「土台建物」という呼称については、機能的に限定したイメージをもつ可能性があることから、今回はあえて石組建物として扱った。

SK166 (Fig.20) A-2区南西で検出した。南北6.4m東西5.4mを測り、面積約34.5m²である。北西壁は削平されていた。北東隅には直径1.2m深さ0.35mの土坑が連接していたが、SK166と同じ埋土であったため、切り合は確認できなかった。おそらくSK166とは別に形成された土坑であると考えられる。A-2区東側では地山シルトである6層は存在せず、7層の地山砂礫層上面において検出した。しかし、遺構埋土と上層である5層が同質であることから、実際の掘り込みレベルは、さらに上部である可能性が高い。

検出面から約20cm掘り込み、川原石によって規則的に石列を配置することによって構築している。石列は、各列とも平均レベル値に高低差がみられる。南から北側に向かって石列の高さが低くなる。埋土を掘り下げるとさらに東西の右列を1列確認した。南辺に3列北辺に1列の石列と、西辺に崩れてはいたが方形形状に礫が集積しているのを検出した。北辺の右列は遺構の削平によつて2.4mしか残っていないが、これと対応する石列は南辺に並ぶ3列の北側にあるものと考えられ、長軸を南北方向にした30~45cm人の礫が並んでいる。他の2列の石列は、列を構成する礫の大きさが10~45cmと大小様々であり、北側の石列とは様相が異なる。十層断面を確認すると、南辺3列の南側石列より北方向への掘り込みがみられ、一度同じような石列をもつ遺構をある段階で作り変え、拡張した可能性も考えられる。

建物とした場合、その正面性についてどの方位か検討したが、わからなかった。ここでは石列を持たない東側を便宜上正面として図化している。

石列を除去すると、直徑45cm深さ20cmのピットを確認した。その他、内外部には明瞭な柱穴が確認されていないが、SK166内には直徑40cm深さ約10cmほどの小穴が3箇所検出した。埋土掘削、石列除去後の底面は、平坦であった。

SK166内には礫石として使用されるような扁平礫は確認できず、石列上に柱を据え置くなどして建物の基礎とする確たる判断材料はなかった。遺物は、珠洲 (Fig.28-38)・中世土師器・青磁 (Fig.28-35) の小片が出土している。

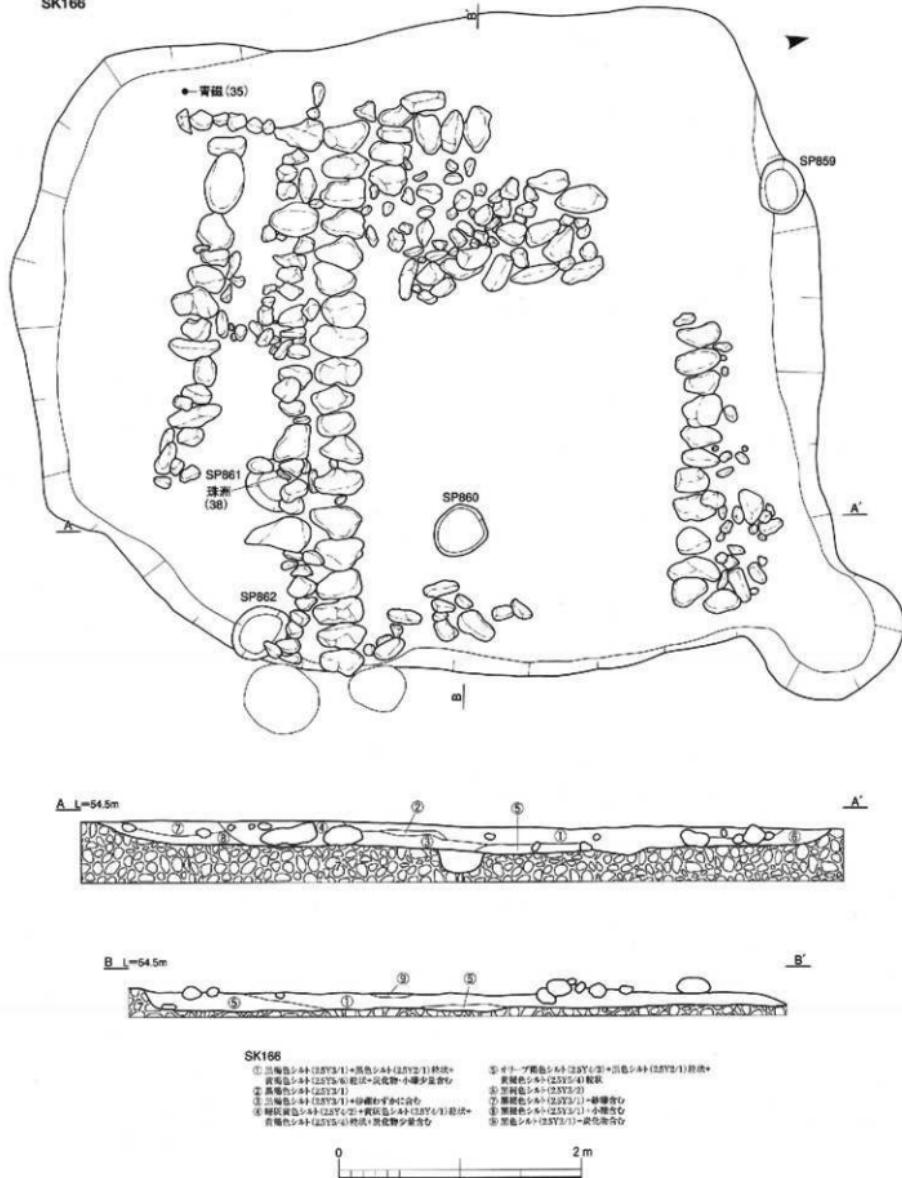


Fig.20 下層構造図(1) 石組建物(SK166) (Scale=1/40)

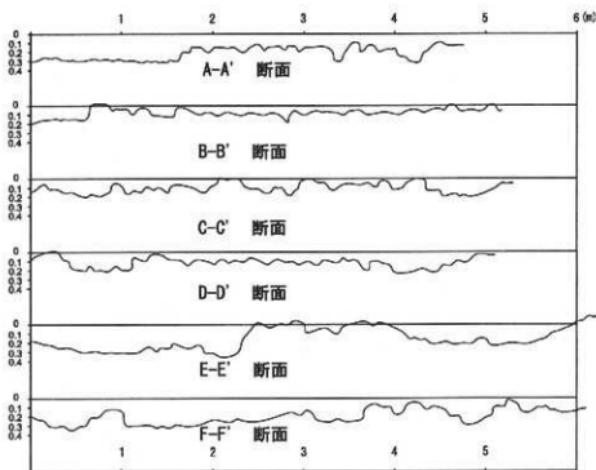
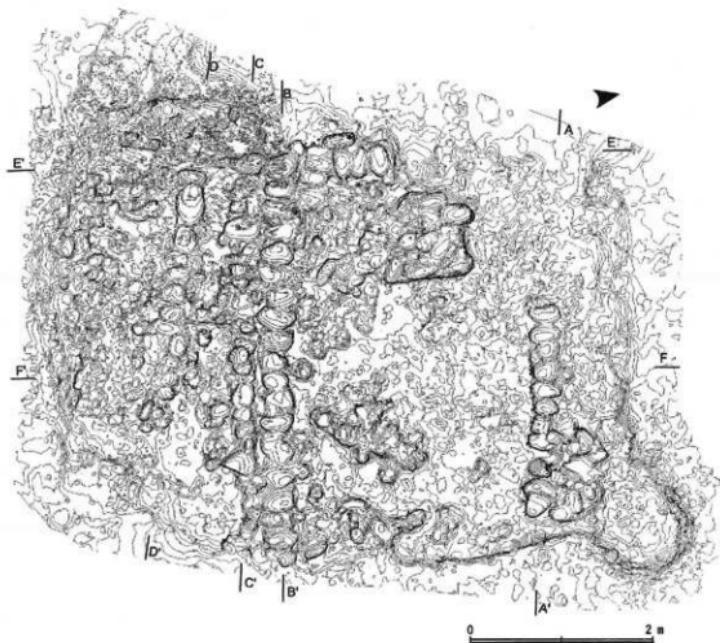


Fig.21 レーザー計測図 石組建物 (SK166) (Scale=1/50) ※等高線は2cmセンターである

②豊穴状土坑

SK 224 (Fig.22) A-2区北側で検出したSK224は東西に2.3m南北に3m、深さ36cmの豊穴状土坑であり、調査区外へ広がっている。西辺は、深さ18cmでテラス状に西側へと膨らんでおり、南辺の壁の立ち上がりはしっかりしている。

遺構内には、遺構肩より20cm内部に5~20cm前後の礫が大量に埋まっていた。意図的に配置されたものは、北辺に15cm大の礫が長軸を南北方向に配置した4個1列のみ確認できた。その他の礫は意識的に投げ込まれたようであり、中には4点被熱を受けたものもあった。礫除去後の土坑底面は、平坦であった。

SK224の南側と東側には、柱穴状ピットが並んでおり柵列と考えられる。西側には確認できなかった。遺物は、珠洲と中世土師器の小片が出土している。

SA 1 (Fig.22) SP219・220・221・222で構成される柵列である。SK224の南側に並んでおり、直径35~45cm、深さ20cmの規模をもつ。いずれも柱痕等は残っておらず、掘り方や柱間の間隔にもばらつきがあり柱穴と判断しがたいが、周辺に多数のピットが点在する中でSK224の周辺にSA 1が整然と列を成していることから、柵列の可能性を持たせた。各々の柱穴から遺物の出土は確認されなかった。

SA 2 (Fig.22) SP223・241・318で構成する柵列である。SK224の東側に並んでおり、直径40~70cm、深さ15~30cmを測る。SA 1の柱穴と同様にいずれも柱痕は残っておらず、平面プランもばらつきがあったが、柱間は1.1~1.2mと等間隔に並んでいる。各々の柱穴から遺物は出土していない。

③溝

下層では溝を4条確認したが、そのうち3条は幅が40~50cmと狭く深さは40cm前後で、掘り方はしっかりしているが全長も短く途切れている。遺物出土も少量にとどまる。

SD 90 (Fig.22) A-3区中央よりやや西側に位置し、調査区を南北に横切り調査区外へ延びている直線的な溝である。検出面の地山、溝の底面レベル値は南北で20cmの高低差があり、南から北へ北流していると考えられる。幅は80~160cm、深さは比較的浅く溝の中央と南側では東辺の溝肩が途切れる箇所もあり平均して約15cmを測る。底面は平坦であった。遺物は、中世土師器・珠洲 (Fig.28-33・41) が出土している。SD90は、A-2区上層で確認したSD165と平行しており、溝幅等の規模も似ている。それら2条の溝は出土遺物が時代的にも近いことから、なんらかの関連性があるものと思われる。

④掘立柱建物

掘立柱建物3棟は、A-2区中央の谷部より西側に位置している。いずれも柱痕は確認できなかった。それぞれ建物は、建物規模や構成、柱穴の形状が異なっており、建物の性格や時期が違うものと考えられる。今回多くの柱穴状ピットを確認した中で、柱穴の間隔、柱穴の平面・断面形状等を考慮し、掘立柱建物と判断した。

SB 1 (Fig.23) 地山が礫層であるA-2区北西隅のピット群に位置する。確認したのは1間×3間で、SB 1は調査区端で切られており、全体規模は判断できなかった。他の掘立柱建物は南

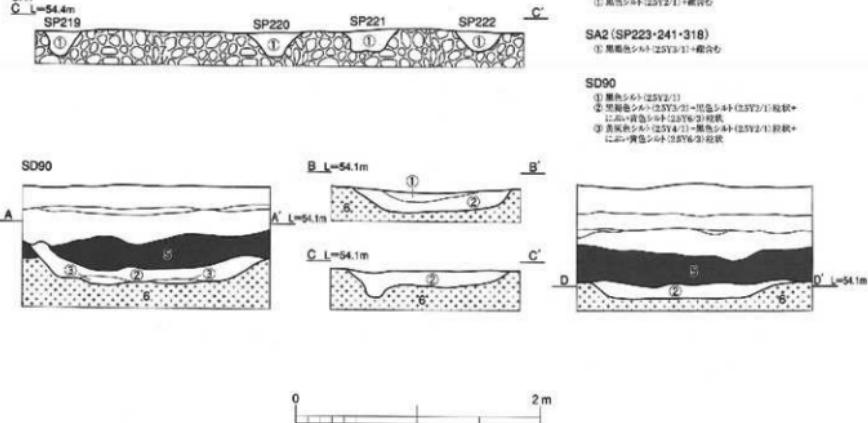
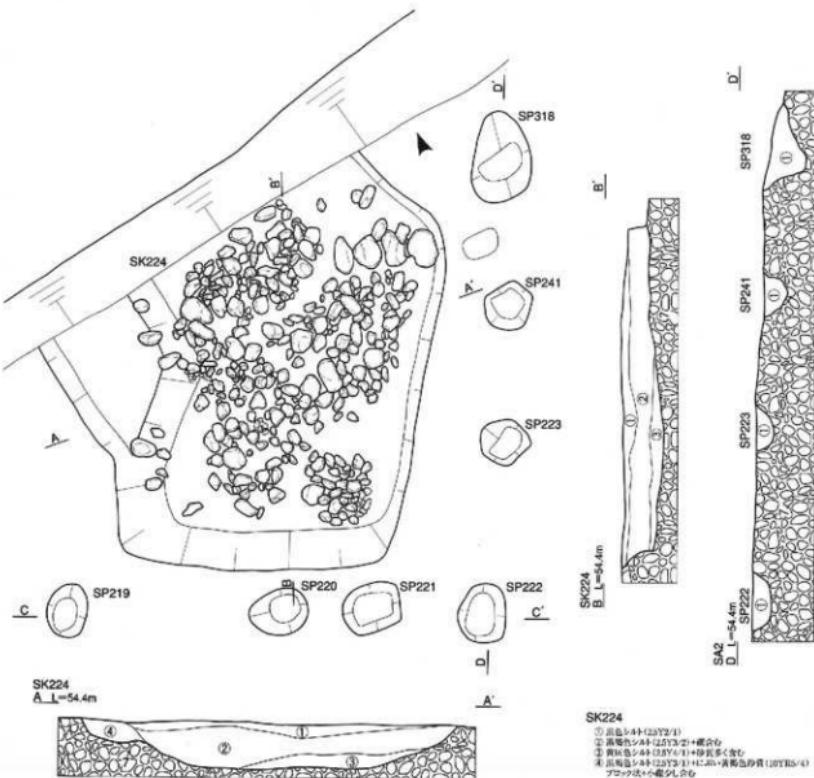


Fig. 22 下層遺構図 (2) (Scale=1/40)

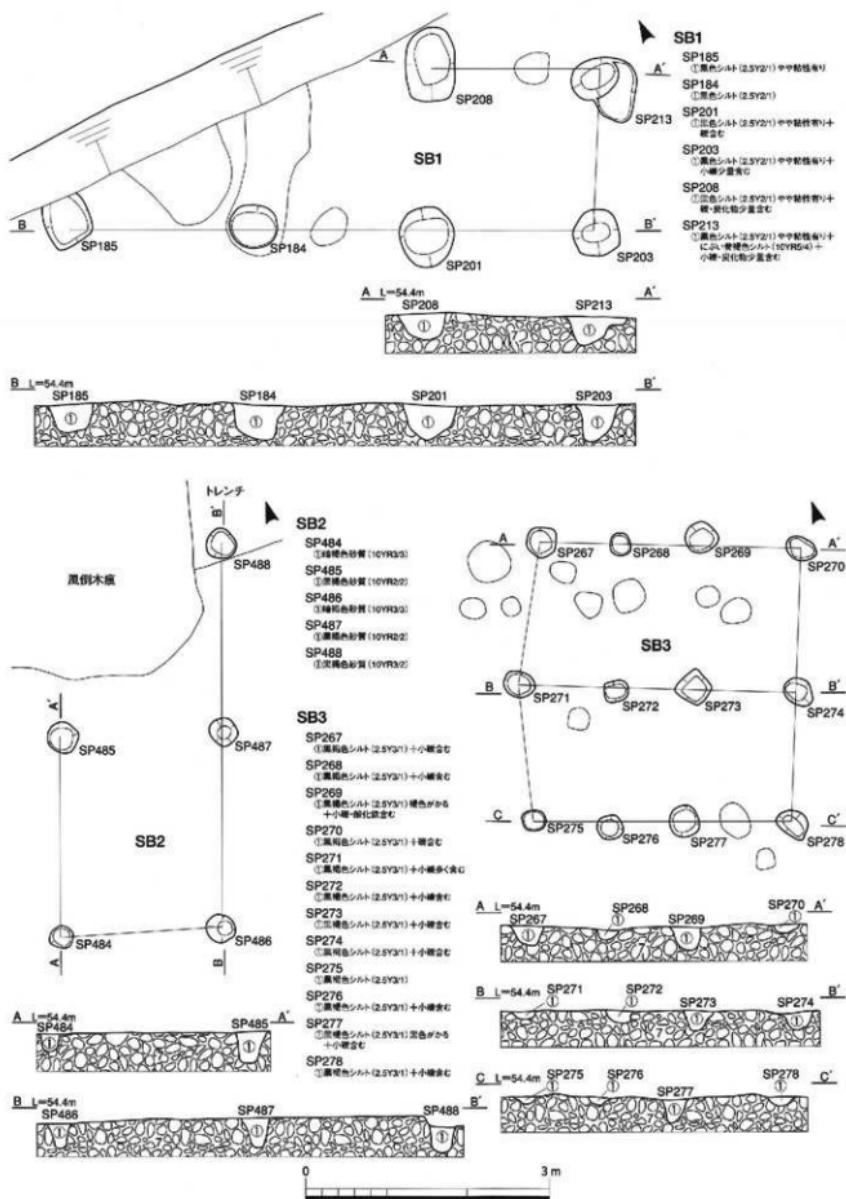


Fig. 23 下層構造図 (3) (Scale=1/60)

北棟があるので、SB 1も同じように南北棟で北へ広がる可能性がある。1間は約2mを測り、柱穴は直径60~70cmで平面プランは円形もしくは梢円形を呈している。深さは30~50cmで、柱痕は無くいずれも単層であった。いずれの柱穴からも遺物は出土していない。SB 2・3の掘立柱建物の柱穴よりも比較的大きいものである。

SB 2 (Fig.23) A-2区中央に位置する。2間×1間の南北棟の建物で、北西隅の柱穴は風倒木によって切られている。長軸4.7m×短軸2mで、長軸の柱間は約2.4mを測り、平面積9.20m²である。主軸はN-17°-Eで南北方向に向く。柱穴は直径30~40cmで、平面プランは円形を呈している。深さ25~40cmを測り、埋土はいずれも単層であった。遺物は出土していない。

SB 3 (Fig.23) A-2区中央に位置するピット群に位置している。このピット群は、地山が疊層の面で検出し、ピットが特に集中しているところであったが、深さが浅いものばかりであった。柱穴は30~40cmの円形で、深さは10~30cmとばらつきがあり、柱痕は無く全て単層であった。疊層を掘り込むもので平面プランや掘り方は崩れしており、はっきりした形がでなかった。SB 3は2間×1間（長軸約3.4m×短軸約2.0m、平面積6.8m²）の南北棟の建物が、2棟建て替えられたものとも考えられる。建て替えられたことを想定すると、SP 267・271・275・277・273・269で構成する建物、SP 268・272・276・298・273・269で構成する建物の2棟が考えられる。この2棟は、軸をずらすことなく東西方向に移動し建て替えられているのが、逆に不自然である。2棟それぞれの柱穴を比べても、埋土も同じであり形状も特に違いが見られなかった。

今回は敢えて、1棟として考えた。2間×3間(3.2m×3.4m)の建物であり、主軸はN-21°-Eで南北方向に向く。平面積は10.88m²でほぼ正方形を呈し、南北の柱間は1.7mを測り東西の柱間は約1mと狭くなる。遺物の出土は、SP 277より完形の中世土師器 (Fig.28-25) だけである。

⑤土坑

土坑は井戸を含め、平面プランは主に円形と方形のものがあった。全ての造構に当てはまるごとであるが、出土遺物量がわずかであり、年代・性格がはっきりするものは少ない。土坑は各調査区に確認できたが、A-1区とA-3区の西側に多く確認した。

SK61 (Fig.24) A-1区西端のピット群に位置する。直径60cmの円形プランで、地山シルト層を掘り込んだ内部の幅は75cmと膨らむ袋状土坑である。深さは45cmを測り疊層まで達している。底面は疊層に達していたが、地山シルト層に続くこの疊層は、疊の間隙がやや広めであった。しかしSK61の底面の疊層は、疊間を小礫で敷き詰めたかのように隙間がなく疊層直上で、意図的に平坦面を作り出しているようである。遺物は出土しなかった。

SK111 (Fig.25) A-1区東側にあり、直径80cmの円形の上坑である。造構内には5~15cm大の礫が詰まっていたが、規則性は認められない。SK111周辺は地山がシルト層（6層）であり、周辺造構をみても疊を含んだ埋土はない。地山シルトを掘りこんだこの上坑は、疊を意識的に投げ入れた感がある。深さは検出面から約8cm、底面は平底であった。珠洲片が出土している。

SK167 (Fig.25) A-2区西側に位置している。長軸85cm、短軸65cmの梢円形であったが、疊層を掘り込む土坑であったため不整形な平面プランで、底面は凸凹している。深さは約15cmを測る。底面には、10~15cm大の礫が混入していたが、配列された様子は窺えない。遺物は、中世土師器 (Fig.28-24・31)・珠洲の小片が出土している。

SK169 (Fig.25) A-2区西側に位置する。直径110cmの円形で、深さ30cmを測る。遺構検出時にすでに、長軸を南北方向に配置した35~40cm大の礫が、東西に3個並んでいた。埋土は砂礫混じりの黄灰色シルトで大礫は含んでいなかった。土師器片 (Fig.28~30) が出土している。

SK360 (Fig.24) A-2区西端に位置する。平面プランは直径2.8mの円形で、深さは80cmで擂鉢状を呈する。埋土の下層上面で中心部にのみ10cm大の礫が多く堆積しており、この下層より珠洲片 (Fig.28~40) が多く出土している。その他にも中世土師器 (Fig.28~20・21・22) が、出土している。

SK378 (Fig.24) A-2区南西隅にピット・土坑が集中する箇所に位置し、6基のピット・土坑と切り合っていた。長軸2.8m、短軸2.4mで平面プランは方形の土坑で、四方の壁の立ち上がりは比較的しっかりしている。深さは検出面から30cmを測り、底面は平坦である。

上層より繩文土器・中世土師器 (Fig.28~29) の小片が出土したが、混入品と思われる。

SK429 (Fig.25) A-2区西南に位置し、SK166と隣接している。長軸75cm、短軸60cmの楕円形で、深さ18cmを測る。地山シルトと砾層の境に位置するが、掘り方はしっかりしており、底面は砾層であったが比較的平坦である。上層で中世土師器・珠洲片が数点出土している。

SK479 (Fig.25) A-2区中央に位置する。長軸70cm、短軸50cmで平面プランは楕円形をしており、深さ20cmを測る。遺物は、珠洲大甕の口縁部 (Fig.28~39) が出土している。

SK699 (Fig.24) A-3区西側に位置している。辺が2.2m、深さ40cmの土坑である。南辺はトレーナによって切られ、北辺は半円形状に膨らみ深さ15cmのテラス状に広がっており、平面プランは不整形なものとなっている。四方の壁の立ち上がりはしっかりしており、底面は平坦である。底面直上・東壁の際に中世土師器、八尾の小片が出土している。

⑥ピット

ピットは多く検出しておらず、西側・東側調査区とともに西端部において集中していた。しかしながら掘立柱建物の復元は3棟のみであった。ピットの規模は様々であるが、直径約20~30cm、深さ20cm前後のもののが多数を占めている。

SP490 (Fig.25) A-2区の中央に位置しており、直径64cmの円形のピットである。このピットからは、六道鏡と思われる6枚重なった宋銭 (Fig.28~32) と小型の携帯用の砥石が出土している。他に宋銭が出土した遺構は、いずれも隅円方形の土坑で1枚のみ出土している。

SK240 (Fig.25) A-2区の中央に位置し、SK224の東側に隣接している。長軸1.3m、短軸80cmの楕円形で、南側はテラス状に張り出している。深さは30cmを測り、底面は丸みを帯びている。遺物は出土していないが、上層より炭化物のみが多く出土しており、これらの年代測定をおこなった（第3章第6節,p67）。結果、11~12世紀という年代が得られた。

SK754 (Fig.25) A-3区の中央に位置する。SK753と重複しており、切り合いでSK754が古い。北側はSK753に切られているが、直径70cmの円形の土坑である。深さは15cmを測り、底面は丸みを帯びている。埋土は単層で、底面に珠洲片が多く出土している。 (野原・中村)

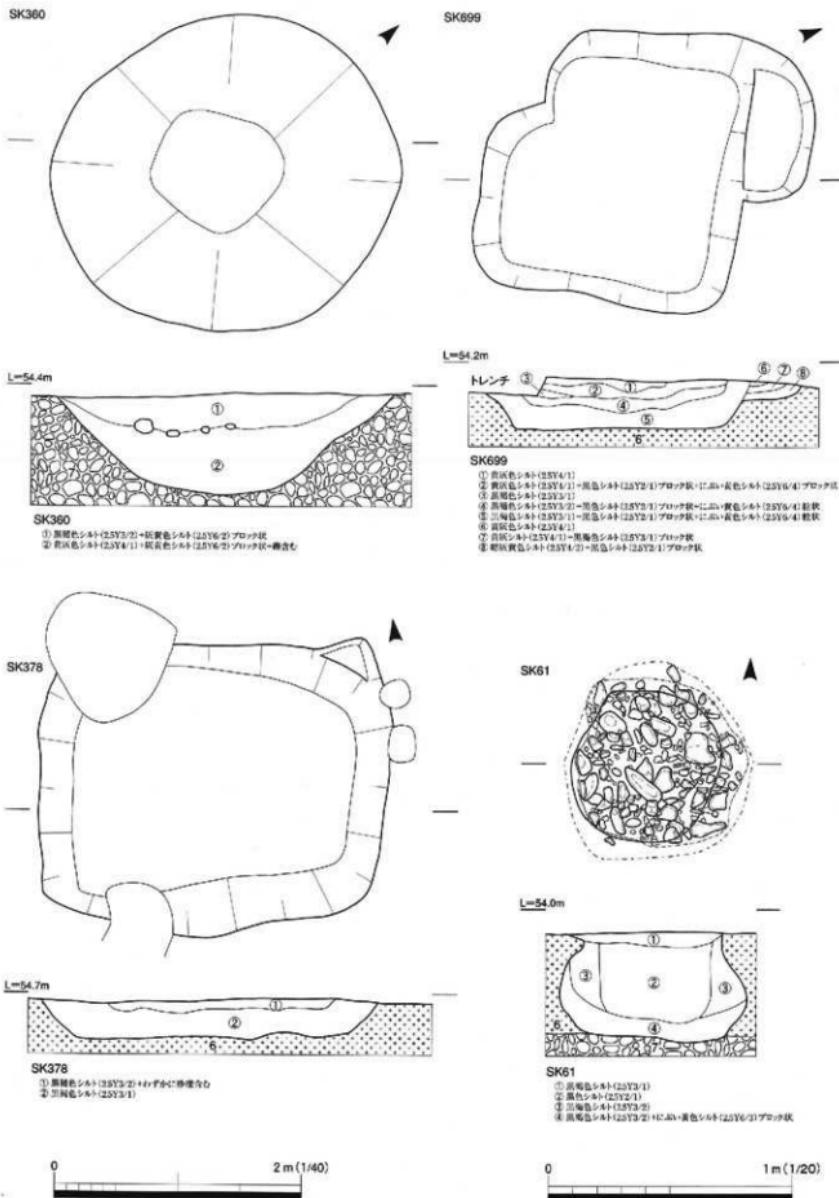


Fig. 24 下層造構図(4) (Scale=1/20…SK61 1/40…その他)

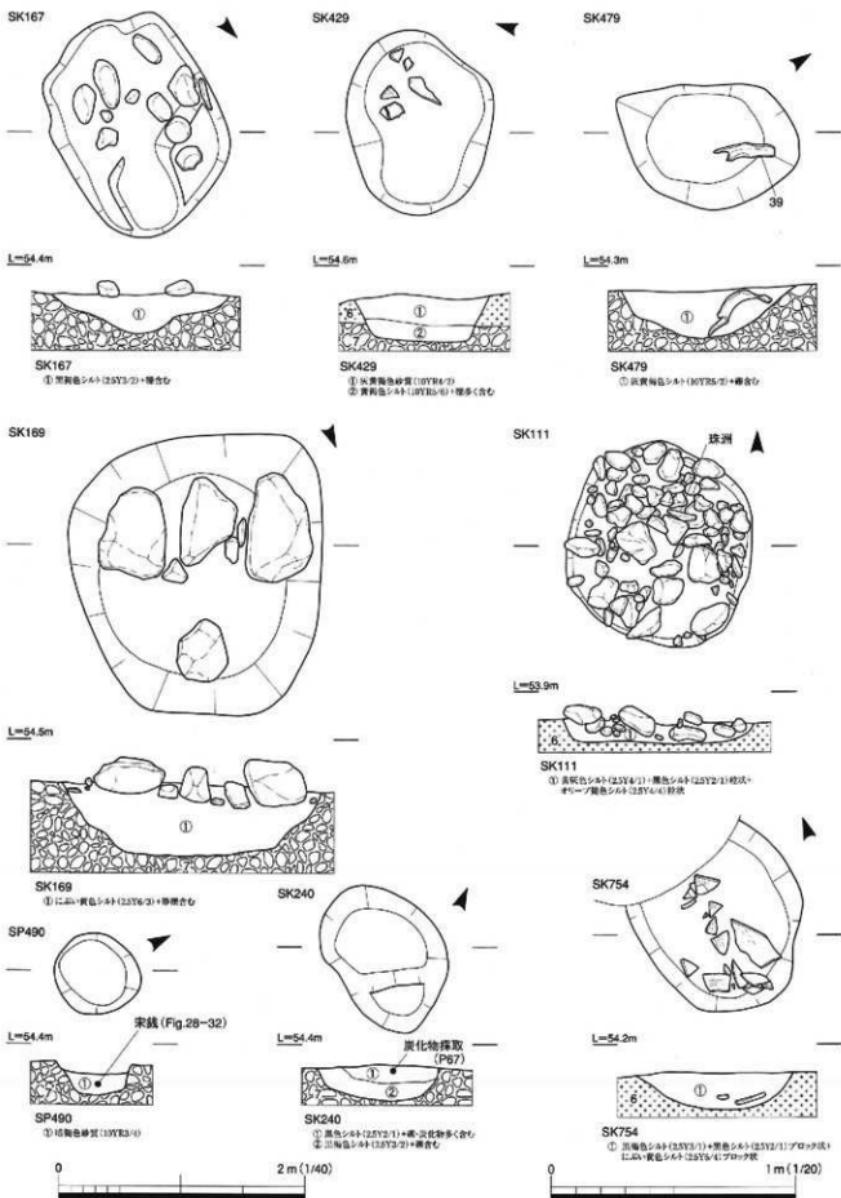


Fig. 25 下層遺構図(5) (Scale=1/40... SP490・SK240 1/20...その他)

第4節 遺物

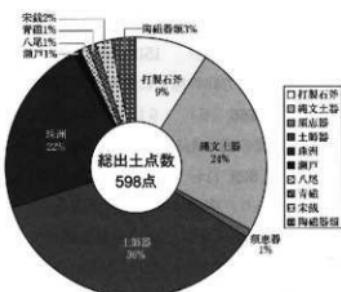
本遺跡から出土した遺物は、総点数にして598点を数える。遺物の種類は、縄文時代では、打製石斧、縄文土器があり、古代では須恵器、土師器がある。中世では土師器、珠洲、瀬戸、青磁、宋銭、八尾で構成される。年代は縄文時代と中世（鎌倉～室町時代）の大きく二時期のものが大半を占める。遺構内から出土した遺物は10%程度であり、多くが包含層出土の遺物である。以下、(1) 上層遺構出土遺物、(2) 下層遺構出土遺物、(3) 遺物包含層出土遺物の順でその詳細について述べることとする。

(1) 上層遺構出土遺物 (Fig.27, Tab. 6)

上層遺構からは、主に中世に属する遺物が検出された。縄文土器が1点だけ出土しているが、これは後世につくられた遺構に混入したものである可能性が高い。

SD165 (2・3・5・7・11・16・18) 中世土器皿、珠洲、青磁が出土している。2は、器高の低い土器皿であり、いわゆるコスター状のような器形である。口縁部をつまみあげるように短く引き出し、内底部と口縁部の境に強い撫でが施され溝状に窪んだ形となっている。3は肉厚の器体であり、軽くつまみあげて口縁部を作り出している。胎土が他のものより赤味がかったり、器形とともに東保遺跡（東保高池遺跡）出土例に類する。5は体部下半の強めの撫でにより底部との境に稜をつくりだしている。内底部端も強い指押さえによって底部をしっかりと作り出している。7も体部下半の強い撫でにより底部との境に稜を作り出している。内底部は刷毛状工具を使用したち撫でを施し、底部端より体部にかけて横撫でを施している。底面は強い指押さえのため指頭圧痕が明瞭に残っている。5・7ともに体部は外反している。2・3・7は、12世紀後半から13世紀前半までの時期に帰属するものと考えられ、5のみ14世紀に属するものと思われる。11は龍泉窯系青磁の碗と思われる。蓮弁文が外面に施されており、13世紀に属するものと思われる。16は珠洲の甕口縁部である。口縁部は尖頭状に拡張しやや垂下しており、吉岡編年第二期（法住寺第2号窯）に相当するものと思われ（吉岡：1994）、12世紀の年代を与える。外面のタキは頭部よりわずかに下がった所より施され、内面は当て具の叩打後横方向の撫でを施している。18は珠洲の擂鉢であり、やや直線的に外傾している体部破片である。卸し目の単位は不明であるが深目に施されている。このほか焼成不良の須恵器の杯が小片であるが、出土している。

SD590 (12・19) 珠洲、中世土器、八尾、瀬戸が出土している。12は古瀬戸の瓶子であり、胴部片と思われる。外面は線刻で模様が施されたのちに鉄輪が施され深い黒色を呈す。13世紀後半のものと考えられる。19は珠洲の擂鉢である。体部はわずかに内湾して立ち上がり、端部は外



傾し外側にやや挽き出すようにしている。卸し目は、約2.5cm幅に12条の単位で、やや深目に施されている。吉岡編年第IV期に相当するものと考えられ、14世紀に帰属するものと思われる。

SK17 (1) 1は純文土器の肩部の一部であり、捺糸文が施されている。小片のため時期を特定することは難しい。

SK536 (8) 8は中世上師器皿であり、体部に明瞭な二段の横撫でが施されている。やや器壁が厚く、体部下半の強い撫でにより体部と底部の境に稜を作り出している。梅原胡麻堂遺跡出土土師器のなかでNA I類に相当するものと考えられ〔越前：1996〕、時期は12世紀中頃から後半にかけてのものと思われる。

SK538 (17) 17は珠洲の壺である。口頭はゆるやかに直立して外傾している。口縁端部は平直であり面取りがみとめられる。頸部中位に横撫で調整による微隆起がある。外面には頸部基部よりタタキが施され、内面は当て具痕がみられるが一部横方向の撫でも施されている。吉岡編年第IV期に相当し、14世紀に帰属するものと考えられる。

SK543 (15) 15は珠洲の壺胴部と考えられる。調整は、外面に綾衫状にタタキが施され、内面は継方向の撫でにより当て具痕を消している。

SK566 (6) 6は中世土師器である。小型の皿であり、一段の横撫でを施している。体部と底部の境は丸みを帯びている。12世紀後半から13世紀前半に帰属するものと考えられる。

SK622 (14) 14は珠洲の壺胴部である。調整は、外面に平行タタキが密に施され比較的浅めであり、内面は当て具痕が残る。

SK623 (9) 9は中世土師器であり、体部がわずかに外反しており、小片ではあるが内面調整より撫で抜きがみとめられ右回りの撫でがうかがえる。口縁部に煤が付着していることから、灯明皿として使用されたものと考えられる。14世紀に属するものと考えられる。

SK625 (10) 中世土師器皿、珠洲片が出土している。10は中世土師器皿であり、内底部に刷毛状工具による撫で痕がみとめられ、撫でを施したのち体部に二段の撫でを施している。体部と底部の境は比較的はっきりしており、底面はわずかに膨らみをもっている。底部は内外面ともに強い指押さえによる指頭圧痕が明瞭に残っている。14世紀に帰属するものと考えられる。

SP508 (13) 13は占瀬戸の折縁深皿である。体部はわずかに内湾して立ち上がり、口縁部で外反し端部はわずかに立ちあがる。体部中央付近から口縁部にかけて緑色釉薬が施されている。曉5号窯に併行し、中IV期に相当するものと考えられ〔藤澤：1997〕、14世紀中頃の年代を与えうる。

SP518 (4) 4は中世土師器皿であり、体部下半で強い撫で調整が施されている。体部は直線的に開き、端部は丸みを帯びている。

(2) 下層遺構出土遺物 (Fig.28, Tab.6)

SD90 (33・41) 須恵器の杯（底部）小片、珠洲、中世土師器皿が出土している。33は珠洲の壺肩部と思われる。内面はロクロ成形時の強い撫でによりロクロ目がみられる。外向には櫛揃波状文が施されていることから、吉岡編年第II～III期にかけてのものとみられる。41は珠洲の壺である。口縁部は水平に挽き出されており、吉岡編年第II期の特徴をもち13世紀前半の年代を与えうる。頸部から体部は、肩部がわずかに張り出し、膨らみをもった体部である。調整は、頸部からわずかに下がった位置から平行タタキを施し、内面には一部横方向の撫でが見られる。

- SK166** (35・38) 中世土師器皿、珠洲、青磁が出土している。35の青磁は龍泉窯系の碗の底部である。高台は削りだししが浅く、底部が厚い。体部外面は蓮弁文が施され、高台の外面まで施釉がみられる。13世紀後半という年代を考える。38は珠洲の擂鉢であり、口縁端部が方頭となる。
- SK167** (24・31) 中世土師器皿、珠洲が出土している。24は、やや器高のある中世土師器皿であり、体部に二段の横撫でが施される。撫での境は明瞭であり、上段の横撫でが強く口縁部がわずかに外反し、端部は丸みを帯びる。底部と体部の境で強い指押さえが入り指頭圧痕により境を明瞭にしている。31はやや深身の中世土師器皿である。外面には刷毛状工具で調整を施した痕跡がのこる。いずれも14世紀代のものと考えられる。
- SK169** (30) 中世土師器皿のみ出土している。30は体部上半にやや強めの撫でが施され、体部と底部は丸みを帯びている。器壁は厚く、端部まで厚く丸みをもっている。口縁部周辺に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものか。14世紀の年代を考える。
- SS171** (28) 中世土師器皿のみ出土している。28は平底で、器高の低いコースター状を呈す。体部は短く垂直に立ち上がっている。12世紀後半から13世紀前半にかけてのものか。
- SK360** (20・21・22・40) 中世土師器皿 (20・21・22) と珠洲 (40) が、小片ではあるが他の遺構に比べ多く出土している。20は体部下半にやや強めの撫でを施すが、底部との境は不明瞭で丸みを帯びながら底部へつながる。口端部は丸みをもち、器壁はやや厚い。21は体部下半でやや強めの撫で調整により底部と体部の境を作り出している。22は一段の横撫でにより体部がわずかに外反している。体部と底部の境は丸みを帯びている。20・21・22とも15世紀に帰属するものと思われる。40は珠洲の壺である。口縁部は円頭状で、水平に焼き出されている。肩部から体部にかけてあまり膨らまず、胴径が口径をわずかに上回る。調整は、外面は頸部よりわずかに下がった位置よりタタキを施し、内面は横方向の撫で後縱方向の撫でにより当て具痕を消している。吉岡編年第IV期に相当し、14世紀のものと考えられる。
- SK377** (27) 中世土師器皿の小片が数点出土している。27の中世土師器皿は、強い一段の横撫でにより、体部と底部の境に明瞭な段をもつ。粘土を継ぎ足し、器壁を厚くしているためか、継ぎ目が断面より観察できた。12世紀後半から13世紀前半にかけてのものか。
- SK378** (29) 蓋文土器、中世土師器がいずれも小片で出土している。29の中世土師器皿は、比較的に深身であり、体部上半の強い一段の横撫でにより外反している。底部の内外面は、強い指押さえによって指頭圧痕が多く残る。14世紀のものと考えられる。
- SK479** (39) 珠洲片のみ出土した。39は珠洲の壺である。口縁部は長く外方へ薄く焼き出して鋭く外屈しており、嘴状となっている。頸基部より外面タタキが施されている。吉岡編年第I期に相当し、12世紀後半のものと考えられる。
- SK753** (34) 中世土師器皿と青磁が出土している。34の青磁は、龍泉窯系の碗の体部である。外面には蓮弁文が施されている。13世紀後半のものと考えられる。
- SK756** (37) 珠洲・八尾が出土している。37は八尾の壺底部である。体部外面は撫で調整を施し、内面には一部指頭圧痕を残している。
- SP128** (36) 36は、龍泉窯系青磁の碗で口縁部の一部である。口縁部は直線的に外傾する形であり、外面には蓮弁文が施されている。12世紀後半から13世紀後半のものか。
- SP277** (25) 25は中世土師器皿であり、器面が摩耗しており調整痕は不明瞭である。内面の底

部と体部の境を強く押さえることによって、底部の平坦面を作り出している。底部の内外面には、強い指圧えによる指頭圧痕がこる。

SP 490 (32) 32は銅鏡である。6枚重なった状態で出土しており、一番上に置かれていたのが、元豊通寶（铸造年代1078年）は北宋鏡であり、宋の時代に铸造された銅鏡では最も多い種類である。日本でも中世に入り経済の発達により貨幣の需要が増し、国内生産の貨幣を流通させることができなかつたので、中国から大量の銅鏡が輸入され、大量に流通した。

SP 768 (26) 26の中世土器皿は、口辺部がわずかに外反している。

SP 782 (23) 23は今回の出土遺物で、唯一完形で出土した中世土器皿である。底部から体部にかけて丸みを帯び、体部の上半に一段の横撫が施されている。器厚は均一で端部は丸味をもつ。口縁端部に1箇所だけ煤が付着していることから、灯明皿として1回使用されたものと思われる。15世紀に帰属するものと思われる。

(3) 遺物包含層出土遺物 (Fig.29~34, Tab. 6・7)

遺物包含層からの出土遺物は、大半が縄文時代と中世に属するものであり、古代の遺物は須恵器がわずかばかり出土したにすぎない。以下、遺物の種類ごとに概要を述べる。詳細については、遺物観察表を参照されたい。

打製石斧 (Fig.29~32) 縄文土器と同様に5層（遺物包含層）から52点の打製石斧が出土している。いずれも5層（遺物包含層）からの出土で、調査区全体から散漫に出土している。5層（遺物包含層）から出土している縄文土器の年代から、縄文時代中期中葉から後期前葉、後期後葉にかけてのものと考えられるが、個々の打製石斧の年代は不明である。打製石斧は北陸地方では縄文時代中期前葉から晩期末まで存在し、さらに弥生時代には縄文時代の打製石斧より大型のものが存在している。

打製石斧は形態に注目し、伝統的な分類方法である短冊形・I類 (Fig. 29・30) と撮形・II類 (Fig. 31・32) に分類した。I類は、側縁部が基部から刃部にかけてほぼ平行であるものとした。II類は、側縁部が刃部にむかって直線的に開くもの・IIa類 (Fig. 31) と基部に近いところでくびれ

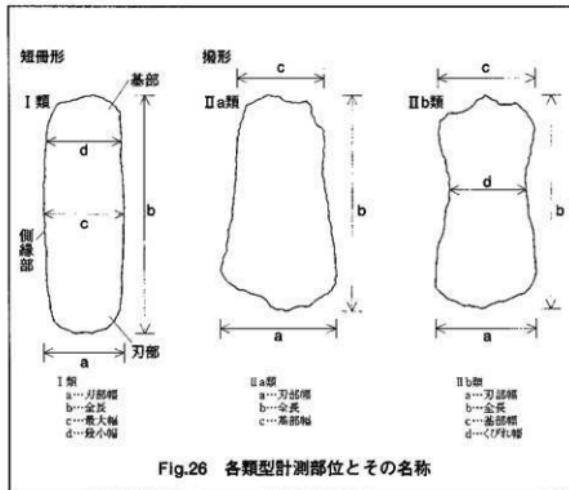


Fig.26 各類型計測部位とその名称

(抉り) をもつもの・Ⅱ b 類 (Fig.32) に分類した。

出土した打製石斧は、片面に自然縫面を残しているものがほとんどである。素材とした原石から横長の剥片を作りだし、側縁部を調整加工し整形したものがほとんどである。1~2点縱長剥片を利用したものも存在する (Fig.31~62など)。また、両面加工しているものも1点ある (Fig.32~66)。

打製石斧の遺存状態は完形品が半数以上を占める。打製石斧製作に伴う剥片などは出土しておらず、製作途中の未成品はみられない。このことから調査地点は製作地や保管場所というよりもむしろ使用の場として考えたほうが妥当であるように思われる。

縄文土器 (Fig.33) 縄文土器はテンバコ1箱にもみたず、小破片ばかりである。時期としては中期中葉~後期前葉、後期後葉にかけてのものが主体を占める。少量ではあるが、中期前葉・後期中葉のものが認められる。

70~76、78~85は中期中葉~後葉の土器と考えられ、上山田式 (70~73)、天神山式 (74~76)、串田新I式 (78~82)、串田新II式 (83~85) の各型式がみられる。

70・72は貼り付け隆帯文の間に半隆起線が施されている。隆帯文上は窓状工具で刻まれている。71は、縦方向の半隆起線が施されている。72は、刻み目文を附した「の」字状の渦巻文が施されている。73は口端部でくの字に屈曲しており、半隆起線が施されている。74は半隆起線で区画し、さらに半隆起線で施文している。75は口縁部が外へ屈曲している部分で、貼付け隆帯文の上下に半隆起線が施されている。隆帯文上は刻み目文が施されている。76は刻み目文を附した貼付け隆帯文をつなぐ輪状の隆帯文が貼りつけられている。貼付け隆帯文に沿って沈線が施されている。78~81は深鉢の口辺部である。78は幅の広い沈線を施し、隆起したところにクシ状工具により施文している。79は工字状の隆帯文上にはクシ状工具による施文をし、区画内には幅広の沈線を施している。80は幅広の沈線で工字状文を施し、隆帶上にはクシ状工具による施文がみられる。81は何重もの幅広の沈線で区画された内にクシ状工具による施文がなされている。隆起線上にもクシ状工具による施文がみられる。82は口縁端部に沈線と縄文が施されている。84は幅広の2条の沈線間に貝殻列点文が施されている。83・85は平行沈線文の間に列点文を加えている。

77・86~89は後期前葉の土器と考えられ、岩崎野式 (77)、気屋式 (86~89) に属するものと思われる。77は、葉脈文と思われる3条の沈線が施されている。86は小型の鉢類と思われ、口縁部外面に連続刺突文が施されている。87は内湾する口端部で、渦巻状と山形状の沈線文を施している。88は口縁部と一段下がった箇所に斜縄文を施している。89は3列の列点文が連続して施されている。

90~93は後期後葉の土器と考えられ、八日市新保式に属する。90は深鉢の口縁部で、口縁部外面にわずかに段を持っている。口縁部に3条の沈線、胴部上部に2条の沈線が見られる。91・92は口縁部でつまみ出して外反させており、2条の沈線が施されている。93は2条の沈線を切るように縦の列点文が施されている。

縄文土器の底部は数点のみ出土しており、94のみが底部に網代族が確認できた。

須恵器 (Fig.34~95~97) 古代に属するものは、須恵器の杯が数点確認されただけである。95は杯A (高台なし) で、体部がわずかに内湾しながら立ち上がり、器厚は均一で薄い。内外面ともにロクロ撫で調整である。96・97は、杯B (高台あり) である。体部は外傾し、高台は断面が

「ハ」の字状となっている。いずれも8～9世紀に帰属するものと思われる。

中世土師器 (Fig.34-98～110) 98は一段の横撫でが施され体部と底部の境に稜をなしている。器壁はやや厚めである。全体的に作りは雑で口縁がゆがんでおり、継ぎ目痕が残っている。99は一段の横撫でが施され、内底面は強い指押さえと撫でにより半底を作り出している。12世紀後半から13世紀前半に属するものと思われる。100は一段の横撫でで撫で幅が小さく、体部と底部の境は丸みを帯びている。98～100は体部がやや内湾している。101は2段撫でが施され、口縁部の強めの撫でにより外反している。底部にかけて丸みを帯びており、丸底状でやや深身のものであり、14世紀に属するものと思われる。102～104は体部が直線的に外傾しており、端部は丸みを帯びているものである。105は2段撫で調整で、体部上半の内面の強い撫でにより端部は若干内湾している。底部の器壁は薄く、平底である。12世紀後半から13世紀前半に属するものと思われる。106～110は一段の横撫で調整で、体部はつまみあげ強い撫でによりつくりだされたており、短いものであり、いわゆるコースター状を呈す。12世紀後半から13世紀前半に属するものと思われる。

珠洲 (Fig.34-114～120) 114～116は壺と考えられる。114は、口縁端部が略三角形を呈し、吉岡編年第IV期に属し、14世紀の年代を与えることができる。115は壺肩部の小片である。内面はクロ成形の撫でによりロクロ口が後をなしており、外面には櫛描波状文が施されている。116は壺の胴部と思われる。外面タタキは練杉状であり、内面には当て具痕が残っている。117は壺の口縁部であり、吉岡編年第IV期に相当すると考えられる。頸部より平行タタキが施されている。118～120は擂鉢である。118の体部は直線的に開き、口縁部は水平である。卸し口は不明である。119はわずかに膨らみを持って立ちあがっている。卸し口は約2.8cm幅で11条の溝で、間隔は比較的密である。120は、体部下半でやや膨らみを持って立ち上がり、器厚は均一に直線的に伸びている。卸し口は2.7cm幅に7条の太く浅めの溝があり、体部下半より施されている。4本の卸し口が底部中心部で交差するように引かれている。調整は、体部にはロクロ撫で、底部外面は静止系切痕が残る。

青磁 (Fig.34-111) 111の皿は、削り出し高台である。底部内外面に砂目の跡がみとめられる。13世紀後半のものと考えられる。

八尾 (Fig.34-113) 113の鉢は、直線的に外傾する体部でロクロ撫で調整である。

瀬戸 (Fig.34-112) 112は古瀬戸の瓶子胴部であり、外面には蕨文が施されている。13世紀後半に属するものと思われる。

(野原・中村)

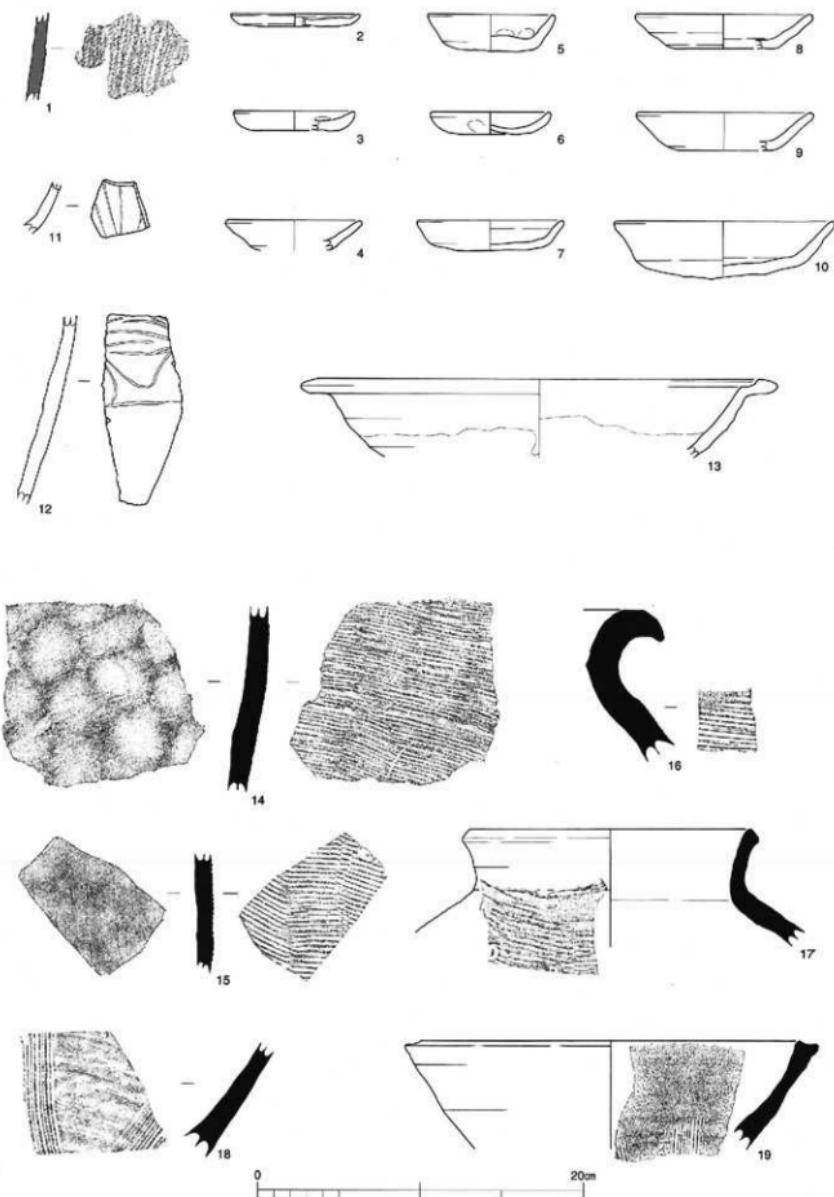


Fig.27 上層造構出土遺物実測図 (Scale=1/3)
 SK17…1、SD165…2・3・5・7・11・16・18、SD590…12・19、SK536…8、SK538…17、
 SK543…15、SK566…6、SK622…14、SK623…9、SK625…10、SP508…13、SP518…4

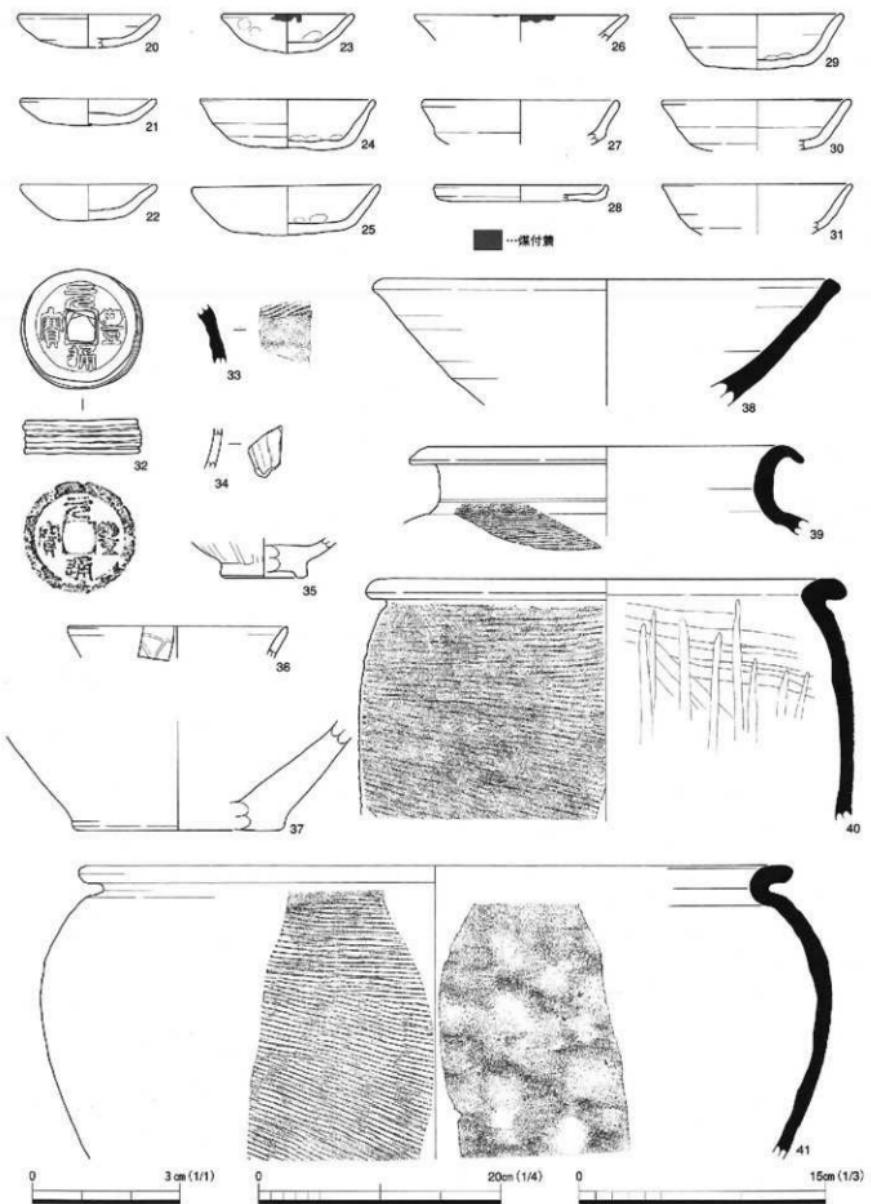


Fig.28 下層造構出土遺物実測図 (Scale=1/1…32 1/4…39, 40, 41 1/3…その他)
 SD90…33・41、SK166…35・38、SK167…24・31、SK169…30、SS171…28、SK360…20…22・40、SK377…27、
 SK378…29、SK479…39、SK756…37、SP128…36、SP277…25、SP490…32、SK753…34、SP768…26、SP782…23

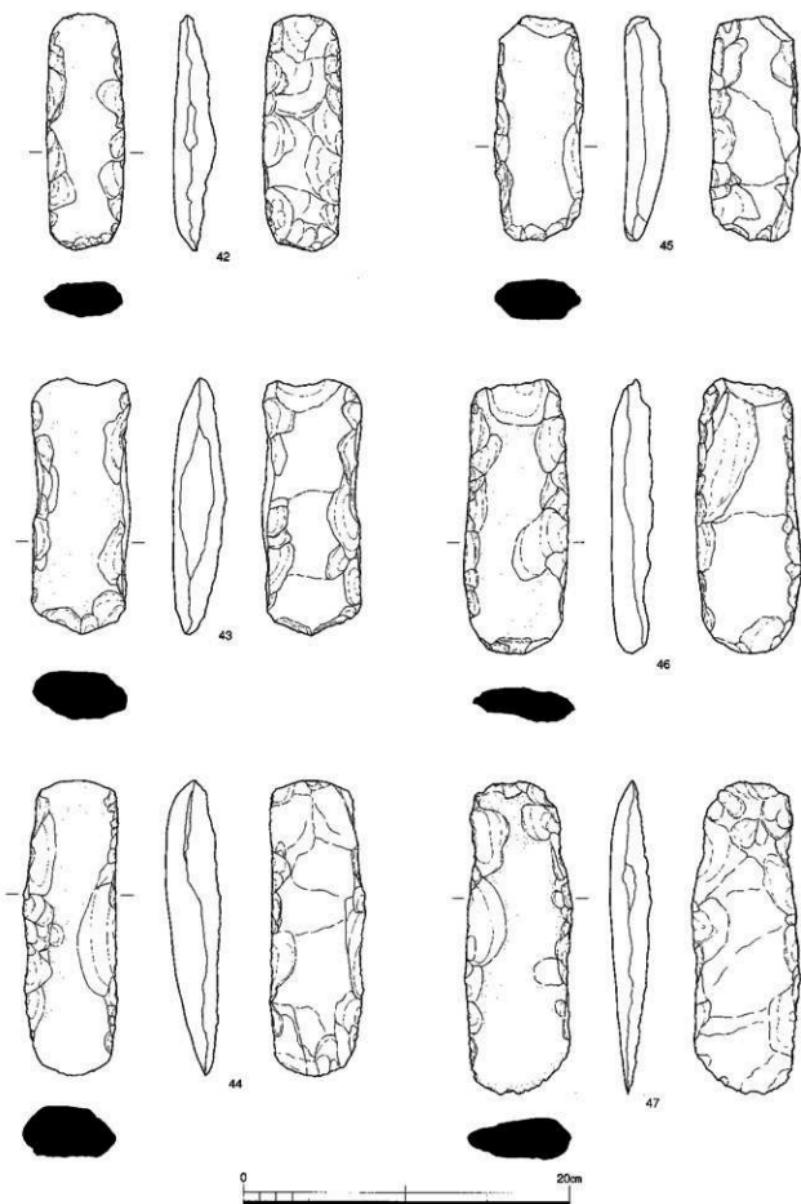


Fig.29 遺物包含層出土遺物実測図(1) 打製石斧(I類) (Scale=1/3)

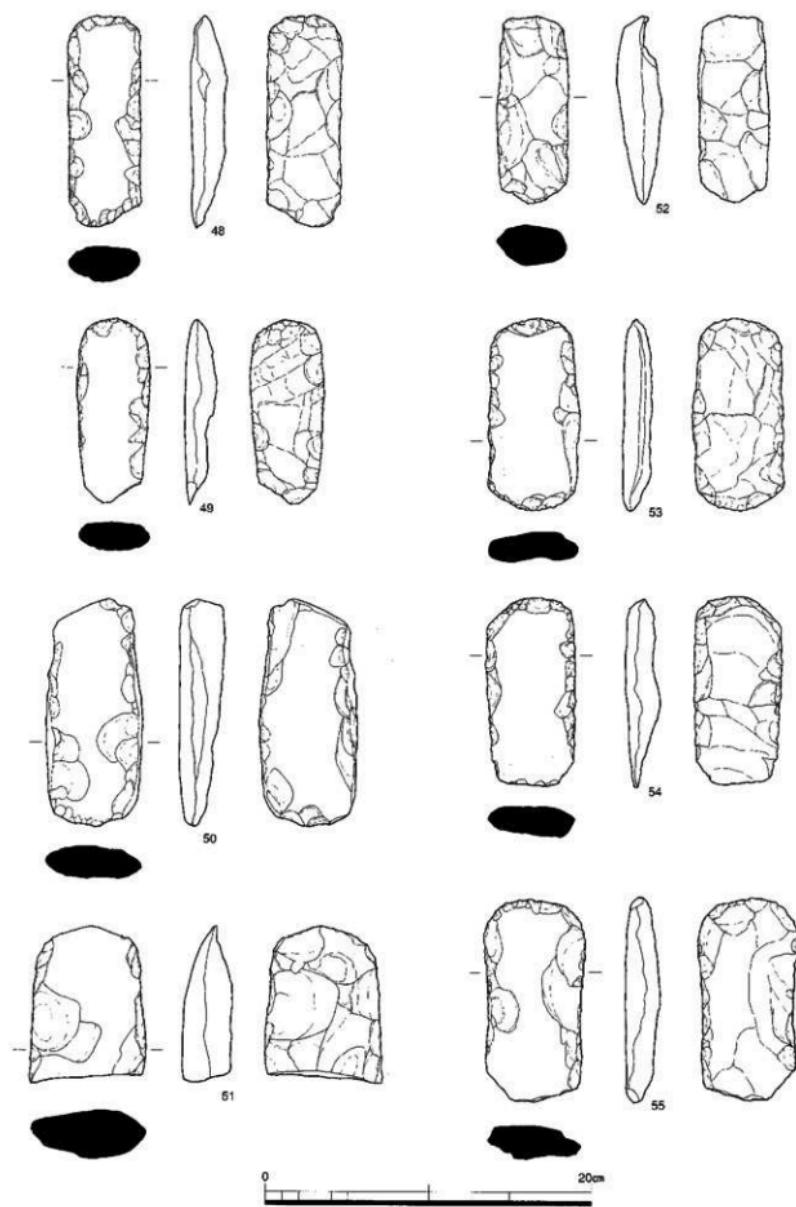


Fig.30 遺物包含層出土遺物実測図(2) 打製石斧(I類) (Scale=1/3)

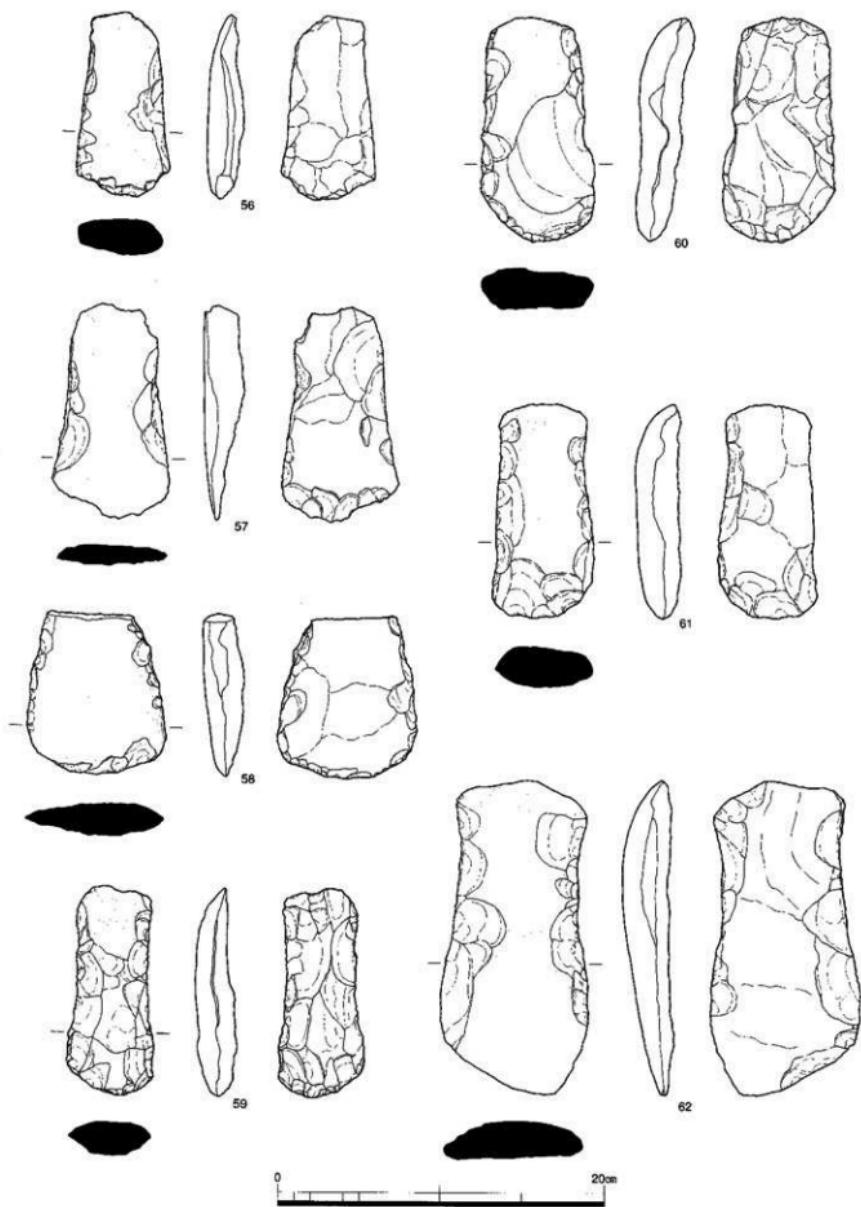


Fig.31 遺物包含層出土遺物実測図(3) 打製石斧(IIa類) (Scale=1/3)

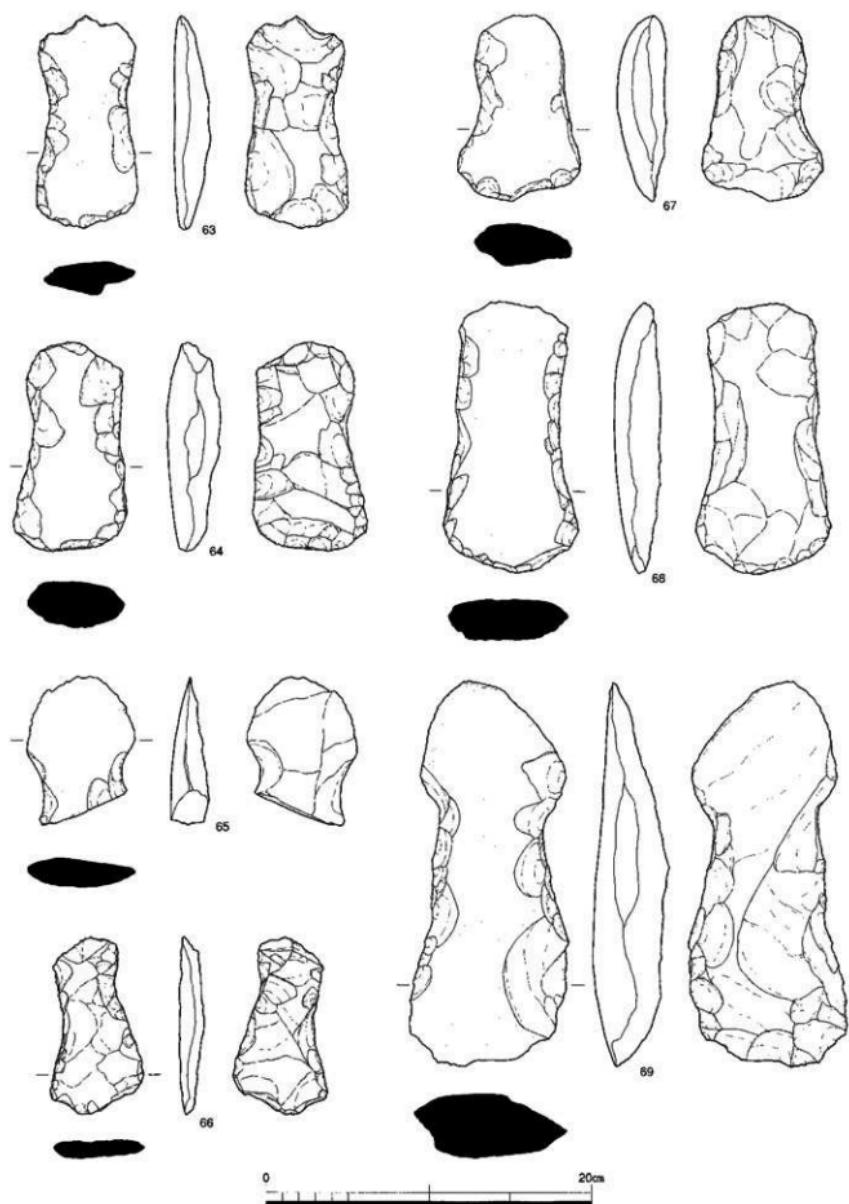


Fig.32 遺物包含層出土遺物実測図(4) 打製石斧(Ⅱb類) (Scale=1/3)

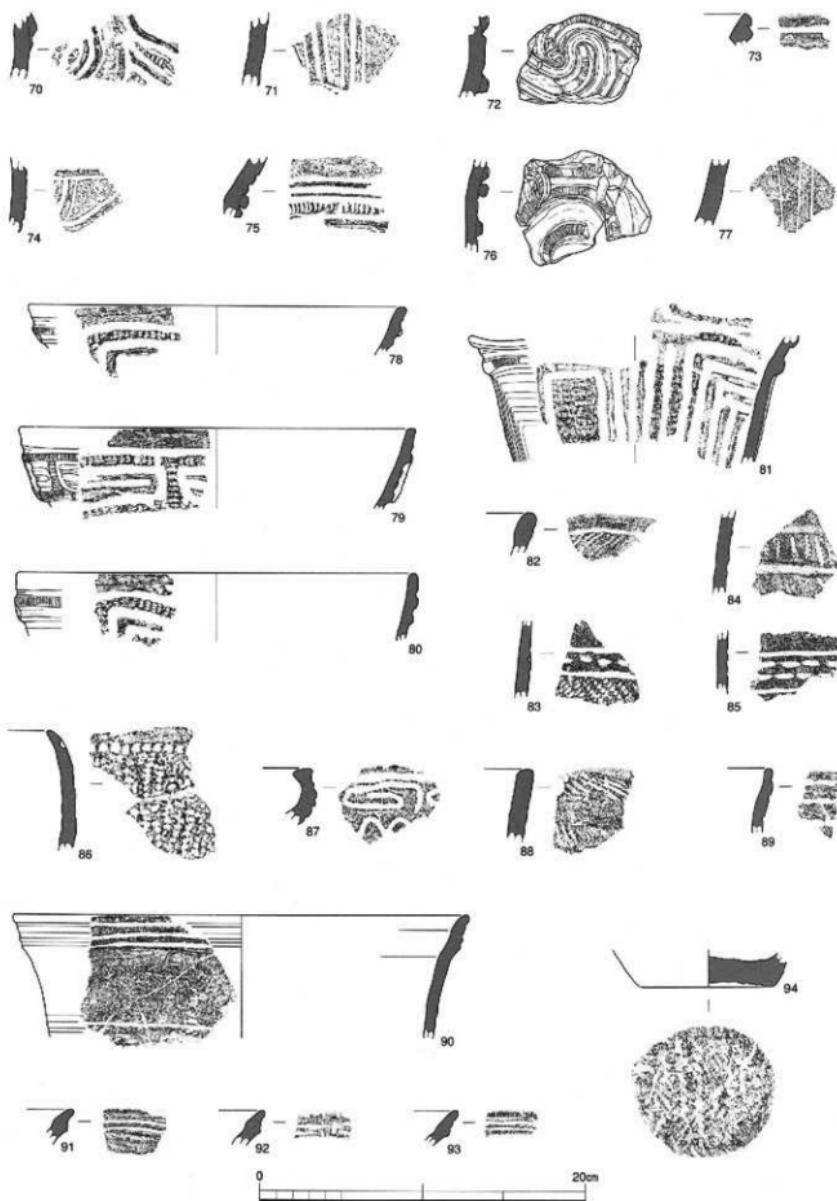


Fig.33 遺物包含層出土遺物実測図(5) 繩文土器 (Scale=1/3)

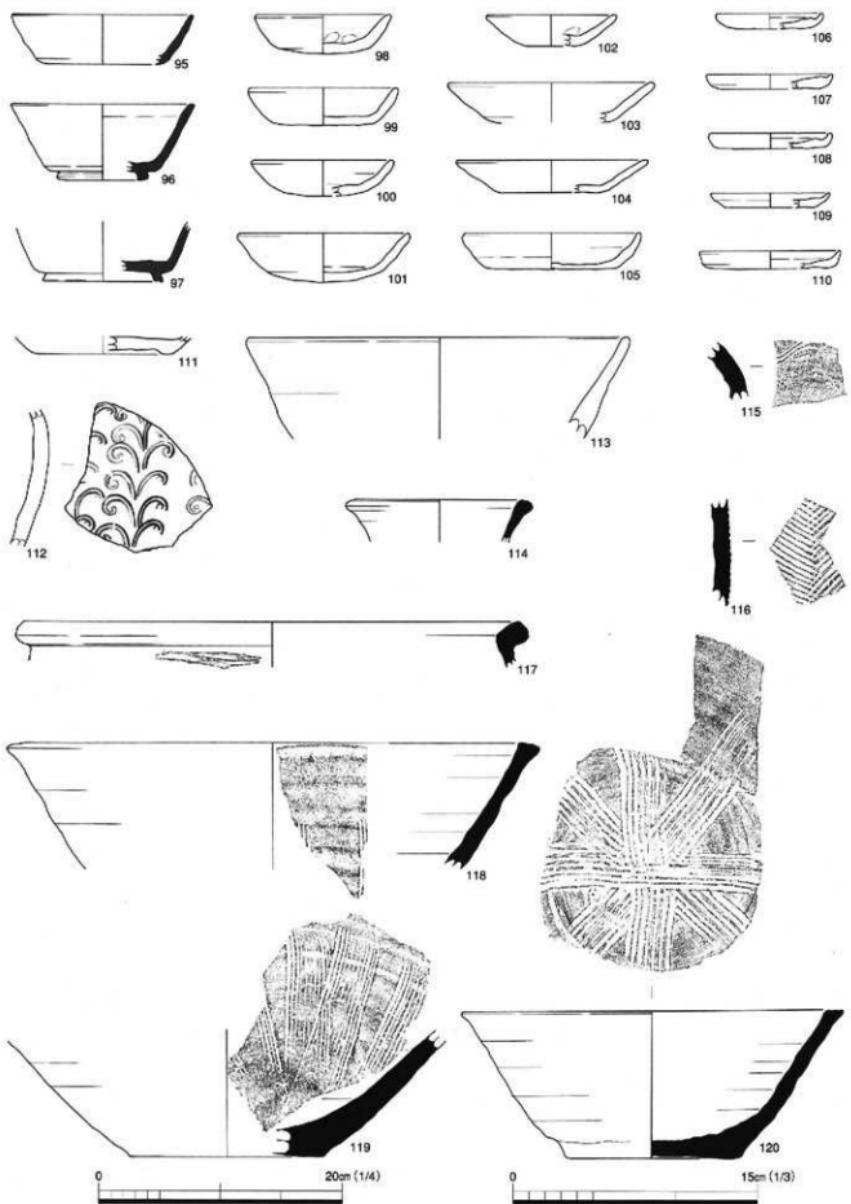


Fig.34 遺物包含層出土遺物実測図(6) 須恵器・中世土師器・株洲・瀬戸・八尾・青磁
(Scale=1/4…117 1/3…その他)

Tab.6 遺物觀察表（土器・陶磁器類）

図版番号	遺物番号	出土場所 出土層位	埋藏 形態	口径 (保存率)	底径 (保存率)	高さ (cm)	箇 整 ・ 基 文	胎土	色調	備考
Fig.27	1 SK17	繩文上部	—	—	—	—	外面一側に文	粘	10YR6/4 にぶい黄褐色	12世紀後半～13世紀前半
	2 SD165	土師器	7.9 (10%)	6.9 (10%)	0.8	調整不規	密	10YR6/3 にぶい黄褐色	12世紀後半～13世紀前半	
	3 SD165	土師器	7.3 (10%)	5.8 (10%)	1.2	外側一様ナデ	密	5YR6/2 棕色	12世紀後半～13世紀前半	
	4 SP518	土師器	8.0 (50%)	—	1.85	内面一様ナデ	密	10YR7/4 にぶい黄褐色	14世紀	
	5 SD165	土師器	7.6 (50%)	5.9 (50%)	2.2	内面一様ナデナフ	密	2.5Y7/2 灰黄色	14世紀	
	6 SK566	土師器	7.1 (35%)	4.9 (35%)	1.95	外側一様ナデ	密	10YR6/3 にぶい黄褐色	12世紀後半～13世紀前半	
	7 SD165	土師器	8.7 (60%)	7.2 (60%)	1.85	外側一様ナデ	密	7.5YR7/6 棕色	12世紀後半～13世紀前半	
	8 SK536	土師器	10.6 (20%)	5.4 (10%)	2.1	外側一様ナデ	密	10YR6/4 にぶい黄褐色	12世紀中葉～後半	
	9 SK623	土師器	10.5 (30%)	7.0 (20%)	2.3	内面一様ナデ	密	10YR5/3 にぶい黄褐色	14世紀	
	10 SK625	土師器	13.1 (80%)	9.1 (80%)	3.5	内面一様ナデナフ 外側一様ナフ	密	10YR6/5 二ぶい・黄褐色	14世紀	
	11 SD165	青磁 碗	—	—	—	—	薄密	5GY6/1 オリーブ灰色	粗糸窯系、13世紀	
	12 SD590	織部 碗	—	—	—	—	密	10YR5/2 灰黄色	褐胎、13世紀後半	
	13 SP508	古窓戸 折衷型	26.8 (10%)	—	—	内面一ロクロナデ・クロコ削り 外側一ロクロナデ・クロコ削り	密	7.5Y7/3 浅黄色	14世紀中葉	
	14 SK622	甌	—	—	—	内面一端て具足	密	10Y6/1 灰色	—	
	15 SK543	甌	—	—	—	外側一端	密	10Y5/1 灰色	継衫状タキ	
	16 SD165	甌	—	—	—	内面一端て具足	密	10Y6/1 灰色	—	
	17 SK538	甌	17.0 (20%)	—	—	外側一端	密	7.5Y6/1 灰色	14世紀	
	18 SD165	甌	—	—	—	内面一ロクロナデ	密	2.5Y7/1 灰白色	—	
	19 SD590	甌	13.0 (10%)	—	—	外側一ロクロナデ	密	10Y6/1 反色	御目～12条、14世紀	
Fig.28	20 SK360	土師器	8.4 (20%)	6.0 (20%)	2	内面一様ナデ	密	7.5YR7/6 棕色	15世紀	
	21 SK360	土師器	8.0 (25%)	5.1 (25%)	1.6	外側一様ナデ	密	10YR7/4 にぶい黄褐色	15世紀	
	22 SK360	土師器	8.1 (30%)	4.3 (30%)	2.2	内面一様ナデ	密	7.5YR6/4 にぶい黄褐色	15世紀	
	23 SP782	土師器	7.9 (100%)	3.1 (100%)	2.3	内面一様ナデ	密	10YR7/4 にぶい黄褐色	15世紀	
	24 SK167	土師器	10.4 (100%)	6.6 (100%)	3.1	内面一様ナデ	密	10YR7/4 にぶい黄褐色	14世紀	
	25 SP277	土師器	11.2 (65%)	7.0 (65%)	3.1	外側一様ナデ	密	7.5YR6/4 にぶい黄褐色	14世紀	
	26 SP768	土師器	12.8 (10%)	—	—	調整不規	密	10YR7/2 にぶい黄褐色	—	
	27 SK377	土師器	11.6 (10%)	—	—	内面一様ナデ	密	10YR6/4 浅黄色	12世紀後半～13世紀前半	
	28 SS171	土師器	10.3 (10%)	10.0 (10%)	—	外側一様ナデ・ナフ	密	10YR7/6 断黃褐色	12世紀後半～13世紀前半	
	29 SK378	土師器	10.4 (40%)	6.5 (40%)	3.4	内面一様ナデ・ナフ	密	5YR7/4 にぶい褐色	14世紀	
	30 SK169	土師器	11.3 (20%)	8.2 (20%)	3.1	内面一様ナデ	やや密	7.5YR6/4 にぶい黄褐色	14世紀	
	31 SK167	土師器	11.5 (10%)	—	—	外側一様ナデ・ナフ	密	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	14世紀	
	32 SP490	青磁 碗	—	—	—	—	—	—	「元慶過庭」(鉄造1978年)	
	33 SD90	青磁 碗	—	—	—	内面一ロクロナデ	密	10Y3/1 オリーブ灰色	12世紀～13世紀後半	
	34 SK753	青磁 碗	—	—	—	外側一ロクロナデ・椎骨接縫状文	密	5GY7/1 明オリーブ灰色	粗糸窯系、13世紀後半	
	35 SK166	青磁 碗	—	5.2 (40%)	—	内面一	薄密	10Y5/2 オリーブ灰色	粗糸窯系、13世紀後半	
	36 SP128	吉祇 碗	13.3 (5%)	—	—	外側一端非文	薄密	10Y6/2 オリーブ灰色	粗糸窯系	
	37 SK756	吉祇 碗	—	10.3	—	内面一端壁不規	薄密	7.5YR4/4 増色	12世紀後半	
	38 SK166	吉祇 碗	27.2 (10%)	—	—	外側一ロクロナデ	密	5Y6/1 灰色	—	
	39 SK479	吉祇 碗	31.2 (16%)	—	—	内面一端て具足	密	5Y6/1 灰色	—	
	40 SK360	吉祇 碗	35.0 (10%)	—	—	外側一端	密	7.5Y6/1 灰色	14世紀	
	41 SD90	吉祇 碗	55.0 (—)	—	—	内面一端方向のナデ	密	7.5Y6/1 灰色	13世紀前半	

図版 番号	測定 番号	出土地名 出土位置	特徴 種類	口径 (径年)	底径 (残存部)	高さ (cm)	調査・歴文	粘土	色調	備考
	70	X305Y605	陶文土器	-	-	-	外面一貼付縦唇・半隆起文	灰	10YR8/3 淡黄褐色	上山田式、中頃中葉
	71	5層(包含層)	陶文土器	-	-	-	外面一半陸起文	やや密	10YR8/3 淡黄褐色	上山田式、中頃中葉
	72	X305Y605	陶文土器	-	-	-	外面一貼付縦唇文上にヘラ削込み・半隆起文	灰	10YR8/4 淡黄褐色	上山田式、中頃中葉
	73	5層(包含層)	陶文土器	-	-	-	外面一半陸起文	灰	7.5YR5/2 灰褐色	上山田式、中頃中葉
	74	X305Y605	陶文土器	-	-	-	外面一貼付縦唇文上にヘラ削込み・半隆起文	灰	10YR8/3 淡黄褐色	天神山式、中頃中葉
	75	5層(包含層)	陶文土器	-	-	-	外面一貼付縦唇文上にヘラ削込み・半隆起文	灰	2.5Y8/2 淡黄色	天神山式、中頃中葉
	76	X305Y605	陶文土器	-	-	-	外面一貼付縦唇文上にヘラ削込み・半隆起文	灰	10YR6/3 にぶい黄褐色	天神山式、中頃中葉
	77	5層(包含層)	陶文土器	-	-	-	外面一半陸起文	灰	5YR6/6 橙色	岩峰野式、後期前葉
Fig.33	78	X305Y555	陶文土器	22.8	-	-	外面一半陸起文	灰	10YR7/4 にぶい黄褐色	牟田新I式、中期後葉
	79	5層(包含層)	陶文土器	23.8	-	-	外面一半陸起文	灰	2.5Y7/4 淡黄色	牟田新I式、中期後葉
	80	X305Y540	陶文土器	24.0	-	-	外面一半陸起文	灰	5Y5/1 灰色	牟田新I式、中期後葉
	81	5層(包含層)	陶文土器	(10%)	-	-	外面一沈線・油焼跡安紋	灰	10YR7/4 にぶい黄褐色	牟田新I式、中期後葉
	82	X305Y555	陶文土器	-	-	-	内面一面ナーフ	灰	10YR5/2 灰黃褐色	牟田新I式、中頃後葉
	83	X345Y525	陶文土器	-	-	-	外面一沈線・糸系文	灰	10YR5/1 暗灰色	牟田新II式、中頃後葉
	84	5層(包含層)	陶文土器	-	-	-	外面一沈線・直線切点文	灰	2.5Y5/1 黄灰色	牟田新II式、中頃後葉
	85	X305Y575	陶文土器	-	-	-	外面一二条の沈線間に2列の点捺	灰	5YR6/6 橙色	牟田新II式、中頃後葉
	86	5層(包含層)	陶文土器	-	-	-	外面一連續刻突紋 横文	やや密	2.5YR5/3 にぶい黄褐色	氣壓式、後期前葉
	87	X345Y520	陶文土器	-	-	-	外面一溝状渦・山形状沈線	灰	2.5YR6/6 橙色	氣壓式、後期前葉
	88	5層(包含層)	陶文土器	-	-	-	外面一斜横文	灰	10YR7/4 にぶい黄褐色	氣壓式、後期前葉
	89	X340Y515	陶文土器	-	-	-	外面一列点文	やや密	7.5YR5/2 灰褐色	氣壓式、後期前葉
	90	5層(包含層)	深井	27.0	(10%)	-	外面一口彫型に三重の沈線	灰	10YR7/3 にぶい黄褐色	八日市新保式、後期後葉
	91	X315Y550	陶文土器	-	-	-	外面一口彫型に二重の沈線	灰	10YR6/4 にぶい黄褐色	八日市新保式、後期後葉
	92	X335Y555	陶文土器	-	-	-	外面一二条の沈線と斜尖突紋	灰	2.5Y7/4 淡黄色	八日市新保式、後期後葉
	93	5層(包含層)	胎鉢	-	-	-	外面一三条の沈線	灰	10YR7/4 にぶい黄褐色	八日市新保式、後期後葉
	94	X335Y540	陶文土器	-	-	-	底面一網代痕	灰	2.5Y7/4 淡黄色	八日市新保式、後期後葉
	95	X295Y610	陶器	10.8	-	3.0	外面一クロコクナマテ	灰	5Y8/1 灰色	
	96	5層(包含層)	杯A	(10%)	-	-	内面一クロコクナマテ	灰	5Y4/1 灰色	
	97	X305Y625	陶器	11.0	5.6	4.7	内面一クロコクナマテ	灰	2.5Y7/2 灰褐色	
	98	5層(包含層)	杯B	(30%)	-	-	外面一クロコクナマテ	灰	7.5YR5/3 にぶい黄褐色	
	99	X310Y630	土師器	8.0	-	3.7	内面一クロコクナマテ	灰	10YR8/4 淡黄褐色	12世紀後半～13世紀前半
	100	5層(包含層)	土師器	(50%)	(40%)	2.4	内面一僅ナマテ	灰	10YR7/4 にぶい黄褐色	
	101	X320Y620	土師器	8.7	5.6	2.3	外面一僅ナマテ・ナマテ	灰	10YR7/4 にぶい黄褐色	
	102	5層(包含層)	土師器	(40%)	(40%)	2.2	外面一僅ナマテ	灰	7.5YR7/5 橙色	14世紀
	103	X285Y630	土師器	8.4	5.0	2.2	外面一僅ナマテ	灰	7.5YR7/6 橙色	
	104	5層(包含層)	土師器	(30%)	(30%)	3.0	内面一僅ナマテ	灰	2.5Y5/2 淡灰褐色	
	105	X305Y625	土師器	10.2	6.6	3.0	内面一僅ナマテ	灰	7.5YR7/6 橙色	
	106	5層(包含層)	土師器	(30%)	(30%)	1.9	内面一僅ナマテ	灰	2.5Y7/6 橙色	
	107	X285Y630	土師器	7.8	4.3	-	外面一僅ナマテ	やや密	2.5Y5/2 淡灰褐色	
	108	5層(包含層)	土師器	(10%)	(10%)	-	内面一僅ナマテ	灰	7.5YR7/6 橙色	
	109	X310Y630	土師器	12.3	-	-	内面一僅ナマテ	灰	10YR7/4 にぶい黄褐色	
	110	5層(包含層)	土師器	11.6	2.0	5.9	内面一僅ナマテ	灰	7.5YR7/6 橙色	
	111	X305Y625	土師器	(25%)	(25%)	2.25	内面一僅ナマテ(底ナマテ)	灰	10YR7/4 にぶい黄褐色	
	112	5層(包含層)	土師器	10.6	7.8	0.95	内面一僅ナマテ(底ナマテ)	灰	10YR7/6 明黄褐色	12世紀後半～13世紀前半
	113	X310Y630	土師器	(50%)	(50%)	0.95	内面一僅ナマテ(底ナマテ)	灰	10YR7/4 にぶい黄褐色	12世紀後半～14世紀前半
	114	5層(包含層)	土師器	6.4	5.8	0.9	内面一僅ナマテ	灰	10YR8/4 淡黄褐色	12世紀後半～15世紀前半
	115	X310Y630	土師器	(10%)	(10%)	0.9	内面一僅ナマテ	灰	7.5YR7/4 淡黄褐色	12世紀後半～16世紀前半
	116	5層(包含層)	土師器	7.7	7.3	0.9	内面一僅ナマテ	灰	2.5YR7/3 淡青灰色	12世紀後半～17世紀前半
	117	X310Y630	土師器	(20%)	(20%)	0.9	内面一僅ナマテ	灰	5GY7/1 明オリーブ灰色	13世紀後半
	118	5層(包含層)	土師器	7.4	6.6	0.95	内面一僅ナマテ	灰		
	119	X300Y640	土師器	(20%)	(20%)	0.9	内面一僅ナマテ	灰		
	120	5層(包含層)	土師器	7.1	5.5	0.9	内面一僅ナマテ	灰		
	121	X300Y640	土師器	(10%)	(10%)	0.9	内面一僅ナマテ	灰		
	122	5層(包含層)	土師器	8.5	8.2	1.1	内面一僅ナマテ	灰		
	123	X310Y630	土師器	(20%)	(20%)	1.1	内面一僅ナマテ(底ナマテ)	灰		
	124	5層(包含層)	青磁	-	-	1.1	内面一輪葉輪付青	灰		
	125	X310Y630	5層(包含層)	-	-	1.1	内面一ヶズ	灰		

団番号	遺物番号	出土地点 出土層位	種類 (現存率)	口径 (現存率)	底径 (現存率)	器高 (cm)	調査・施文	胎土	色調	備考
Fig.34	112	X209Y630 5層(包含層)	古墳戸 軋子	—	—	—		密		草花文、13世紀後半
	113	青銅 鏡	八幡 仙跡	22.7 (10%)	—	6.15	外側一ロクロナデ・ナデ 内側一ロクロナデ	密	7.5YR6/3 に少い黒色	
	114	X205Y633 5層(包含層)	馬頭	10.2 (20%)	—	—	外側一ロクロナデ 内側一ロクロナデ	密	N6/0 灰色	14世紀
	115	X305Y620 5層(包含層)	海螺	—	—	—	外側一薄波状波紋・ロクロナデ 内側一ロクロナデ	密	2.5GY6/1 オリーブ灰色	
	116	X320Y570 5層(包含層)	海螺	—	—	—		密	7.5Y6/1 灰色	
	117	X31Y570 5層(包含層)	玉網	40.2 (9%)	—	—	外側一ロクロナデ・ナデ 内側一ロクロナデ	密	N5/0 灰色	14世紀
	118	X31Y560 5層(包含層)	海螺	30.2 (10%)	—	7.7	外側一ロクロナデ(御目) 内側一ロクロナデ	密	N6/0 灰色	
	119	X31Y560 5層(包含層)	海螺	— (20%)	—	—	外側一ロクロナデ	密	5GYS/1 オリーブ灰色	
	120	X31Y565 5層(包含層)	海螺	21.2 (30%)	10.8 (30%)	9.05	外側一ロクロナデ(御目) 内側一ロクロナデ(御目)	密	5B6/1 青灰色	

Tab.7 遺物観察表(打製石斧)

団番号	遺物番号	地点	層位	種類	状態	計測値(cm)				重量(g)	石質	備考
						a	b	c	d			
Fig.29	42	X305Y590	5層(包含層)	I	100%	4.2	14.5	4.9	4.5	206	ひん岩	粗粒形、刃部斜削出し、平刃、刃部磨耗、全体的に磨耗
	43	X340Y545	5層(包含層)	I	100%	4.6	15.4	5.9	5.5	402	安山岩	粗粒形、刃部斜削出し、平刃
	44	X310Y600	3層(包含層)	I	100%	5.0	18.05	5.7	5.0	437	砂岩	粗粒形、全休出の可能性少 片刃、全休出、扁平円錐分割
	45	X325Y545	5層(包含層)	I	100%	4.8	13.7	5.3	4.8	253	安山岩	粗粒形、角閃石
	46	X315Y540	5層(包含層)	I	100%	5.6	16.5	6.2	5.4	329	安山岩	粗粒形、刃部斜削出し、平刃、扁 平円錐分割
	47	X310Y585	5層(包含層)	I	90%以上	6.0	19.15	6.3	5.1	342	ひん岩	粗粒形、刃部斜削出し、平刃、扁 平円錐分割
	48	X335Y520	5層(包含層)	I	90%以上	4.4	13.0	4.4	4.3	169	清結凝灰岩	粗粒形、刃部斜削出し、平刃、刃 刃部磨耗、全体的に磨耗
Fig.30	49	X300Y595	5層(包含層)	I	100%	3.4	11.3	4.4	3.7	115	安山岩	粗粒形、刃部斜削出し、平刃、全 体的に磨耗
	50	X335Y555	5層(包含層)	I	100%	5.5	13.6	5.9	4.9	313	輝緑岩	粗粒形、刃部斜削出し、全休出 全体が磨耗
	51	X320Y570	5層(包含層)	I	50~60%	—	(9.6)	7.0	6.3	291	安山岩	粗粒形、刃部斜削出し、片刃、全 休出
	52	X340Y515	5層(包含層)	I	100%	4.1	11.4	4.2	3.6	156	安山岩	粗粒形、刃部斜削出し、片刃
	53	X335Y555	5層(包含層)	I	90%	5.2	11.8	5.5	4.9	172	砂岩	粗粒形、刃部斜削出し、開始使用? 刃部磨耗
Fig.31	54	X330Y520	5層(包含層)	I	90%	4.9	11.5	5.4	5.0	150	砂岩	粗粒形、刃部斜削出し、開始使用? 刃部磨耗
	55	X310Y580	5層(包含層)	I	100%	5.6	12.4	6.1	5.45	193	玄武岩	粗粒形、刃部斜削出し、片刃
	56	X235Y555	5層(包含層)	IIa	90%	5.6	11.3	4.2	—	180	砂岩	粗粒形、刃部斜削出し、片刃、分 割
	57	X330Y545	5層(包含層)	IIa	100%	7.0	13	5.3	—	191	安山岩	粗粒形、刃部斜削出し、片刃
	58	X300Y620	5層(包含層)	IIa	70%?	8.4	—	5.3	—	233	砂岩	粗粒形、刃部斜削出し、基部が欠損の為、明確でない 刃部磨耗
Fig.32	59	X320Y575	5層(包含層)	IIa	90%以上	5.2	12.5	4.4	—	167	砂岩	粗粒形、刃部斜削出し、内曲、刃部斜削出し、片 平刃、刃部磨耗
	60	X315Y570	5層(包含層)	IIa	100%	6.8	13.8	5.4	—	345	砂岩	粗粒形、刃部斜削出し、内曲、刃部斜削出し、片 平刃、刃部磨耗
	61	X305Y580	5層(包含層)	IIa	100%	5.9	13.1	5.2	—	295	砂岩	粗粒形、刃部斜削出し、内曲、刃部斜削出し、片 平刃、刃部磨耗
	62	X320Y520	5層(包含層)	IIa	90%	8.9	19	7.9	—	585	砂岩	粗粒形、刃部斜削出し、内曲、刃部斜削出し、片 平刃、刃部磨耗
	63	X340Y515	5層(包含層)	IIb	100%	6.1	13.1	5.8	4.6	195	安山岩	粗粒形、刃部斜削出し、片刃
Fig.32	64	X315Y580	5層(包含層)	IIb	95%	6.9	12.7	5.8	5.2	332	(変行) 安山岩	粗粒形(内曲削)、刃部斜削 (内曲・片刃)、刃部斜削調整 分岐
	65	X295Y610	5層(包含層)	IIb	30~40%	—	(9.1)	6.6	5.0	122	ひん岩	粗粒形の刃部斜削、握形と推 測される。刃部斜削分割
	66	X320Y570	5層(包含層)	IIb	80%	5.7	10.9	3.9	3.6	94	砂岩	刃部基礎底板 粗粒形、刃部斜削
	67	X330Y535	5層(包含層)	IIb	100%	7.35	11.4	5.5	5.0	275	輝緑岩	粗粒形、刃部斜削
	68	X310Y580	5層(包含層)	IIb	90%以上	8.2	16.5	6.6	6.1	414	ひん岩	粗粒形、刃部斜削、刃部斜削 片刃・内曲、刃部斜削分割
	69	X300Y520	5層(包含層)	IIb	90%以上	8.9	23.7	8.85	6.35	994	ひん岩	粗粒形(内曲)、刃部斜削、刃部斜削 片刃・内曲、刃部斜削分割

第5節 プラント・オパール分析

外山 秀一

(1) はじめに

砺波平野の庄川扇状地には、自然堤防状や中州状の微高地と埋没した微高地が島状に分布し、そこに集落が立地して散村を形成している。こうした微高地の間には旧河道が帶状に連続して発達し、また微高地の周辺には後背低地が広がり、畠地や水田として利用されている。

微高地とそこから旧河道や後背低地にかけての緩傾斜地には、いわゆる黒ボクとよばれる黒土層の堆積がみられる。1994年と95年に砺波市内の20ヶ所において地形調査が、そのうちの11地点でプラント・オパール分析が実施されて黒土層の特性と生成要因が明らかになった(外山1997)。

扇状地の表層地質は、旧庄川の度重なる氾濫の影響を受けて細かく変化している。土地条件は安定と不安定、高燥と低湿の繰り返しを経てきたと考えられ、またそうしたなかで土地利用のあり方も変化してきたとみられる。

2003年度に砺波市東部の庄川流域に位置する久泉地区において、道路建設にともなう発掘調査が実施された。調査区では、地形環境の変化と土地条件や土地利用とのかかわりを明らかにするために、3地点において試料を採取し、プラント・オパール分析をおこなった。ここでは、地層の堆積状況やプラント・オパール分析の結果に基づき、土地条件の変化や土地利用のあり方について検討する。

(2) 地層の堆積状況と試料の採取

A地点では地表面下約100cmまでの地層が1a～8aの8層に、B地点では約60cmまでの地層が1a～5b層の6層に、C地点では約150cmまでの地層が1a～12b層の13層に、それぞれ区分される。なお、b層は洪水等によって堆積した非土壤層、a層はb層がその後土壤化した地層である。

各地点の地層の堆積状況には共通点がみられる。A地点では、下位の暗茶灰色のシルト質細砂(8a層)、中位の黒色の砂質シルト層(黒ボク層-6a・7a層)、上位の暗茶灰色や暗褐色の砂質シルト層(1a～5a層)で構成され、黒ボク層は約50cmの厚さで堆積する。B地点では、下位の暗茶灰色の細砂(5b層)、中位の黒茶灰色の砂質シルト層(黒ボク層-4a層)、上位の暗褐色のシルト質細砂層(1a～3a層)からなる。C地点では、最下位の茶灰色の細砂層(12b層)、下位の黒茶灰色のシルト質細砂層(11a・11b層)、中位の黒色の砂質シルト層(黒ボク層-9a・10a層)、上位の暗褐色や暗茶灰色の砂質シルト層(5a～8a層)と暗褐色のシルト質細砂層(1a～4a層)に分かれる。なお、9a層と10a層の黒ボクの影響が下層の10b・11a層にも及んでおり、黒茶灰色を呈している。

プラント・オパール分析用として、A地点で14試料、B地点で8試料、C地点で17試料の計39試料を採取した。

(3) 分析の方法

定量分析法による試料の処理は、絶対乾燥-重量測定・仮比重測定-ガラス・ビーズの混入-ホモジナイザーによる分散-ストークス法による細粒物質の除去-乾燥の順序でおこない、オイキッ

1 古環境研究会代表、燕京大学文学部

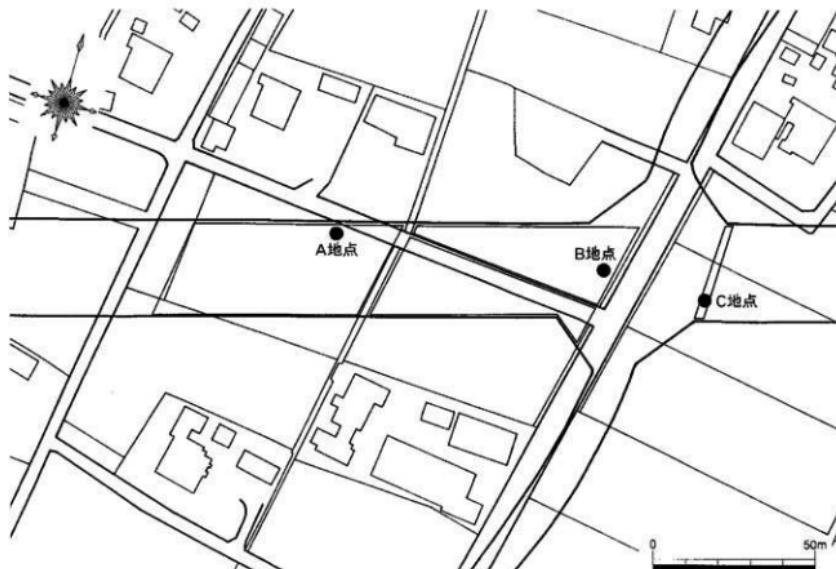


Fig.35 プラント・オパール試料採取位置

ト液によりプレバートを作成した。プラント・オパールの分類学的検討は、400枚の偏光顕微鏡下で、主にイネ科の機動細胞プラント・オパールの形態分類に基づいておこなった。

そして、検出されたガラス・ビーズ（300個）とプラント・オパールとの比率から、試料1gあたりの各プラント・オパールの個数ならびに総数を求めた。さらに、イネ、ヨシ属、ウシクサ族ならびにタケ亞科の機動細胞プラント・オパールについては、地上部全ての重さ（乾物重）を層厚1cm・面積10aあたりの検出量で示した。

なお、火山の噴火によって降灰した火山ガラスを、そこで生成されたプラント・オパールと直接比較することはできないが、地層中の火山ガラスの含有状況ならびに出現傾向を検討するために、ここではプラント・オパールと同一基準で示した。また、動物珪酸体についても同様である。

(4) 結 果

地層の堆積状況やプラント・オパールの層位的な出現傾向に基づき、プラント・オパール群集帯は、A地点とB地点でa～c带、C地点でa～d带に区分され、さらにd带では層相やイネその他の検出状況からd1带とd2带に細分される。なお、各地点ともに、下位の細砂層や上位のシルト質細砂層では仮比重は高いが、中位の黒ボク層では1.0前後と低くなる。

A地点のa带では、クマザサ属型がわずかにみられる程度で検出総数は少ない。b带になると、ウシクサ族が増加するとともに検出総数が上部になるにしたがい増加傾向を示す。c带ではイネの

機動細胞プラント・オパール（以下イネ）が各層準で検出される（図A地点）。

B地点のa帯では、検出数はきわめて少ない。b帯になると、ウシクサ族とクマザサ属型がわずかにみられる。c帯では、試料3でイネが検出され、試料1ではイネとともにイネモミもみられ、検出総数も増加する（図B地点）。

C地点のa帯では、B地点と同様に検出されるプラント・オパールは限られる。b帯になるとクマザサ属型がわずかにみられ、c帯ではそれに代わってウシクサ族が増える。d1帯の試料11でイネが検出され、d2帯になると各層の上部でイネが増加する。とりわけ試料6ではイネの高出現に特徴づけられる。また、試料1～8ではイネモミがわずかながら検出される（図C地点）。

地層の堆積状況やプラント・オパール分析の結果から、3地点の対応関係は以下のようになる。B地点のa帯はC地点のa帯に、またA地点のa帯はC地点のb帯に、A地点のb帯はB地点のb帯とC地点のc帯に、それぞれ対応する。なお、B地点のb帯では、下位のクマザサ属型の検出層とウシクサ族の増加する黒ボク層が同一層準になっている。そして、イネの検出される上位層準になると、A地点とB地点のc帯はC地点のd帯に相当する。

（5）考察

地層の堆積状況は、大きく4つに区分される。最下位の茶灰色や暗茶灰色の細砂層と下位の暗茶灰色や黒茶灰色のシルト質細砂層、中位の黒色の砂質シルト層（黒ボク層）、上位の暗褐灰色や暗茶灰色を主としたシルト質砂層と砂質シルト層である。

3地点のプラント・オパール分析の結果もこうした地層の堆積状況にはほぼ対応しており、最下位の茶灰色や暗茶灰色の細砂層では検出数と量はきわめて少なく、下位の暗茶灰色や黒茶灰色のシルト質細砂層ではクマザサ属型をはじめとしてタケア科がわずかに検出されるにすぎない。

このクマザサ属型の機動細胞プラント・オパールは、日本海沿岸地域において特徴的にみられる傾向である。それは砺波平野の各地においても検出され（外山1997）、青森の三内丸山遺跡では、縄文時代中期の層準を中心にクマザサ属型をはじめとするタケ類の高出現に特徴づけられる（外山1995）。また、新潟の縄文時代晩期から弥生時代中期の土器を対象とした胎土分析の結果では、クマザサ属型のプラント・オパールが高出現する。これに対して、山梨の同時期の土器胎土分析ではネザサ節型が数多く検出され、両地域間のササ類に植生環境の違いがみられる。

このクマザサ属型のプラント・オパールがクマザサ属であるとすると、チシマザサ節（ネマガリダケ節）、チマキザサ節・スズタケ節・ミヤコザサ節・ハコネズミ節ということになる。このうち、スズタケ節とミヤコザサ節・ハコネズミ節は太平洋側の暖地に生育する。また、チシマザサ節とチマキザサは日本海沿岸地域から北日本を分布範囲としている（室井1960・杉本1960）。以上のことから、三内丸山遺跡の地層や新潟の土器胎土中から検出されたクマザサ属型は、チシマザサ節あるいはチマキザサに由来する可能性が高い（外山・中山2001）。当調査区の3地点から検出されたクマザサ属型のプラント・オパールも同様である。

次に、各地点の土地利用の状況をみると、いずれも上位層準においてイネの高出現に特徴づけられる。イネの他には目立ったプラント・オパールの検出はみられず、いずれも水田土壤となっており、また地形環境から判断しても水田での稲の栽培であったと考えられる。A地点では1a～5a層、B地点では1a層、C地点では1a～4a層と6a層の各層準において稲作が営まれており、

したがって各層の上面から水田址の検出される可能性が高い。

さらに、地層の堆積状況とプラント・オパールの出現傾向から、地形条件の変化と土地利用のあり方をみてみたい。まずB地点とC地点では、洪水によりそれぞれ5層と12層が堆積して、一時的に不安定な土地条件となる。その後、A地点では8層、B地点では4層、C地点では11層の堆積をみる。そこでは、クマザサ属型のプラント・オパールがわずかに検出され、当時の地表面や周辺地域はササ類の生育する笠原の状況であったようである。

こうした地表面を覆って、A地点では7層と6層、C地点では10層と9層が堆積し、微高地が形成される。そして、安定して高燥な土地条件のもとにススキやチガヤに代表されるウシクサ類の草原が広がり、それらの腐殖土層である黒ボク層が生成される。なお、B地点では同一地表面が笠原からウシクサ類の草原に代わったものとみられる。

さらにその後、地形環境は大きく変化する。旧庄川の洪水の影響を直接受けることが少くなり、地表面は相対的に低くなつて土地条件は安定し、シルト質細砂層や砂質シルト層が薄く堆積する後背低地に変わる。そして、その後長期にわたり後背低地の状況が続く。こうしたやや低湿な土地条件を利用して、稲の栽培が始まる。3地点では各層準においてイネが検出されており、小規模な土砂の堆積を受けた後、安定した土地条件となるたびに稲作は継続され、本格的に水田化されていった。

ところで、砺波市内では1991年と95年に11地点において、プラント・オパール分析が実施された。そして、各地に分布する黒土層の特性が明らかにされている。それによると、黒土層は大きく次の3つに区分される。

まず、(1)いわゆる黒ボク層とよばれるもので、自然堤防や中州状の微高地からその縁辺部にかけて分布する。次に、(2)低湿地や湿地で生成される有機質層で埋没した旧河底道でみられ、ヨシ属の高出現に代表される。さらに、(3)埋没した微高地からその縁辺部で生成された黒土層で、これはaとbとに細分される。aは(1)の生成後に島地土壤化したもので、ウシクサ族とイネが多數検出される。また、bは(2)の生成後に水田土壤化したもので、ヨシ属とイネに代表され、旧河底道が水田として利用されている。

このうち、庄川流域で特徴的にみられるのは(1)と(3)aである。すなわち、微高地からその縁辺部に分布する黒ボクと埋没した微高地からその縁辺部に分布する黒ボクが土壤化したものである。前者では、ススキやチガヤに代表されるウシクサ族が多く、同層の生成時はいわゆる「野一すすき野」の状況で高燥な土地条件であったと推定される。そしてその後、後者にみられるように稲が栽培されている。これは、微高地ならびにその周辺部に生成された黒ボクをベースに耕地として開発されていったことを示している(外山1997)。

調査区内の3地点においては、(1)の黒ボク層の状況がみられる。砺波市域の八咫鏡神社遺跡や高道向島遺跡では、同層準からイネとともにキビ族型のプラント・オパールも検出されており、畠地において稲や雑穀類が栽培されていた可能性が高い(外山1999)。また千代・安川・東保・小杉・秋元・久泉・三郎丸などの地区においては、微高地からその縁辺部の黒ボクを利用した高燥地での稲作が考えられ、畠稲作が営まれていたとみられる(外山1997)。これに対して、調査区内での黒ボク層の利用はみられず、その後に堆積したシルト質細砂層や砂質シルト層が水田として開発されており、黒ボク層生成後の土地利用のあり方に地域的な違いがみられる。

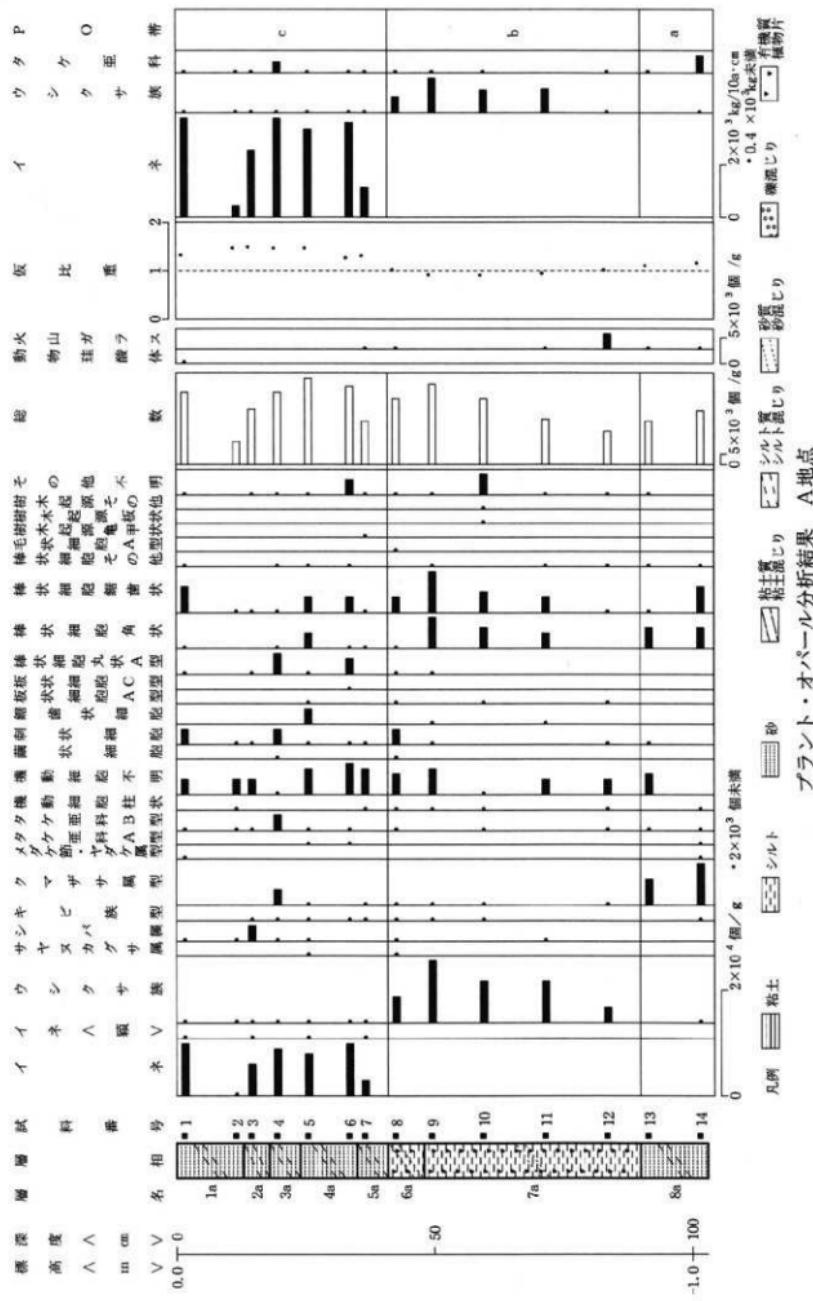
(6) おわりに

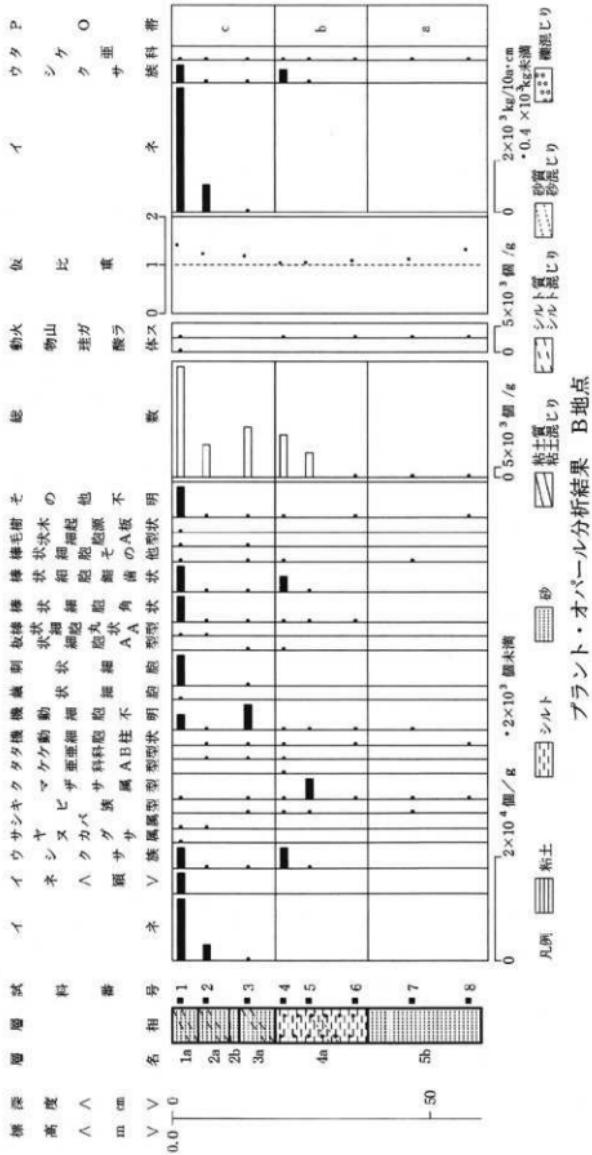
調査区では、地層の堆積状況とプラント・オパールの分析結果から、地形環境の変化とともに土地条件の変化や土地利用のあり方を検討した。茶灰色や暗茶灰色の洪水層堆積後に、クマザサ属をはじめとする葦原となり、その後シルト質細砂層が堆積して安定した土地条件に変わり、微高地から後背低地にかけての緩傾斜地にススキやチガヤなどのウシクサ類が繁茂する草原となる。その後、相対的に低くなり後背低地になるとシルト質細砂層や砂質シルト層が徐々に堆積し、それを利用して稻作が営まれ、その後継続していく。このように、調査区では旧庄川の洪水の影響を受けて、微高地や緩傾斜地、後背低地が形成され、こうした微地形の変化に対応した植物の繁茂と土地利用のあり方がみられる。

なお、各層準の詳細な時期については不明であるが、とりわけ黒ボク層の時期決定とその上位層準における稻作の開始期が注目される。このように、各層準の時期と地形環境や植生環境の変化とが対応することにより、かかる地域の環境変化と土地利用の状況がさらに詳細に解明できるものと考えられる。

【文 献】

- 室井 錠 1960 「竹笠の生態を中心とした分布」『富士竹類植物園報告』 5号
杉本順一 1960 「日本及びその周辺区域の竹笠類の分布について」
『富士竹類植物園報告』 5号
外山秀一 1995 「人々の生活と自然のかかわり—プラント・オパールと火山ガラスからみた三内
丸山遺跡の立地環境—」梅原猛・安田喜憲編『縄文文明の発見』P H P研究所
外山秀一 1997 「プラント・オパールからみた砺波平野の土地利用と黒土層の特性」
『砺波散村地域研究所研究紀要』 第14号
外山秀一 1999 「八咫鏡神社ならびに高道向島遺跡のプラント・オパール分析」
『高道向島遺跡』砺波市教育委員会
外山秀一・中山誠二 2001 「プラント・オパール土器胎土分析からみた中部日本の稻作農耕の開始
と遺跡の立地—山梨・新潟の試料を中心として—」『日本考古学』第11号





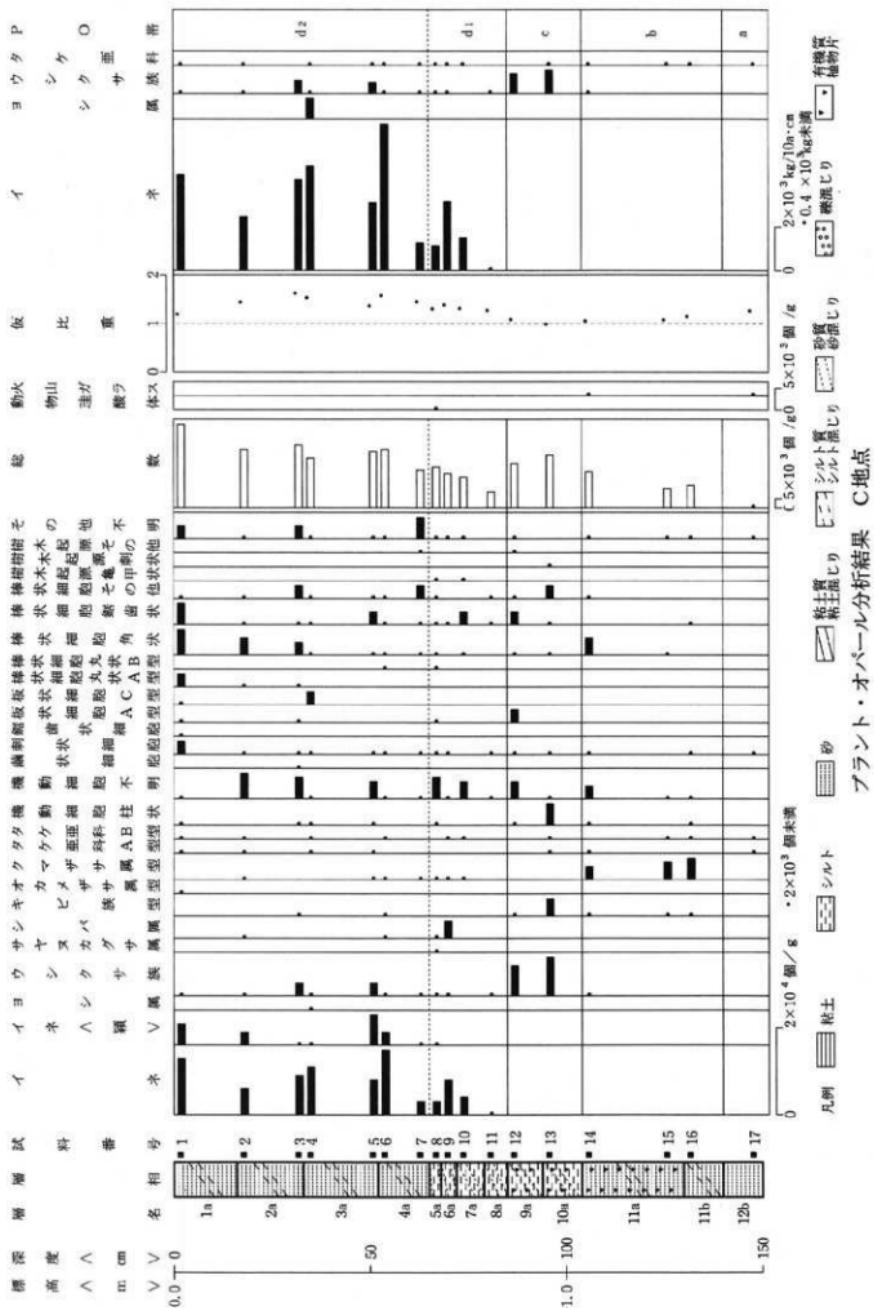




写真 プラント・オパール

- | | | |
|-----------------|--------------|-------------------|
| 1 ~ 9 イネ | 10 ~ 12 イネモミ | 13 ~ 15 ウシクサ族 |
| 16 サヤヌカグサ属 | 17 ~ 19 シバ属 | 20 ~ 21 キビ族型 |
| 22 ~ 24 クマザサ属型 | 25 機動細胞柱状 | 26 蘭状細胞 |
| 27 ~ 29 刺状細胞 | 30 鋸齒状細胞 | 31 ~ 32 棒状細胞丸状 A型 |
| 33 棒状細胞丸状 B型 | 34 棒状細胞角状 | 35 棒状細胞鋸齒状 |
| 36 ~ 37 棒状細胞その他 | | (× 100) |

第6節 自然科学分析（放射性炭素年代測定、脂肪酸分析、リン・腐植分析）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

久泉遺跡は、庄川扇状地の扇尖部付近に立地する。本遺跡は、発掘調査により縄文時代、鎌倉・南北朝・室町時代と思われる遺構・遺物が確認されている。今回の分析調査では、埋没谷の堆積物（5層、遺物包含層）と中世と考えられている遺構から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を実施し、年代資料を得る。また、検出された遺構の性格（特に動植物遺体の埋納など）に関わる資料を得るために、遺構埋積土の脂肪酸分析とリン・腐植分析を実施する。

（1）埋没谷堆積物と出土炭化材の年代

1. 試料

試料は、埋没谷の堆積物3点（上位より5層（遺物包含層）1、2、3）、中世と考えられている遺構から出土した炭化材2点（SK240、SK625）の計5点である。なお、炭化材はいずれも小径の枝材である。

2. 分析方法

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、 β 線計数法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,570年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年校正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

3. 結果および考察

結果を表1・2に示す。試料の測定年代（補正年代）は埋没谷の堆積物（黒ボク土・遺物包含層（5層）1～3）が約2100年～3300年前の値を示す。下位で古く、上位に向かって新しい年代値が得られていることから、概ねこの年代値が谷の埋積時期で、縄文時代後期から弥生時代頃に相当すると考えられる。このことは、本遺跡が完新世に形成した庄川扇状地に立地することや、本遺跡で縄文時代の遺物が検出されていることとも良く整合する。

また、SK240出土木材とSK625出土炭化材は約800～900年前の11世紀後半～12世紀頃の値を示す。これは、遺構の年代所見とも調和的である。なお、測定試料の炭化材については、実体鏡と電子顕微鏡による木材組織の観察で樹種の同定を実施した。その結果、SK240出土木材がコナラ属、エゴノキ属、ガマズミ属、サクラ属が混在しており、SK625出土炭化材はヤナギ属に同定された。

表1 放射性炭素年代測定結果

試料 番号	試料の質	樹種	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	補正年代 BP	Code.No.
5層 1	土壤	—	-18.2	2110± 80	IAA-397
5層 2	土壤	—	-18.5	2540± 80	IAA-398
5層 3	土壤	—	-17.9	3330±100	IAA-399
SK240	炭化材	コナラ属、エゴノキ属、ガマズミ属、サクラ属	-25.1	880± 70	IAA-396
SK625	炭化材	ヤナギ属	-23.7	830± 70	IAA-401

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表2 歴年較正結果

試料番号	補正年代(BP)	歴年較正年代(cal)						相対比	Code No.
5層 1	2110±80	cal AD - 348	-	cal AD - 319	cal BP 2,298	-	2,269	0.113	IAA-387
		cal AD - 227	-	cal AD - 222	cal BP 2,177	-	2,172	0.018	
		cal AD - 205	cal AD - 41	cal BP 2,155	-	1,991	0.866		
5層 2	2540±80	cal AD - 803	-	cal AD - 755	cal BP 2,753	-	2,705	0.232	IAA-388
		cal AD - 718	-	cal AD - 538	cal BP 2,668	-	2,488	0.749	
		cal AD - 528	cal AD - 523	cal BP 2,478	-	2,473	0.019		
5層 3	3330±100 SK240 880±70	cal AD - 1,740	-	cal AD - 1,504	cal BP 3,690	-	3,454	1.000	IAA-389
		cal AD 1,040	-	cal AD 1,100	cal BP 910	-	850	0.369	IAA-386
		cal AD 1,116	cal AD 1,142	cal BP 834	-	808	0.162		
SK625	830±70	cal AD 1,151	cal AD 1,221	cal BP 799	-	729	0.469		
		cal AD 1,070	-	cal AD 1,079	cal BP 880	-	871	0.048	IAA-401
		cal AD 1,127	-	cal AD 1,136	cal BP 823	-	814	0.047	
		cal AD 1,158	-	cal AD 1,277	cal BP 792	-	673	0.905	

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
計算には表に示した丸める前の値を使用している。

付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

(2) 遺構の検証

1. 試料

試料は、中世と考えられるSK544から採取された堆積物3点(No1、2、3)である。

2. 分析方法

(1) 脂肪酸分析

分析は、坂井ほか(1996)に基づき、脂肪酸およびステロール成分の含量測定を行う。試料が浸るに十分なクロロホルム：メタノール(2:1)を入れ、超音波をかけながら脂質を抽出する。ロータリーエバボレーターにより、溶媒を除去し、抽出物を塩酸-メタノールでメチル化を行う。ヘキサンにより脂質を再抽出し、セップパックシリカを使用して脂肪酸メチルエスチル、ステロールを分離する。脂肪酸のメチルエスチルの分離は、キャビラリーカラム(ULBON,HR-SS-10,内径0.25mm,長さ30m)を装着したガスクロマトグラフィー(GC-14A,SHIMADZU)を使用する。注入口温度は250°C、検出器は水素炎イオン検出器を使用する。ステロールの分析は、キャビラリーカラム(J&W SCIENTIFIC,DB-1,内径0.36mm、長さ30m)を装着する。注入口温度は320°C、浴も温度は270°C恒温で分析を行う。キャリアガスは窒素を、検出器は水素炎イオン検出器を使用する。

(2) リン・腐植分析

リン酸は硝酸-過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、腐植はチューリン法で実施する(土壤養分測定法委員会, 1981)。
<試料の調整>

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の一部を粉碎し、0.5mmのふるいを全通させる(微粉碎試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105°C、5時間)によ

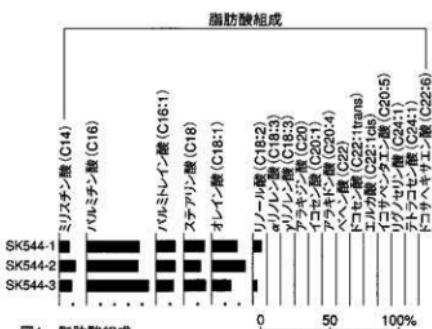


図1 脂肪酸組成

り測定する。

<リン酸>

風乾細土試料2.00 gをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約5 mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P2O5)濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾上あたりのリン酸含量(P2O5mg/g)を求める。

<腐植含量>

微粉碎試料0.100~0.500 gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(Org-C乾:1%)を求める。これに1.724を乗じて腐植含量(%)を算出する。

3. 結果

(1) 脂肪酸分析

結果を表3、図1に示す。脂肪酸組成はいずれの試料も類似する。連接土坑1、2、3の脂肪酸組成は、パルミチン酸(C16)の割合が高く、その他、ミリスチン酸(C14)、パルミトレイン酸(C16:1)、ステアリン酸(C18)、オレイン酸(C18:1)を10~20%程度含む。一方ステロール組成をみると、いずれも未検出である。

(2) リン・腐植分析

結果を表4に示す。腐植含量は3~4%、リン酸含量は1.3~1.4mg/g前後を示す。

4. 考察

当社では、これまでに動物遺体の遭難への埋納を推定するために脂肪酸分析や、脂肪酸残存の基礎実験などを行い、情報を蓄積してきた。これによると、遺体埋納など動物の痕跡が認められる場合には、脂肪酸組成やステロール組成にばらつきが大きくなるのに対し、自然に近い状態の場合は組成のばらつきが小さくなる傾向にある(当社未公表資料)。これは、自然状態では組成が均質化し、物理・化学的に安定した方向に向かうのに対し、埋納などが行われた場合はその状態が崩れ、局所的に濃集が起こるためである。これは小山(1995)でも指摘されており、土坑中での動物の痕跡を検証するための指標の一つとなると思われる。今回の場合、いずれの脂肪酸組成も類似しており、値の大きなばらつきはみられなかった。これまでにも考古遺物や土壤の脂肪酸分析を行った場合、飽和脂肪酸のパルチニン酸の割合が高いことが多い。これは長い年月の間にオレイン酸・リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が酸化されてパルチニ

表3 脂肪酸分析結果

種類	試料名	SK544		
		No.1	No.2	No.3
直鎖脂肪酸組成				
ミリスチン酸(C14)	7.5	12.0	9.3	
パルミチン酸(C16)	38.2	37.4	44.7	
パルミトレイン酸(C16:1)	14.0	13.8	12.6	
ステアリン酸(C18)	15.2	12.2	16.1	
オレイン酸(C18:1)	18.8	24.5	14.2	
リノール酸(C18:2)	6.3	—	3.1	
γリリエン酸(C18:3)	—	—	—	
αリリエン酸(C18:3)	—	—	—	
アラキシン酸(C20)	—	—	—	
イコサン酸(C20:1)	—	—	—	
アラキドン酸(C20:4)	—	—	—	
ベヘン酸(C22)	—	—	—	
ドコセカン酸(C22:1trans)	—	—	—	
エルカ酸(C22:1cis)	—	—	—	
イコサヘキサエン酸(C20:5)	—	—	—	
リグニセリン酸(C24)	—	—	—	
テトラセレン酸(C24:1)	—	—	—	
ドコサヘキサエン酸(C22:6)	—	—	—	
ステロール組成				
コブロステロール	—	—	—	
コレステロール	—	—	—	
エルゴステロール	—	—	—	
カンセロース	—	—	—	
スマスマステロール	—	—	—	
シテロール	—	—	—	
分析試料の重量(g)	105	103.2	101.1	

表4 リン・腐植分析結果

試料名	土性	土色	腐植(%)	P2O5(mg/g)	備考
SK544 No.1	LIC	10YR2/2 黒褐	3.38	1.32	
SK544 No.2	LIC	10YR2/2 黒褐	3.83	1.32	
SK544 No.3	LIC	10YR2/2 黒褐	3.72	1.37	

注.(1) 土色: マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修、1967)による。

(2) 土性: 土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編、1984)の野外土性による。

LIC…軽埴土(粘土25~45%、シルト0~45%、砂10~55%)

ン酸を生成するためで、主として植物遺体の土壤化に伴う腐植物に由来すると推定されている(中野ほか、1993)。また、坂井・小林(1995)は、既存の基礎実験結果を検討し、熱や経年変化によりオレイン酸に対する、バルチミン酸の割合が増加することを指摘している。以上のことから、今回の場合は、組成が均質で、化学的に安定な脂肪酸の割合が高くなっているといえる。

一方、ステロールのうち、コレステロールは動物に、エルゴステロールはキノコなどに、カンペステロール、スティグマステロール、シトステロールは植物にそれぞれ由来する(菅原ほか、1987)。また、コプロスタノールはコレステロールが大腸菌などによって分解されて生じたもので、動物に由来する(中野、1995)。今回はステロールが未検出である。これは、ステロールの量が微量なため検出器の感度を下回っている可能性が高く、ステロールに関しての検討は難しい。

また、土壤中のリン酸は主に植物遺体に由来するものが多いことから、通常ではリン酸と腐植含量は正の相関を示す。しかし、動物遺体の埋納などによって土壤中のリン酸供給のバランスが崩れると、腐植の量にかかわらずリン酸量が変化するようになり、遺体埋納の決め手になる(東京都教育委員会、1995など)。今回の場合、リン酸の値は3試料ともに全体的に低く、いずれの試料も値が近似している。

以上の事から、今回得られた脂肪酸組成は化学的に安定な脂肪酸が多く組成が均質であること、リン酸含量においても値は低くかつ試料間のばらつきも小さいことから、本遺構の堆積物は極めて自然状態に近いものと考えられる。このため、仮に動物遺体が埋納されていたとしても、経年変化による分解・均質化が極度に進んでいるため、脂肪酸組成・リン酸含量から動物遺体の存在を推定することは難しいといえる。

【引用文献】

- 土壤養分測定委員会編 1981「土壤養分分析法」農賢堂 440p
- 小山陽造 1995「東北地方の脂肪酸分析結果」「考古学ジャーナル」386 ニューアイヌ社、17~21。
- 中村洋介・岡田龍正・竹村憲二 2003「富山平野西縁の河成段丘とその変形」「地学雑誌」112 544~562。
- 中野益男・福島道広・中野寛子 1993「西隆寺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」
- ・明瀬雅子・長田正宏 「奈良国立文化財研究所所報52 西隆寺発掘調査報告書」奈良国文文化財研究所、94~100。
- 中野益男 1995「脂肪酸分析の現状と課題」「考古学ジャーナル」386 ニューアイヌ社 2~8。
- 坂井良輔・小林正史 1995「脂肪酸分析の方法と問題点」「考古学ジャーナル」386 ニューアイヌ社、9~16。
- 坂井良輔・小林正史・藤田邦雄 1996「灯明皿の脂質分析」「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)」(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所、24~37。
- 菅原龍幸・福沢美喜男・青柳康夫・大川博志・小泉典子 1987 「食品学総論」建帛社、233p。
- 東京都北区教育委員会 1995「徳島馬場遺跡(本文編)」東京都北区教育委員会、383p

第4章 考察

第1節 扇状地扇中央における打製石斧出土の意味

打製石斧は縄文時代の石器組成においてもっとも一般的な石器のひとつである。縄文時代前期の南関東地方に出現し、中期にかけて関東・中部地方を中心に盛行した後に衰退するが、弥生時代に至っても存続する。また、西日本には縄文時代中期末にあらわれ、後期後半になって普及することが指摘されている〔藤尾：2003〕。

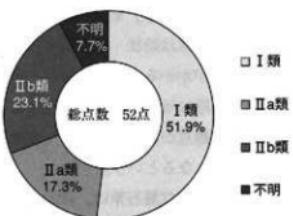
本遺跡では、縄文遺物のなかで打製石斧が大部分を占め、そのほかの石器類は1点も出土していない。つまり、石器組成としては打製石斧のみで構成されるわけであり、それとともに土器量が集落遺跡と比較して極端に少ないことが今回調査区の最大の特徴といふことができる。このことから本遺跡の縄文時代の実態を解明するためのもっとも重要なファクターとして考えられる打製石斧に焦点をあて考察をすすめたい。

(1) 打製石斧の類型と構成

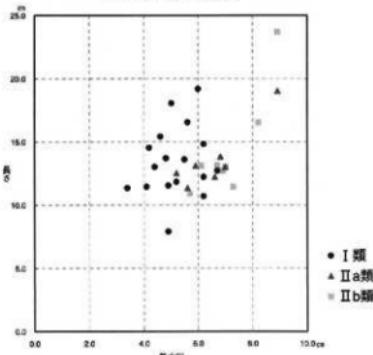
年代 打製石斧は欠損品も含めて全部で52本出土している。すべて5層（遺物包含層）からの出土であり、遺構に伴うものはない。同じ5層（遺物包含層）から共伴して出土した土器は、上山田・天神山式、串田新I・II式、氣屋式、八日市新保式が主体となっていることから縄文時代中期中葉から後期前葉、そして後期後葉の範囲に含まれるものと考えられるが、個々の打製石斧の時期比定をすることは難しい。北陸地方では、打製石斧が中期中葉から後葉にかけて増加する傾向がある〔山本：1985〕ことから、本遺跡資料も年代的に矛盾しない。

形態分類 形態によって、伝統的な分類法である短冊形（I類）と撥形（II類）に大別した。分銅形やその他のものは認められない。I類は、両側縁がほぼ平行な短冊形である。II類は、側縁部が刃部に向かって直線的に開くものの（IIa類）と基部に近いところでくびれ（抉り）をもつもの（IIb類）に細別することとした。構成は、I類が27点（51.9%）、II類が21点（40.4%）（うちIIa類9点（17.3%）、IIb類12点（23.1%））、欠損しているため不明のものが4点（7.7%）である。数値的にはI類がII類を若干上回っており、II類についてIIb類がIIa類よりやや多い。

打製石斧の形態分類構成



打製石斧法量分布図



製作技法 打製石斧の製作工程は、〈工程①：大型扁平円礫から背面に自然縫面の残る梢円形横長剥片を剥離する〉→〈工程②：この大型剥片を素材とし、打点側および先端側を中心に整形剥離を加えて大まかな打製石斧の形態を作り出す〉→〈工程③：着柄部のくびれ部等の側縁部や刃部にさらに細かな剥離や敲打を加えて完成する〉というのが一般的である〔山本：1996〕。本遺跡出土の打製石斧は、そのほとんどが原材に衝撃を与えて大形剥片を取り出し、側部から打ち削って大体の形を整えている。一面には自然縫面をそのまま利用しており、なだらかな反りをもつのが特徴である。基部側の自然縫面は刃部に比べて屈曲しており、原材の側面を意識して剥離したものと思われる。刃部は丁寧に工程③を行い鋭く作り出しているもの（Fig.29-42、Fig.30-48・53～55、Fig.31-59～61、Fig.32-63・64・67・68など）が大半を占めるが、なかには素材の鋭い縁辺を何ら加工せず、そのまま刃部とするもの（Fig.29-44・47、Fig.31-57・62、Fig.32-69）もある。

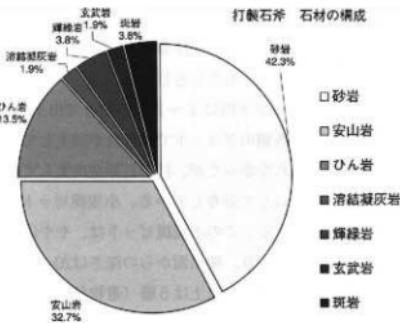
石川県野々市町の栗山遺跡では、打製石斧とともにその母岩類にも注目し製作方法のパターンを導き出している。岡本恭一氏は、母岩に残された剥離痕や加撃痕そして剥片、裂片との接合資料や出土状況から打製石斧の製作技法について三つの技法が存在することを推定している〔岡本：1991〕。第一の技法は、「選択した礫の縁辺の全周ないしは半周から幾度も打撃を加え、半截あるいは一部を剥離する方法」であり、両面に全く自然縫面を残さないものや中落ちの板状の剥片が得られることがあるため両面加工、または全面加工する必要が生じる。第二の技法は、「礫の側縁に対してほぼ平行方向の加撃」を行うものであり、第三の技法は「礫の側縁に対してほぼ垂直方向の加撃」を行うものである。その結果、剥離される剥片は加撃の力が均等に伝わると、剥片の形状は蛤状・鶴嘴状となる。第一の技法の場合、大型剥片を得ることは難しく、二次加工に手間がかかる。これに対し、第二、第三の技法は、剥片形状が蛤状・鶴嘴状となるため二次加工する際に形態的な制約を受けること、そしてうまく力が伝わらないと大きな剥片がえられないという難点があるものの、主剥離面と自然縫面の交わる側片は加撃点から離れるにつれて薄く鋭いものとなるという。

今回出土した打製石斧は、ほとんどが岡本氏のいう第二、第三の技法によって製作されたものと考えられる。素材の鋭い縁辺を何ら加工せず、そのまま刃部とするもの（Fig.29-44・47、Fig.31-57・62、Fig.32-69）のように工程③が省かれているのは、こうした技法によって製作されたことを示すものである。また、66（Fig.32）は唯一両面が加工されており、自然縫面が残っていない。これは第一の技法により製作されたものと考えられる。

また、側縁部を観察すると敲打痕がみられるものが多く、工程③の結果によるものと思われる。I類には、基部から刃部にかけて敲打痕がみられる。これは製作工程上、肉厚となる部分を削ぎ落とし整形するために生じたものと考えられる。そしてII類については、IIa類の側縁部に敲打痕が顕著にみられる。I類のように基部から刃部にかけてのものもあるが、くびれ部に集中的に敲打を施している。I・II類ともに敲打する部分は若干となるものの、いずれも工程①・②によって生じた側縁部の刃を潰し、着柄し易くするために敲打されたものであるとみることができる。

使用石材 原材は扁平円盤もしくは大形の円盤を使用していると考えられる。石材は、砂岩22点(42.3%)、安山岩(角閃石安山岩・菱閃石安山岩含む)17点(32.7%)、ひん岩7点(13.5%)、溶結凝灰岩1点(1.9%)、輝縞岩2点(3.8%)、玄武岩1点(1.9%)、斑岩2点(3.8%)で構成される。石材は多様であり、これは打製石斧の特徴ということができ、石材選択の幅が広いことを表している〔山本:1989〕。決して硬度が高くなない砂岩がもっとも多いのは、製品の使用に際しそれほど強度を必要としなかったことの表れとみることが可能である。

また、すべての石材は川原などで採取可能なものであると思われ、扇状地という地理的環境を考えるとその入手は容易だったものと考えられる。「石材運搬に関わるコストやエネルギー、効率性などを考慮すれば打製石斧の大半が集落外で製作されていたというのが、妥当」〔川口:1997〕という考え方を援用すると、本遺跡周辺で石材を入手し、打製石斧を製作し現地で使用していた可能性が高い。



(2) 出土状況から推定される打製石斧の用途

使用痕 使用痕については、ほとんどの刃部が残っている製品や破損品にみられる。刃部先端が磨り減って丸くなっているものや、使用により刃部が欠けたものがある。明瞭な擦痕や条線痕などはみとめられない。

完形品(遺存率90%以上)と欠損品の比率は、右表のとおりである。ここで注目したいのは、完形品が半数以上を占めているということである。遺存率90%以上であれば、廃棄される必要はなく打製石斧として充分にその機能を有し使用に耐えうるものと思われる。これらの打製石斧はある程度使用したのち、目的を果たしたためにそこに捨てられたとみることができ、言い換れば“使い捨ての道具”であったということができる。欠損品については、非常に損傷し易い用途に用いられたとも、使用頻度が高く消耗が激しかったとも言い切れない。

側縁部については、着柄するための敲打がなされているが、着柄による摩滅がみられる。I類については、刃部から着柄したと考えられる部分にかけて摩滅しているものがある(Fig.29-42、Fig.30-50)。側縁部の摩滅は使用によるものであり、着柄したと考えられる部分には幅1~1.5cm程度の摩滅がみられ、着柄により磨り減ったものと思われる。

また、64(Fig.32)は、刃部と基部の稜線に沿って帶状に黒褐色の小塊が付着しており、使用的際に付着したものか土壤中の成分が集積して付着したものか判然としない。



出土状況 この遺跡の調査面積と打製石斧の出土数を単純に計算すると、約80m²に1点の割合で出土していることになる。ただし調査区全体にわたって平均的に出土しているわけではなく、A-2区にある南北に走る浅い堀溝から東側の範囲で大半が出土している。数個の打製石斧がまとまった状態で出土するということではなく、散発的に5層（遺物包含層）から出土しており、遺構に伴うものはなかった。5層（遺物包含層）のなかでも地山である6層・7層に近いところ、漸移層が発達している部分からの出土である。5層（遺物包含層）下部の土壌で放射性炭素年代測定を行ったところ、BP 3330±100という年代が得られている（第3章第6節、p.67）ことから、年代的に縄文時代中期中葉から後期前葉、後期後葉の範囲に帰属すると考えている打製石斧の年代観と大差ないものと思われる。

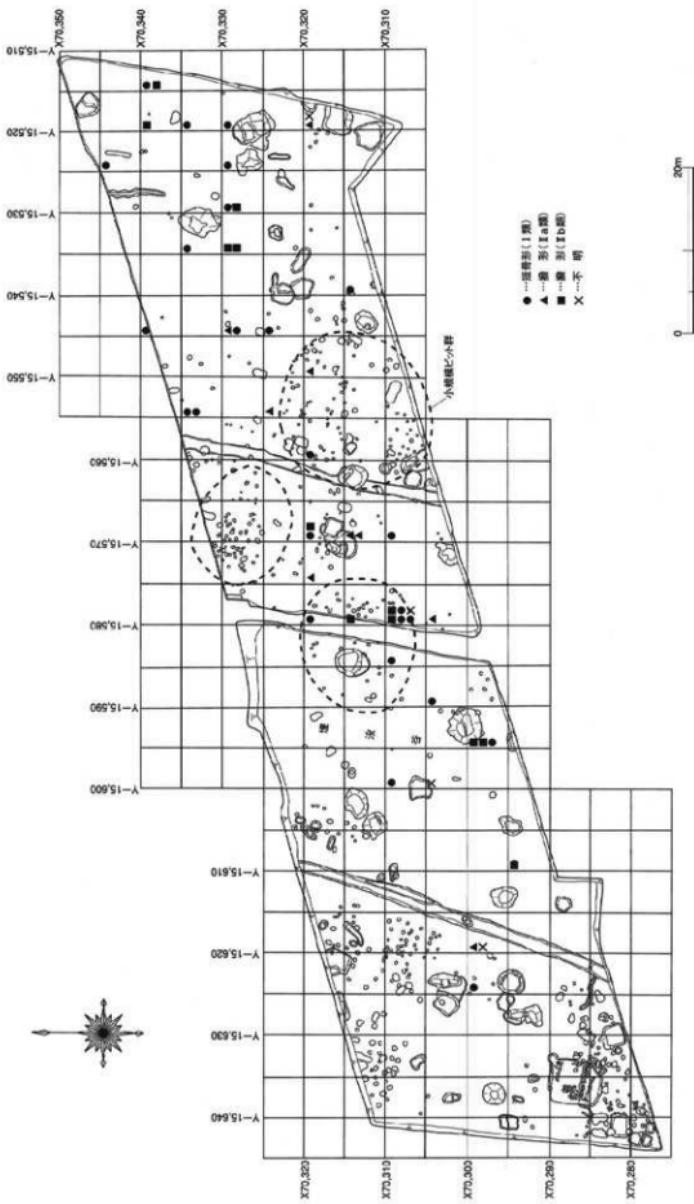
5mグリッド内に1～2点の割合で出土していることが多いが、もっとも多く出土しているA-3区西側のグリッドでは6点が出土している。下層遺構面では明確に縄文時代に属する遺構は認められなかったが、打製石斧が出土している地点は、小規模ピットが密集している範囲を避けるようにして分布している。小規模ピット群は、調査区のはば中央、SD90を挟んで南北に無数に存在する。この小規模ピットは、やや円錐形状を呈し底部に向かって先細りしているものがほとんどであり、検出面からの深さは20～40cm程度のものである。柱穴などのように柱根痕などは認められず、埋土は5層（遺物包含層）に近い黒褐色土に地山シルトが粒状に混ざっているような状況であったため、構築物を構成するものではなく何のために掘られたものか判然としない。しかし、この小規模ピットは点在するというより一定の範囲で集中して存在する傾向があり、そこにこの遺構を読み解く手がかりがあるようと思われる。遺物が伴わないと時期を比定することも難しい。ただ、この遺構は、地山上面において検出したが、おそらく5層（遺物包含層）中とくに下層付近から掘り込まれたものであると思われ、5層（遺物包含層）の年代（第3章第6節、p.67）から縄文時代に属するものである可能性は充分に考えられる。現地調査での印象としては、規則的というよりも不規則に掘り込まれている状況から、植物質食料などを採集するために掘られたものではないかという感触をえたが、それを立証することは現時点では難しいといわざるをえない。

打製石斧の用途 一般的に打製石斧は、縄文時代中期から発見的に出土例が増加する遺物であり、すでに磨製石斧が普及していることから木材の伐採や加工の道具というよりむしろ土掘具であると推定されている。また、鍬としての用途が考えられており、縄文時代中期農耕論の有力な根拠のひとつとなっているが、立証することは難しく、棒の先に菱形として握棒やシャベルのように使用され根茎類、球根類などの植物質食料の採集に使用されていたとも想定されている。縄文時代中期には遺跡から出土する石器総数の大半が打製石斧で占められ、生産活動の上でもっとも重要な石器として位置付けられるという（鈴木：1983）。

今回Ⅰ類（短冊形）としたものは、刃部の使用痕が刃に対して直角についていることが多いため、突き棒や掘り棒として土中深くまでまっすぐ突き立てて使用されていたと考えられる〔今村：1989〕。本遺跡出土品についても刃部の摩滅とともに、刃部から柄部にかけて側縁部に摩滅がみられることから、同様の使用方法を推定することが可能である。

小規模ピット群がその形状や規模等から、何かを得るために掘られた結果、形成された遺構であるとするならば、その周辺に土掘具や耕起具と推定される打製石斧が分布するということに意

Fig.36 打製石斧出土分布圖 (Scale=1/600)



味があるように思われる。打製石斧の出土地点周辺には、地山であるシルトや黒色の5層（遺物包含層）のように比較的柔らかい土が堆積する環境にある。完形品の比率が高いことや石材に砂岩を使用していることは比較的強度を必要としなかったことを意味している。まさにI類は、この場所で穴を掘るのに最適の道具であるといえる。渡辺誠氏は、打製石斧を根茎類（ワラビ・クズ・カタクリ・ヒガンバナ）の採集具とみなしており〔渡辺：1975〕、今村啓爾氏は、ジネンジョを採集するための道具としている〔今村：1988〕。I類は、自然科学的な確証は得られないが、植物質食料を採集するための道具とするのがもっとも説得力をもつ。

次に、II類（撥形）についてみてみる。縄文時代後期に短冊形に遡れて撥形・分銅形・有肩形が東日本に現れ、後期後半に西日本に出現する〔藤尾：2003〕。藤尾慎一郎氏は、この3つの形式は、畑作に関連する道具としている。撥形・分銅形は、「浅く幅広く起転する鍛錆的使用法への変化に対応した形態」ととらえており、その根拠として①遺跡立地から穀物栽培が想定されること、そして②短冊形に比べて大形で刃幅が広いので、短冊形とはことなる機能を有していたことが推定されることなどを挙げている。

本遺跡出土のII b類としたものには、くびれ部に着装痕と考えられる摩滅がみられ、I類のように側縁部の摩滅痕はあまり顕著でない。また、形態的にくびれ部を作り出しているのは、I類とは着柄方法がことなることによるものと思われる。また、I類の体部はほとんどが扁平であるのに対し、II b類には体部がやや厚みをもつ製品・69 (Fig.32) がある。I類は上中に深く突き刺すことが目的と考えられることから、体部に直線的に結束して柄を着装していたと思われる。II類は、I類と同様の着柄方法も考えられるが、62 (Fig.31)・69 (Fig.32)などの大形品は、直接手で握るかもしれないS字の柄を体部に結束し鍊のように着柄していたことが想定できる。確かにII類は、I類に比べて刃部幅が広い場合が多いが、小型品の場合I類と同様の着柄方法も充分に考えられるため、機能がことなるとはいきれない。むしろ、II類の中でも小型のものは、穴を掘ったり上中に突き刺す機能を有しているものと思われる。I類との形態的相違は、着柄を強固なものにするための工夫だったのではないか。ただし、大形品に限っては他の機能を推定したほうが良いように思う。しかし、短絡的に鍊としての機能を当てはめることはできず、慎重に考慮する必要がある。

今回、5層（遺物包含層）を含むプラント・オパール分析を実施した（第3章第5節、p58）。外山氏によれば、5層（遺物包含層）である黒ボク土の形成過程について、「クマザサ属をはじめとする笹原となり、その後シルト質細砂層が堆積して安定した土地条件に変わり、微高地から後背低地にかけての緩傾斜地にススキやチガヤなどのウシクサ類が繁茂する草原となる」と考察されている。5層からはプラント・オパールは全く検出されなかったので畑作の可能性は低いが、腐植土であるため畑作を行うことは可能であると考えられる。ただし、自然科学的に畑作を立証することは難しいため、打製石斧との関係を明らかとすることはできない。

（3）打製石斧が主体的に出土する遺跡

今回の調査では、縄文上器が極少量の出土にとどまり、かえって打製石斧が高割合で出土するという特徴的な出土傾向が認められた。また、遺構に関しては、住居跡など居住施設は全く検出されず、縄文時代に属する可能性がある小規模なピットが群集するという状況も本遺跡の特徴で

Tab.8 県内の打製石斧出土遺跡

あるといえる。大規模な縄文集落にみられるような住居跡や貯蔵穴などの豊富な遺構群、そして多量の土器類や多様な石器組成などとは全く対照的である。

本遺跡の打製石斧の在り方を検討する材料として、県内の打製石斧出土遺跡を表に示した（Tab.8）。打製石斧が出土している遺跡は多数あるため、ここでは打製石斧が10点以上出土しているものに限定して取り上げた。

本遺跡のように打製石斧が石器組成のなかで主体を占めるとともに土器の出土量が少ないという遺跡は、県内では小矢部川流域の扇状地上や早月川流域の洪積台地上、石川県では手取川流域の扇状地で確認されている〔麻柄：2003、山本：1990〕。

早月川流域の洪積台地（上中島台地）では、吉野遺跡、山下Ⅱ遺跡などが確認されている。上中島台地では、該期の拠点集落である早月上野遺跡が存在しており、吉野遺跡の南東約1km、山下Ⅱ遺跡の南東約1.2kmに位置する。

吉野遺跡では、中期中葉から後期までの土器が10数点出土しているのに対し、石器は打製石斧47点、磨製石斧5点、石皿1点、石錐1点が出土している〔魚津市教委：2000〕。いずれも遺物包含層からの出土であり、住居などの遺構は確認されていない。

山下Ⅱ遺跡では、中期から晩期までの縄文土器とともに打製石斧を主体とする石器が出土している。打製石斧は7点と少ないが、土器出土量に比べると多い。山下Ⅱ遺跡では、住居などの居住施設は確認されていないが、時期不明の柱穴状ピットが多数検出されている。この柱穴状ピットの断面図が報告書に掲載されていないことから推定の域をでないが、これらピット群も久泉遺跡と同様に植物質食料採集のために掘られたものである可能性があるのならば、遺跡立地の点ではことなるもののきわめて近い種類の遺跡であるといえる。

また、小矢部川流域に存在する養島遺跡は、晩期中葉から後葉の土器とともに打製石斧14点と叩石が出土している。遺構は土坑と土器片が出土した自然流路だけであり、居住施設の存在はない。養島遺跡の西約5kmには小矢部市桜町遺跡が存在する。

手取川扇状地は、白山大汝峰に源を発する手取川により形成されている。この扇状地上に打製石斧が主体的に出土する遺跡が確認されている。野々市町栗田遺跡、近松遺跡、清金アガトウ遺跡などが該当するという〔岡本：1991〕。

総括すると、打製石斧が主体的に出土する遺跡には、次のような特徴がみられる。

- ①打製石斧が他の石器を卓越しており、石器組成が多様でない。
- ②上器出土量が相対的に少なく、小破片が多い。
- ③時期は縄文時代中期から晩期に含まれる。
- ④堅穴住居などの居住施設が伴わない。
- ⑤沖積扇状地・洪積台地上に立地し、周辺に拠点的な集落が存在する。

（4）久泉遺跡を形成した集団

市域の縄文遺跡は、庄川右岸の芹谷野段丘以東に大半が存在する。福山大堤遺跡では草創期と考えられる半月形石塁が確認されているが、前期後葉から中期にかけて遺跡数が増加する傾向にある。県下でも著名な縄文遺跡である厳照寺遺跡は、堅穴住居や多量の土器が出土しており、周辺では拠点的な性格をもつ遺跡と考えられるが、時期は中期前葉に属するため、久泉遺跡に先行

大別	略別	北陸の土器編年	遺跡名	久 泉	福 山	敵 照	高 沢	高 島	宮 森 新 北 島	上 和 田	賴 成	増 山	東 保 石 坂	徳 万	孫 子 ワ バ ラ
			m	55	120	79	54	53	78	70	85	50	38	62	350
晚期	後葉	柴山出村・大塚V													
		下野II・長竹 下野I													
		(中屋III) 中屋II 中屋I													
	中葉	(御経塚III) 御経塚II 御経塚I・勝木原													
		八日市新保II 八日市新保I (井口III) 井口II													
		酒見・井口I (+)													
	前葉	氣屋II 氣屋I 前田・岩崎野													
		(+) 串田新II 串田新I (大杉谷)													
		(古府II) 古府 上山田・天神山II 上山田・天神山I													
中期	前葉	新崎III 新崎II 新崎I 新保II 新保I													
		朝日下層 福浦上層													
		瓶ヶ森II 瓶ヶ森I 福浦下層 朝日C													
		佐渡・極楽寺													
		(常世) 桜峰													
早期	後半														
草創期															

Tab.9 市域の縄文遺跡消長表

する。久泉遺跡に時期的に近い遺跡としては、東保石坂遺跡、徳万遺跡が挙げられる。これらの遺跡は、いずれも芹谷野段丘縁辺部に立地しており、久泉遺跡からは3~4km程の範囲にあり、歩いて1時間程の距離である。

久泉遺跡は、庄川扇状地扇尖部で初めて認識された縄文遺跡であるといつても過言ではない。これまでこの扇状地上は、庄川の氾濫によって縄文遺跡はおろか、古代や中世にいたっても非常に遺跡分布の希薄な地帯であるとされてきた。では、なぜ久泉遺跡はこのような扇状地上に存在するのであろうか。ひとつは、久泉遺跡は何本も南北に走る河道に挟まれている場所であるものの、周辺より若干高い微高地という地形状況にあることである。地山層の直上に漸移層が発達し、黒色有機質層が厚く堆積していることは安定的な地形であることを示している。ただし、試掘調査では黒色有機質層の間に幾層か洪水層と思しき薄いシルト層が確認できることから、住まいを構えるには決して好条件とはいえない。今回の調査規模と打製石斧の出土量からすれば、居住施設がわずかに存在していてもおかしくないが、それも検出できなかつたことから久泉遺跡を通常の集落として扱うことは適当でないと思われる。土器が少量の出土にとどまり打製石斧が主体的に出土するということは、素直に解釈すれば“打製石斧を使用もしくは廃棄するための場所”であったというほかない。

麻柄一志氏は、打製石斧出土の遺跡について「砺波平野では中期から晩期まで継続する拠点集落はなく、ある程度の期間が続く大規模集落が場所を変えて移動し、植物質食料獲得の場所が扇状地内に広がっている可能性がある」と指摘している（麻柄：2003）。これまで筆者が試掘調査や分布調査を行ってきた経験上、庄川扇状地扇尖部に大規模集落が存在するということは考え難い。扇頂部には庄川町松原遺跡があり、先端部の湧水帯には大規模集落とまではいえずともある程度の規模をもつ遺跡の存在が知られる。おそらく麻柄氏のいう大規模集落は扇状地のなかでも扇頂部や扇端部、台地縁辺部などに存在するのではないだろうか。久泉遺跡はそうした集落からはかなりの距離があることから、本遺跡を形成した集団は、東保石坂遺跡や徳万遺跡が存在する芹谷野段丘以東もしくは縁辺部に拠点的な集落を営んでいたと考えるほうが妥当であるように思えてならない。古環境を考慮しても、生業の面からは扇尖部よりも山間部に近いほうが動物性タンパク質や堅果類の採集に適していると考えられる。西田正規氏は、「資源を集落に運搬する」効果的な対応策として、「必要な資源をできる限り集落から近い範囲で入手すること」を挙げており、「より狭い環境の集約的利用」が定住者のめざすところであるとしている（西田：1989）。庄川扇状地西域では芹谷野段丘縁辺部から山間部にかけてある程度の期間をもった集落が営まれ、季節によって扇状地上に移動し植物質食料の採集に勤しんでいた、という漠然としたパターンが現時点では想定可能である。

久泉遺跡のような打製石斧が主体的に出土する遺跡は出土遺物量が割合として低いため、認識されること自体が難しい。しかし、精度の高い試掘調査を行うことにより、こうした遺跡はさらに発見されるものと確信している。今後、資料増加を待って久泉遺跡の性格を見極めていきたい。

（野原）

第2節 德大寺家領般若野荘荘域における久泉遺跡の位置

本遺跡は中世前期に成立したとされる徳大寺家領般若野荘の西端、旧千保川に接する位置に存在する。本節では、中世における本遺跡の在り方を探ることを目的とし、もっとも深い関わりをもつと考えられる徳大寺家領般若野荘の荘域における動向と周辺遺跡の在り方について考察していきたい。

(1) 中世の久泉遺跡

今回の調査で検出された遺構・遺物は、①12世紀後半～13世紀前半と②14世紀の大きく二時期に集中する。15世紀に属する遺物は、わずかにすぎない。

①遺構の配置

調査区全体において、遺構配置は部分的に特定の遺構が集中するという傾向が見受けられた。A-3区を中心に方形土坑が集中してみられ（方形土坑集中域）、A-2区では石組建物や掘立柱建物を中心とする建物群（建物遺構集中域）が分布する。また、それぞれの集中域を分断するように南北に縱走する溝（SD90、SD165）が存在する。

方形土坑集中域 長辺約1.2～2.2m×短辺約0.7～1.0m、深さ約0.5～0.75mの規模をもつ方形土坑が多少切り合っているものの整然として長軸が南北もしくは東西をとり、あたかも規則的に配置された感がある。土坑から出土した炭化物は、放射性炭素年代測定で11世紀後半～12世紀頃という年代が得られた（第3章第6節、p67）。

遺構内から遺物の出土はほとんどなく、炭化物が多少認められる程度であった。埋土は単層であることが多い、短時間の間に人為的に埋められた可能性が高い。そのことから、現地調査時に“土壙墓”ではないかとの疑念をもったため、それを検証するために脂肪酸分析をおこなった（第3章第6節、p68）。しかし、埋土内の脂肪酸組成は化学的に安定な脂肪酸が多く組成が均質であることから、むしろ遺体埋納などを行っていた可能性は低いという結果がえられた。そのため、方形土坑の性格については、不明であるというほかないが、遺物を伴わず掘り込まれて程無くして埋められたという点にこの遺構を解明する手がかりがあるよう思う。また、婦中町清水島II遺跡や福光町梅原胡摩堂遺跡などでも同様の遺構が確認されている〔富文振：1996、2002〕。清水島II遺跡では、長方形を呈する土坑（SZ2039）から中世土師器皿の完形品が4枚出土しており、墓壙として扱っている。

建物遺構集中域 調査区西側、A-2区では川原石を用いて造成された石組建物（SK166、SK224）や掘立柱建物（SB-1など）、柱穴と思われるピット、井戸（SK360）などが検出された。いずれも住居に関わる遺構の可能性が高く、居住空間の様相を呈している。建物集中域は溝（SD165）の西側に限定される。

石組建物（SK166・SK224）

A-2区南西端で検出された石組建物は、一般的に「土台建物」とよばれる遺構に非常によく似ている。今回「石組建物」として扱った理由は以下のとおりである。まず、土台というには配列している石の水平レベルが一定でなく、例えば横木を据えるには不向きである。石に直接柱を据える場合でも、一定間隔でそれに相応しい石が認められなかった。周辺より掘り込まれて造成

されていることから墳墓の可能性も考えたが、①掘り込みが浅いこと、②規模が大きいこと、③埋葬施設が確認されなかつたことなどから墓の可能性は低いと判断した。また、石が規則的に配置されているため、計画的に造成された構造物であることは否定できず、現時点でこれに相当する建物をおいて他にないという理由で“石組建物”として扱うこととした。

7層上面において検出できたが、埋土と5層が極めて近い土質であったことからさらに上層から掘り込まれた可能性がある。平面形態は方形を呈し、北西隅に土坑のような掘り込みがあるが、これはこの遺構に伴うものというより後世に形成された可能性が高い。掘り込みは、東西5.4m×南北6.4mの規模をもち、その内部に方形に石を巡らしている。石列は、コの字状に配されており、南側に幅約1.8mの連絡部をもって東西方向に1列だけ石列が存在する。コの字状石列の部分が主室、南側石列部分が副室というような印象をあたえる。コの字状石列部分の西側で内側に石が集積しているが、これは石列の北西側が擾乱を受けて散在したものと思われる。石列は基本的には川原石を使用しており、長軸を列と垂直方向に配している。石は、掘り込まれた7層の直上に据えられた状態であった。本遺構に伴う柱穴を遺構内や周辺部を丹念に探したが検出することはできなかつたため、掘り込みより内側で本遺構は完結しているものと思われる。

SK166のような石を列状に配して構築された遺構は、県内でいくつか確認されている。

婦中町中名V遺跡A2地区では、土台建物・SX4502が確認されている〔富文振：2003〕。規模は南北4.8m、東西約6.5m、深さ約0.3mであり、コの字状に石列を配し2つの区画に分かれる。基礎部分の出土遺物から17世紀後半とされる。また、集石遺構とされるSX5252は、コの字状と弧状の石列を組み合わせて区画を作り出している。

富山市上新保遺跡では、石組の区画2区画とともに敷石8ヶ所、溝4条、石垣3列が検出されている。調査では、この区画を「建物の基壇」としており、近世屋敷跡の一部であるという。

本遺構と他遺跡で確認されている土台建物などを比較すると、本遺構の場合、副室のような施設が認められるものの、全体として単独で成立しているという違いがある。他遺跡の遺構では、複数の区画が接続して形成されており、本遺構とは機能的にことなるものと考えられる。

帰属年代については、遺物量が少ないために確定できないが、南西隅から13世紀後半の青磁の碗が出土している。また、周辺の遺物出土状況から考えても14世紀代とするのが妥当であり、15世紀までくだらないものと思われる。すると、これまで県内で検出されているような土台建物・集石遺構などにやや先行することになり、若干の時代的隔たりをもつ。

また、建物とした場合、どのような性格の建物であったかということは不明といわざるをえない。しかし、SK166の南約30mの場所、祖泉神社前に南北朝期に作られたとされる中世石造物があることから、かつてSK166が御堂や祠のような建物であつて、この石造物を記っていたとみる研究者もある。

溝（SD90、SD165）

調査区内において、南北に走るやや規模の大きな溝が2本確認された。この溝は他の遺構と比較して遺物量が多く、帰属年代は12世紀後半～13世紀前半そして14世紀までと長期間にわたって機能していた可能性が高い。この溝は、遺構が集中する部分を南北に縦断しており、区画溝のような機能を有していたと考えられる。また、現在の集落配置の方向性とほぼ同じであり、中世から現代まで一貫した集落の方向性が存続しているという点で興味深い。

②中世土師器の特徴

時期特定の重要な手がかりとなる中世土師器は、調査面積に比して出土量は少ない。ロクロ成形のものは認められず、すべて非ロクロ成形で作られた土師器である。器種は、皿に限られる。帰属時期としては、12世紀後半から13世紀前半、14世紀、15世紀の大きく3時期ある。

12世紀後半～13世紀前半

この時期に属するものは、大半が口径が10cmに満たない小型のものである。タイプとしては、いわゆるコースター状のものが多い。扁平な底部を作ったのちにわずかに外反するようにして立ち上げる。底部内面と口縁部に向かって立ち上がる境目に、ナデによると思われる溝状の窪みが残るのが特徴である。

1点だけであるが、体部がやや厚みをもつものがある（Fig.27-3）。これは東保遺跡（東保高池遺跡）で数多く出土したものと形態的に似ており、胎土が橙色を呈し赤褐色の小砂粒を含むという点からも同じ製作地で作られたものである可能性が高い。

また、口径が10cmを超えるもの（Fig.34-105）には、体部に2段の横ナデが認められる。

14世紀

この時期に属する上師器皿でもっとも特徴的なのは、底部の内外面に強いナデによるものと思われる指頭圧痕（ユビオサエ）があることである。10（Fig.27）、25（Fig.28）、29（Fig.28）などに認められるもので、成形段階で残されたものであると思われる。例えば、型つくり技法（伊野：1995）で製作した場合、「粘土円板を木製の内側にあて、外面から押した結果」、外面下半に「ユビオサエ、または掌で押された痕」が残るという。本遺跡出土資料は、内面にも同様の指頭圧痕が残っていることから、型つくり技法で作られたものとはことなるように思われる。内外面とも指で押さえていることから、手づくね技法に近い方法で製作されたのであろうか。宮田進一氏によると、このような特徴をもつ土師器は県内では認められていないことから、久泉遺跡周辺もしくは庄川扇状地東部の限られた範囲で生産された地域色の強い土師器である可能性が高いといふ。

15世紀

22・23（Fig.28）は、口径約8cmを測る小型のものである。底部は小さく、体部はやや外反するように立ち上がる。23には、口縁端部に煤が付着していることから、灯明皿として使用されたものと考えられる。

（2）徳大寺家領般若野荘の盛衰

①徳大寺家領般若野荘の範囲（Fig.37）

般若野荘の範囲については、砺波市史における河合久則氏の見解をもとに記述をすすめることとする〔河合：1990〕。般若野荘は、砺波市東部を中心とし、南は庄川町三谷地区から高岡市中田地区までの広大な荘域であった。頼成の八田省吾氏所蔵の「安永七年中田組十村伊左衛門覚帳」（1778）によると、「一、文禄年中迄迄三谷谷内川太田ノ上ヲ西流行、夫故谷内川ヨリ西ハ庄下郷、東縁ハ般若郷ト云也」とある。これによると少なくとも文禄年間（1592～1596）頃までは、谷内川は太田の南で北流していたことになる。河合氏は、「中世の谷内川は、市内川内・五谷・寺尾を流下し、三谷を通って庄川の対岸太田の南辺に入り、ここより太田の東を北に流路をとり柳瀬

時代	西暦	年号	般若野莊内の出来事	般若野莊城の遺跡							城外				
				久 泉 遺 跡	東保 高池 造 跡	東保般 若堂 跡	秋元 窪田 島遺 跡	宮 森 廢 寺	正 権 寺 遺 跡	狐 塚 遺 跡	増 山 城 跡	高 道 向 島 遺 跡	大 門 遺 跡	中 村 イ シ ナ 遺 跡	南 高 木 遺 跡
平安時代	1100		この頃、般若野莊が成立か												
	1183	寿永2	平氏、般若野で敗れる(治承・寿永の源平争乱)												
鎌倉時代	1200														
	1221	承久3	般若野莊の合戦(承久の乱)												
(南北朝時代)	1300														
	1362	貞治1	二宮円阿が和田城を警固する												
室町時代	1393	明徳4	足利義満、般若野莊領家方の守護使不入を保証												
	1400														
	1412	応永19	東大寺造営の棟別銘が般若野莊に記される(一時に般若野莊が射水郡に属す?)												
	1456	康正2	般若野莊に造内裏段銘が記せられる												
	1474	文明6	徳大寺実淳、越中へ下向												
	1494	明応3	徳大寺家新が不知行となる												
(戦国時代)	1500														
	1506	永正3	長尾能景、芦谷野合戦で討死する												
	1545	天文14	徳大寺実通、般若野莊で殺害される												
	1581	天正9	織田方が増山城を焼き払う(佐々成政越中制圧)												
	1585	天正13	成政、秀吉に降伏												
	1600	慶長5	前田方、中川光重が増山城を守る												
江戸	1615	元和1	間ヶ原の戦い												
			一国一城令施行												

Tab.10 徳大寺家領般若野莊周辺の中世遺跡消長表

地区万遊寺後方で町川（下流は大井川）となり、秋元・西部金屋（高岡市）地区で現堂川につながり、この辺よりやや東に流路をとっていた」と推察されている。般若野莊の西辺が中世の谷内川に沿っていたものとされる所以である。平成14年度に久泉遺跡の西側、祖泉地内の試掘調査を実施した。この結果、祖泉神社西側辺りまでは遺構・遺物が検出されたが、旧千保川に近くなるにつれて地山レベルが緩やかに傾斜して下がり、遺構・遺物とも全くみられなくなった。このことによって本遺跡の西辺が明らかとなったわけであるが、今回の調査で検出された遺構・遺物の年代や性格を考慮すると、久泉遺跡西辺=般若野莊西辺と断定できないだろうか。

また、太田と三谷は現在の庄川によって東西に分断されているが、これは天正13年（1585）の大地震による河道東遷の結果であることを断っておかねばならない。

②般若野莊の成立

これまでの説によれば、知行国制が一般化し、縁故関係や成功によって国守が選任され、私的人脈によって国政が普遍化していった院政期にあって、徳大寺実能・公能父子が越中国の政務に深く関わっていることを考慮し、公能が越中国守となつた大治元年（1126）頃に般若野莊の成立を見るのが妥当であるとされている。これまでのところ12世紀前半に位置する遺跡は、莊城では発見されていない。12世紀後半になると本遺跡をはじめ、東保遺跡（東保高池遺跡）、狐塚遺跡が現れる。本遺跡は莊城西辺に位置し、東保遺跡（東保高池遺跡）はほぼ莊城中央部にあり、狐塚遺跡は和田川支流の坪野川左岸の中位段丘にある。

東保遺跡（東保高池遺跡）では、北陸自動車道建設に先立ち昭和46年に発掘調査が実施されている。3基の土坑から多量の土師器（皿を中心とする）や炭化物が検出されている。他には集石状遺構や、遺物では珠洲、青磁、須恵器などが検出された。土師器の年代は、12世紀後半から13世紀前半にかけてのものであり、口径約14cmと9cmの大小2種類の法量に分類される。多量の土師器が検出されたことや焼けた粘土塊などから土坑や集石状遺構は、墓あるいは祭祀に関わるものとの見方がある。土坑は土師器の焼成遺構の可能性もある。平成15年度に前回調査区の南約500mの場所で試掘調査を行ったが、同様に土師器が集中的に検出された。いずれの調査区も生活跡ではなく、このことから周辺一帯が多量の土師器を必要とした（消費した）地域であったことは間違いない。徳大寺家の支配力が強い時代に、なんらかの祭祀を行つたのであろうか。

本遺跡は莊城西辺にあるにもかかわらず、石組建物をはじめとした遺構が配置されていることが明らかとなった。年代的には東保遺跡（東保高池遺跡）と同じ頃に展開し始めることが注目される。ただし、東保遺跡（東保高池遺跡）の中世土師器皿とことなり外面に2段の強い撫でを施すものやいわゆるコースター型とよばれる底の浅いものが大半を占める。このことは、本遺跡では東保遺跡（東保高池遺跡）で行われていたような祭祀が存在せず、遺跡としての性格（機能）の違っていたと捉えるべきであろう。

この頃、般若野莊では幾度かの合戦が繰り広げられている。治承・寿永の源平争乱では、寿永2年（1183）、般若野莊に布陣していた平盛俊は源軍の今井兼平を迎え戦つており、承久の乱では、承久3年（1221）鎌倉方である名越（北条）朝時らの北陸道軍が般若野莊まで侵攻し、京方（後鳥羽上皇方）との合戦となつてゐる。



Fig.37 徳大寺家領般若莊域図 Scale=1/50,000

この図は国土地理院長の承認を得て同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである。(承認番号) 平15 北緯第290号

③莊域における下地中分

14世紀以降、越中国の徳大寺家領莊園の經營が不振に陥る。庚永元年（1342）には、般若野莊の南にある三谷寺が鎌倉覺圓寺塔頭蓮華院領となっている。また、武家勢力の台頭に伴い、徳大寺家領の莊園に、武家方の地頭などによって年貢の抑留・押領が起り双方の間に争論が絶えなかつた。そうした事態に対し、下地（土地）を折半して領家方・武家方にそれぞれ領有権を認め下地中分が行われた。明徳4年（1393）5月3日の足利義満御内書に「御家領越中国般若野莊領家方守護使不入事…」と、初めて「領家方」という表現がみえることから少なくともこの以前に下地中分がなされたとの見方が強い。

ここで問題となるのは、いつ頃どこまでが地頭方でどこからが領家方の支配地であったかということである。

その範囲を考える手がかりとして、室町幕府体制以前には千保川が砺波郡と射水郡の境となっていた可能性が高いという久保尚文氏の説がある。氏は、千保川以東を射水郡、以西を砺波郡としていたものであるとし、当該期には増山城は射水郡の領域にあるとしている。また、西部金屋地区（高岡市）は、永正3年（1506）の「常福寺梵鐘銘」にある「都波郡般若野莊地頭方」に比定される地域であり、このことについて氏は「この鐘銘には、いわば一向一揆方の政治、軍事的主張が込められているともいえるのではないだろうか」との見解を示している。

これに対し高森邦男氏は、般若野莊は領家方が砺波郡、地頭方が射水郡に属していたとの推論をされている。河合氏は、文明11年（1479）の「徳満庄寄進状」にある「徳満」（現在の徳万）は、室町幕府の直轄領のひとつである「御料所」であった可能性があること、そして下地中分の界線は少なくとも秋元を含む般若野莊の北部が地頭方、それ以南が領家方となっていたとの考えから、地頭方から移行したと考えられる室町幕府の料所の南限を徳方と柳瀬を結ぶ線であるとの見解を示されている。

12世紀後半から14世紀にかけて盛期を迎える本遺跡は、15世紀に入ると急速に衰退の一途を辿る。遺構密度は極端に減少し、遺物は土師器がわずかに検出されるという状態である。

対照的なのは15世紀に主体がある秋元窪田島遺跡である〔砺波市教委：1990〕。距離的には本遺跡から1.7km北に位置しており、中筋往来（県道高岡庄川線）によって結ばれる。平成元年（1989）に発掘調査が実施され、掘立柱建物、溝、土坑などの遺構、中国白磁、白磁、青磁、古瀬戸、珠洲、土師器などの遺物が検出されている。なかでもSK-1は秋元窪田島遺跡においてもっとも特徴的な遺構であり、瀬戸の壺、中世土師器皿、球状土製品が出土している。完形の中世土師器が据えられたように上向きに出上していることや、底部中央に焼成前穿孔する皿があること、そして礫が多量に詰まっている状況から、報告書では「祭祀に関係した宗教的色彩の強い遺構である」と記してある。

また、正権寺遺跡では建築物の基礎あるいは配石墓と考えられる遺構が検出されており、15世紀に位置付けられる。

ここで注目したいのは遺跡が位置する場所と、その年代である。河合氏の説では、室町幕府の料所の南限を徳方から柳瀬にかけてのラインであるとされており、この見解に従えば本遺跡は領家方の範囲に属し、秋元窪田島遺跡や正権寺遺跡は地頭方の範囲に属することになる。領家方と地頭方の支配地域を確定する史料はないが、15世紀代には衰退していく本遺跡に対し、15世紀に

中心がある秋元窪田島遺跡や正権寺遺跡という構団は、下地中分以降、勢力を拡大し支配地域を拡大する地頭方に対し、徐々に知行分が縮小し崩壊の道をたどる領家方という情勢に少なからず影響を受けたものと解釈することはできないだろうか。

(野原)

第5章　まとめ

最後に今回の発掘調査で得られた成果を総括し、そして次年度以降の調査展望について若干触れまとめとしたい。

【縄文時代中期中葉～後期前葉】

久泉遺跡は、庄川扇状地扇尖部で初めて発見された縄文遺跡である。これまで市域では岸谷野段丘以東の段丘・山地でしか縄文遺跡が発見されていなかったことから、縄文遺跡の分布を再考するものとして評価できる。

今回の調査では、土器量こそ少量であるものの打製石斧が多く出土した。石器組成が打製石斧のみで構成されることから、一般的な集落遺跡ではなく、根茎類や根菜類などの植物質食料を探集するための場であった可能性が考えられる。県内では早月川流域周辺や石川県手取川流域周辺で同様の遺跡が確認されており、今後も庄川扇状地を含めて遺跡数の増加が見込まれる。

【古代—奈良・平安時代】

古代に属する遺構は無く、遺物量もわずかばかりであった。出土した須恵器は、8世紀後半から9世紀にかけてのものとみられ、東大寺領莊園が開墾され扇状地上に遺跡が分布しはじめる時期と符合する。今回調査区の東側では、古代の遺構・遺物が圧倒的に多く確認していることから、次年度以降の調査では該期の資料も発見されることであろう。

【中世—鎌倉～室町時代】

中世では、扇状地東側から岸谷野段丘上までの広い範囲で徳大寺家領般若野荘が営まれており、本遺跡はその西端に位置する。今回の調査では、12世紀後半から13世紀前半と14世紀という2つの大きな盛行期が認められた。般若野荘が成立し、明徳4年（1393）までになされた領家方と地頭方による下地中分されるという時期であり、地頭方の台頭してくる時分には本遺跡では、ほとんど生活の痕跡がみられなくなってくる。おそらく領家方が南下したかもしくは知行力が低下したこと、そして地頭方との境が南下したことが大きな要因であると考えられる。久泉遺跡は、莊園成立期の東保遺跡（東保高池遺跡）と、下地中分後に地頭方が台頭した時期の秋元窪田島遺跡の間を埋めるものとして注目できる。

今回の発掘調査は、砺波市内における初めての大規模調査ということができる。これまでの点的な調査では知り得なかつた多くの情報を供与できたものと思っている。縄文遺跡が扇尖部に存在するということは、周辺の遺跡分布を大きく塗り替えるものであり、試掘調査を行う前は誰も予想だにできなかつた。また、般若野荘に関して地頭方と領家方の攻防に呼応するように遺跡が盛衰するという状況も非常に興味深いものであり、史的意義は大きいものと思われる。

今回の発掘調査は、平成15年度から平成17年度までの3カ年にかけて継続して実施される予定である。次年度以降、今回の調査では確認できなかつた東大寺領莊園に関連する成果が得られることを期待し、結語としたい。

（野原）

【参考文献】

- 安念幹倫 1991 「七 城跡群の遺物」
『富山県指定史跡 増山城跡調査報告書』 研波市教育委員会・研波郷土資料館
- 伊野近富 1987 「「かわらけ」考」『京都府推進文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 伊野近富 1995 「上器器皿」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
- 池野正男 1987 「射水丘陵における8世紀後半の須恵器窯跡」『大坂』第11号 富山考古学会
- 今村啓爾 1989 「群集貯藏穴と打製石斧」『考古学と民俗学』 大興出版
- 魚津市教育委員会 1997 「富山県魚津市山下II遺跡発掘調査報告書」
- 魚津市教育委員会 2000 「富山県魚津市吉野遺跡発掘調査報告書」
- 越前慎子 1996 「第IV章考察 1 梅原胡摩堂遺跡出土中世土器類の編年」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書』 (遺物編) 一東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ-1 (財)富山県文化振興財団
- 小川英文 2000 「第9章 狩猟採集社会と農耕社会の交流: 相互関係の視角」
『現代の考古学5 交流の考古学』 小川英文編 朝倉書店
- 岡本恭一 1991 「第6章 石製品」『栗田遺跡発掘調査報告書』 (社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 神鷹利夫 1990 「砺波市宮村とその周辺の地形地質」『砺波歴史研究所研究紀要 第8号』
- 河合久則 1990 「二、總大寺家領般若野莊について」
『砺波市史 資料編1 考古 古代・中世』 砧波市史編纂委員会編
- 川口武彦 2000 「打製石斧の実験考古学的研究—縄文時代中期における土壙り具の使用時間—」
『古代文化』 VOL.52 (財)古代学協会
- 川口武彦 1997 「縄文時代中期における石器製作技術の再検討—植物採集・加工石器を中心として—」
『筑波大学先史学・考古学研究 第8号』 筑波大学歴史・人類学系
- 経済企画庁 1970 「土地分類基本調査(右動)」
- 小杉 康 2001 「第2章 縄文時代の集団と社会組織」
『現代の考古学6 村落と社会の考古学』 高橋義三郎編 朝倉書店
- 古代の土器研究会 2001 「古代の土器研究—須恵器の製作技法とその転換—」
- 小林公明 1991 「新石器的石器の製作技術—扁平円錐の削り方をめぐって—」『季刊考古学』第35号 雄山閣
- 小山修三 2000 「採集と栽培のはざま」「古代史の論点1 環境と食料生産」 小学館
- 佐伯安一 1979 「砺波市」「角川日本地名大辞典 16 富山県」 角川書店
- 酒井重洋 1998 「中世土器器の分類について」『富山考古学研究』創刊号 (財)富山県文化振興財団
- 柳原滋高 2001 「柱穴の調査方法を考える」「据立と堅穴」
- 塙田明弘 2002 「越中(富山県)の様相」「中世北陸の城館と寺院」北陸中世考古学研究会
- 鈴木大郎 1983 「打製石斧」『縄文文化の研究7』 雄山閣
- 鈴木道之助 1991 「石器入門事典 縄文」 柏書房
- 柏櫻山村史料刊行会 1976 「柏櫻山村史」
- 高岡 樹 1990 「増山城と中世の城館」『砺波市史資料編1 考古・古代・中世』 砧波市史編纂委員会

- 高岡市教育委員会 2001 「石塚遺跡・東木津遺跡発掘調査報告」
- 砺波市教育委員会 1978 「富山県砺波市梅ヶ野遺跡群子爵調査概要」
- 砺波市教育委員会 1990 「秋元遺跡発掘調査報告書」
- 砺波市教育委員会 1999 「高道向島遺跡」
- 砺波市教育委員会 2003 「増山城跡発掘調査報告」(林道増山城跡線拡幅工事に伴う発掘調査報告書)
- 砺波市史編纂委員会他 1962 「砺波市福山〈徳万赤坂〉須恵器窯発掘報告」
- 外山秀一 1997 「プラント・オーパールからみた砺波平野の土地利用と黒土層の特性」
『砺波散村地域研究所研究紀要 第14号』
- 富山県 1992 「10万分の1富山県地質図説明書」
- (財)富山県文化振興財団 1996 「梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告(遺構編)」・「梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告(遺物編)」
- (衝)富山県文化振興財団 2002 「清水島Ⅱ遺跡・中名Ⅱ遺跡・持田Ⅰ遺跡発掘調査報告」
- (衝)富山県文化振興財団 2002 「石名田木舟遺跡発掘調査報告」
- (衝)富山県文化振興財団 2003 「江尻遺跡・義鳥遺跡発掘調査報告」
- (衝)富山県文化振興財団 2003 「中名Ⅰ・V遺跡発掘調査報告」
- 富山市教育委員会 2000 「富山市上新保遺跡発掘調査報告」
- 富山地学会編 1986 「富山県の地形・地質」
- 西井龍儀 1985 「砺波平野進出の足跡—周辺地域の考古資料から—」
『砺波散村地域研究所研究紀要』第2号
- 西井龍儀 1990 「第1章 旧石器」・「砺波市史資料編 I 考古、古代・中世」 砺波市史編纂委員会編
- 西井龍儀 1992 「砺波市久泉・光園寺古墓の調査」・「砺波散村地域研究所研究紀要」第10号
- 西井龍儀 1994 「利波郡における分室とその背景」・「北陸古代土器研究」第4号
- 西田正規 1989 「IUP考古学選書13 縄文の生態史論」
- 林 謙作 2001 「縄文時代の聚落と領域」・「縄文社会の考古学」 同成社
- 福岡町教育委員会 2002 「木舟城跡発掘調査報告」
- 森井昭二 1967 「50000分の1 姥屋地質図 砺波」 富山県
- 藤尾慎一郎 1993 「生糞からみた縄文から弥生」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集
- 藤尾慎一郎 2003 「第4章 縄文時代の雜穀・穀物栽培—縄文後・晩期稻作の実態—」
『弥生変革期の考古学』 同成社
- 藤澤良祐 1997 「中世瀬戸窯の動態」(財)瀬戸市星戸文化財センター 研究紀要第5輯
- 麻柄一志 1984 「縄文時代の石器組成と植生—いわゆる「ナラ林文化論」へのアプローチとして—」
『人境』第8号 富山考古学会
- 麻柄一志 2003 「打製石斧が使われた場所」・「考古学に学ぶ II」(同志社大学考古学シリーズⅢ)
- 宮田進一 1997 「第2節 越中国における土師器の經年」・「中・近世の北陸」北陸中世土器研究会
- 宮本一夫 2000 「縄文農耕と縄文社会」・「古代史の論点1 環境と食料生産」 小学館
- 山田康弘 1999 「第5章 縄文から弥生へ—動植物の管理と食糧生産—」
『現代の考古学3 食料生産社会の考古学』 常木 見編 朝倉書店
- 山木 薫 1989 「縄文時代の石器製作における石材の利用について」
『筑波大学先史学・考古学研究 第1号』 筑波大学歴史・人類学系

- 山本直人 1985 「石川県における打製石斧について」『石川考古学研究会々誌』第28号 石川考古学研究会
- 山本直人 1990 「縄文時代地域社会論に関する一試論—手取川水系を中心として—」
『古代文化』VOL. 42, 12
- 山本直人 1995 「縄文時代におけるクズ食糧化の基礎的研究—宝達島を中心として—」
『石川考古学研究会々誌』第38号 石川考古学研究会
- 山本直人 1996 「縄文時代における野生松葉餅食糧化の民俗考古学的研究—クズとワラビを中心として—」
『石川考古学研究会々誌』第39号 石川考古学研究会
- 山本正敏 1996 「2. 縄文時代の石器」「梅原湖摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)」—東海北陸自動車道建設に
伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ—(Ⅱ)富山県文化振興財团
- 山本正敏 2001 「富山県における縄文時代集落の諸相」
『列島における縄文社会集落の諸様相』縄文時代文化研究会
- 古岡康暢 1971 「石川県下野遺跡の研究」『考古学雑誌』第56巻 第4号 日本考古学協会
- 古岡康暢 1994 「第2章 珠洲陶器の編年的研究」「中世須恵器の研究」古川弘文館
- 渡辺誠 1975 「食料獲得」『考古学ジャーナル』100



写真図版



PL. 1 A-1 調査区(下層)空中写真 (上方向が東)